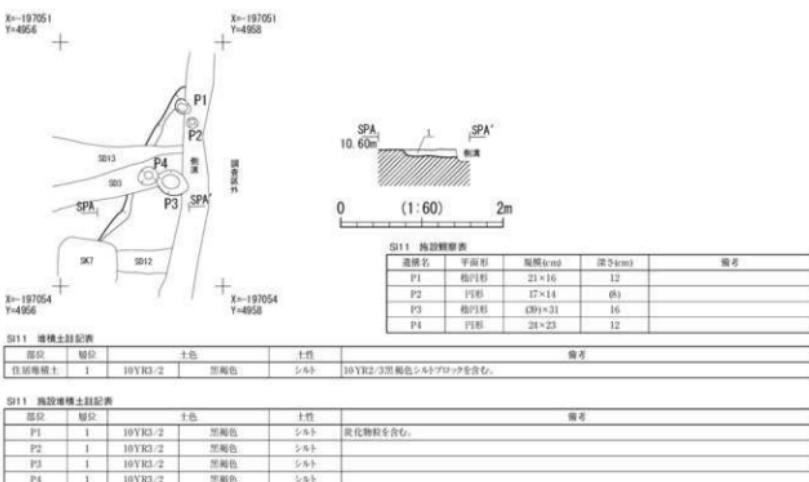


第66図 SI7 穫穴住居跡出土遺物



第67図 SI11 穫穴住居跡

[壁面] 検出された範囲の壁面は直線的に大きく外傾して立ち上がり、残存する壁高は10cm前後を測る。

[床面] 概ね平坦である。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

[柱穴] 14基検出された。いずれも堆積土は黒褐色シルトの単層で、柱痕跡は認められない。規模は様々で、平面形状はいずれも円形ないし梢円形を呈する。

[出土遺物] 堆積土中より土師器片が出土しているが、掲載した遺物は無い。

SI12 積穴住居跡(第68・69図)

[位置・確認] I区南半部南側、H-I-3・4グリッド、SI3の直下に位置する。南壁の一部を含む南半部が検出された。

[重複] SI3、SD 17Bに切られる。本竪穴住居跡は、SI3の直下に同軸・同規模・構築されたものであるが、SD 17Bを含めた重複関係から、SI3とは建て替え等の関係性を見出し難い。この点については、SI3の項を参照されたい。

[規模・形態] 検出された範囲の規模は南北463cm、東西537cmを測り、平面形状は方形ないし隅丸方形を呈するものと推測される。南壁を除く三方は調査区外や重複構造および搅乱の影響で確認されず、全体の規模や形態については不明な点が多いが、わずかに検出された南西コーナーの状況からみて、隅丸の方形ないしは長方形を基調とするものと推測される。

[方向] 南壁基準でN-74°-Eである。

[堆積土] 4層に分層された。1～3層は暗褐色シルトを主体とする住居堆積土、4層は暗褐色粘土質シルトの周溝内堆積土である。

[壁面] 検出された範囲の壁面は直線的に外傾して立ち上がり、残存する壁高は10～17cmを測る。

[床面] 東西方向にわずかな起伏がみられるものの、概ね平坦である。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

[柱穴] 8基検出された。いずれのピットにも柱痕跡は認められない。規模・形態は様々で、位置関係をみても不明な点が多い。P5・P6はについては、平面形状が不整な梢円形を呈する土坑となる可能性がある。

[周溝] 検出された範囲においては、南西コーナーを除き、南壁に沿って周る。規模は幅14～29cm、深さ5～8cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。

[出土遺物] 土師器壺・甕、敲石を各1点掲載した(第69図)。堆積土から出土した1には、SD 17A堆積土から出土した破片と構造間の接合関係が認められた。内外面共に体部と底部の境界に段を持ち、直線的に外傾する体部から短く直立する口縁部へといたる器形を呈し、器厚は底部から体部上方に向かって厚くなる。外面体部には明瞭な輪積み痕が観察される。床面と堆積土からの出土破片が接合した2は外縁の頸部と副部の境界に段を持つもので、最大径は副部下半に位置するものと推定される。3は拳大の梢円窓を素材としたもので、長軸の両端に相当するb-c面に敲打痕が認められ、c面は敲打により平坦な面が形成される。石材は石英安山岩である。

SI13 積穴住居跡(第70～74図)

[位置・確認] II区北端部、F-Iグリッドに位置する。煙出し部先端はわずかに調査区外にかかる。

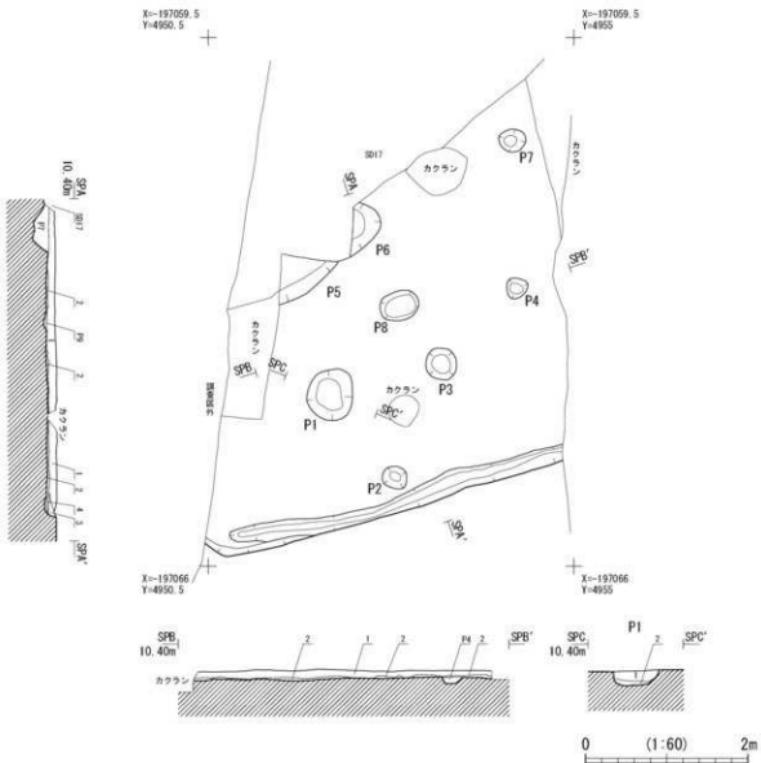
[重複] SI14に切られる。北西コーナーはSI14と搅乱に、南東コーナーは搅乱により失われている。

[規模・形態] 検出された範囲の規模は、南北515cm、東西550cmを測り、平面形状は隅丸方形を呈する。

[方向] カマド煙道部基準でN-7°-Eである。

[堆積土] 18層に分層された。1～3層は住居堆積土、4～14層はカマド関連層位、15層は周溝内堆積土、16～18層はカマド袖部構築土である。いずれも黒褐色シルトを主体とし、にぶい黄褐色土ブロックや炭化物粒・焼土粒を含む層が多い。

[壁面] 検出された範囲の壁面は内湾気味に立ち上がる。残存する壁高は、概ね10cm前後を測る。



SI12 施設構造物記表

部位	層位	土色	土性	参考
住居堆積土	1 10YR3-3	暗褐色	シルト	炭化物粒・マンガン鉱を含む。
	2 10YR5-4	にじ・黄褐色	シルト	10YR4-2灰黃褐色粘土ブロックを含む。
	3 10YR3-4	暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒・壤土鉱・鐵質に炭化鉄を含む。
周溝	4 10YR3-3	暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒・壤土鉱を含む。

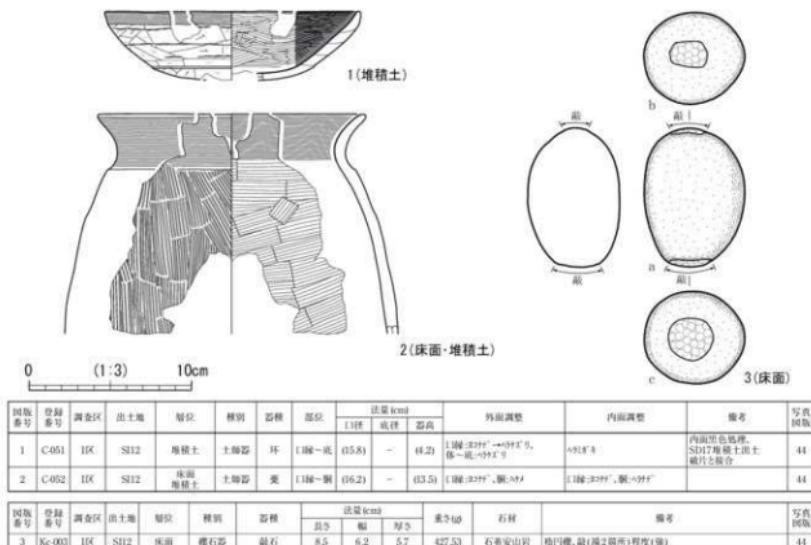
SI12 施設構造物記表

部位	層位	土色	土性	参考
P1	1 10YR4-4	褐色	シルト	炭化物粒・壤土鉱を含む。
	2 10YR4-2	灰黃褐色	シルト	壤土ブロックを含む。
P2	1 10YR3-4	暗褐色	シルト	炭化物粒を含む。
P3	1 10YR3-4	暗褐色	シルト	壤土鉱を含む。
P4	1 10YR4-3	にじ・黄褐色	シルト	炭化物粒を含む。
P5	1 10YR3-4	暗褐色	シルト	10YR5-6暗褐色シルトブロック・炭化物粒を含む。
P6	1 10YR3-2	黒褐色	シルト	炭化物粒・壤土鉱に炭化鉄を含む。
P7	1 10YR4-4	褐色	シルト	マンガン鉱を含む。
P8	1 -	-	-	新面開拓なし。

SI12 施設構造物記表

遺構名	平面形	復元(cm)	深さ(cm)	備考	遺構名	平面形	復元(cm)	深さ(cm)	備考
P1	椭円形	62×56	21		P5	不明	(52)×(55)	14	
P2	渦丸方形	30×26	13		P6	楕円形*	(53)×(55)	18	
P3	-	39×37	12		P7	円形	33×27	9	
P4	不整形	28×26	6		P8	楕円形	48×36	6	

第68図 SI12竪穴住居跡



第69図 S112堅穴住居跡出土遺物

[床面]中央部にわずかな起伏がみられる。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

[柱穴]8基検出された。これらのうち柱痕跡が認められたのはP2のみであるが、位置や規模からみてP2・P5・P7・P9が主柱穴に相当すると考えられ、P5はカマドに近接することから、P4についてもその可能性がある。柱間寸法は、P2・P5、P7・P9が共に約220cm、P2・P7が約190cm、P5・P9が約170cmを測る。なお、P2・P4およびP4・P7の柱間寸法は、いずれも約170cmを測る。P10は北東コーナーの周溝内に位置する。また、北東コーナーに近接するP8は他の7基と比較して規模も大きく、カマド東側に位置することや堆积土内に焼土を多量に含むことから、カマドに関連する土坑的な性格が考えられる。

[周溝]検出された範囲においては、カマド周辺と南東・北西コーナー部を除き、壁面に沿って全周する。規模は幅12~33cm、深さ7~12cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。

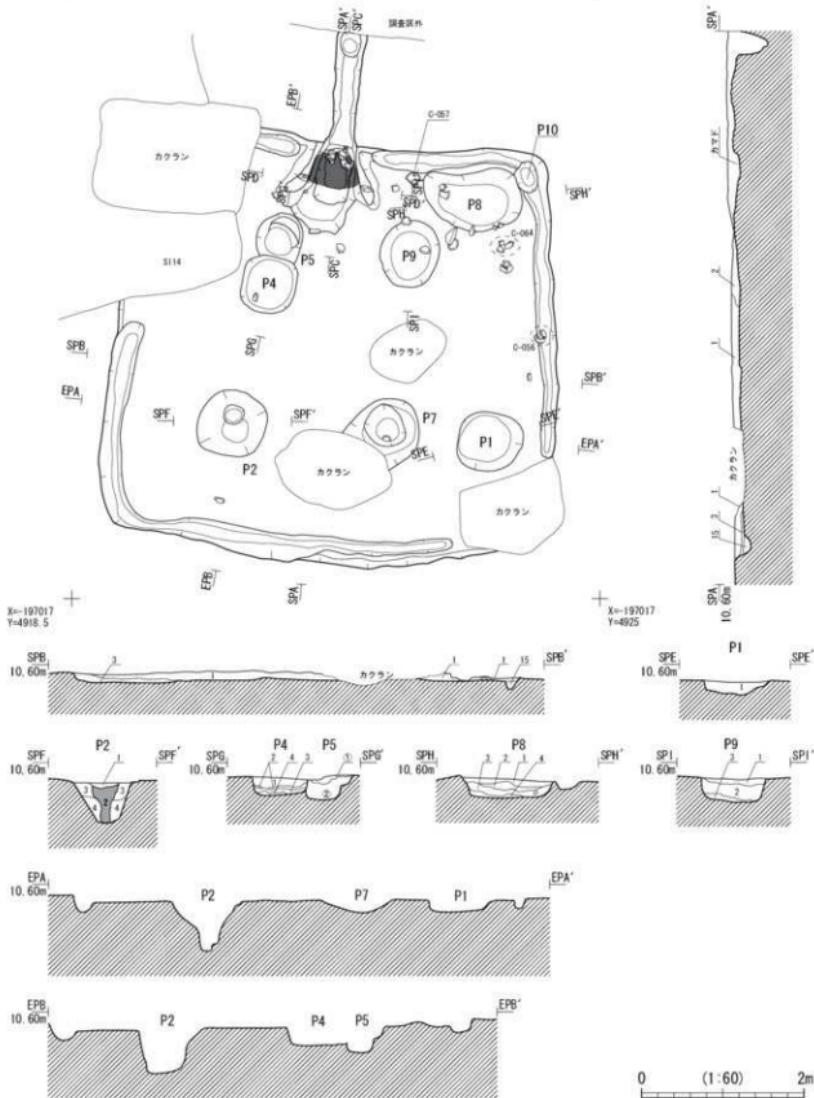
[カマド]北壁中央部に位置し、壁面には直交して付設される。袖部の規模は、西袖が長さ約90cm、幅約30cm、東袖が長さ約80cm、幅約30cmを測り、北壁から「ハ」字状に延びる。また、両袖部には幅約10cm、厚さ7cm程の扁平な自然繊が芯材として用いられており、いずれも燃焼部側の側面に被熱の痕跡が認められる。石材は石英安山岩質凝灰岩である。

燃焼部の規模は、幅35~75cm、奥行き110cmを測る。底面は皿状に窪み、奥壁側には南北40×東西60cmを測る被熱範囲が認められた。この被熱範囲内からは、長さ約20cm、幅10cm前後、厚さ6cm程の扁平な楕円盤を素材とした支脚2点が東西方向に並んで直立した状態で出土した。この2点はいずれも被熱の痕跡が認められ、また東側の櫛(第74図-4)には加工が施されている。

煙道部は、検出された規模で長さ140cm、幅25~32cm、深さ5~15cmを測る。底面は中央部に高まりを持ち、煙出し部に向かって緩やかに下る。東西方向の断面形状は、底面が丸みを帯び、東壁が直立気味に、西壁が内湾し

X=197009.5
Y=4918.5

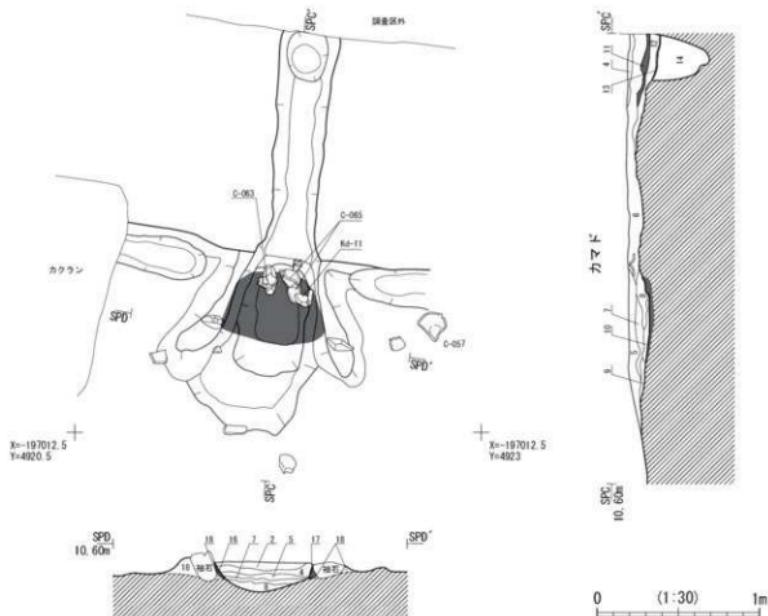
X=197009.5
Y=4925



第70図 SI13堅穴住居跡(1)

X=197009.5
Y=4920.5

X=197009.5
Y=4923



SI13 地質土質記表

部位	層位	土色	土性	参考
住居堆積土	1	10YR3/3	黒褐色	シルト 炭化物鉱・鐵土鉱を含む。
	2	10YR3/2	黒褐色	シルト 10YR5-1に黒褐色土ブロック・鐵土鉱を含む。
	3	10YR2/2	黒褐色	シルト 10YR5-4に5-6 黃褐色土ブロック・炭化物鉱を含む。
カマド	4	10YR3/2	黒褐色	シルト 鐵土鉱を含む。
	5	10YR3/2	黒褐色	シルト 炭化物鉱・鐵土鉱を含む。
	6	10YR3/3	黒褐色	シルト 10YR5-3に5-6 黃褐色土を斑状に、炭化物鉱・鐵土鉱を含む。
	7	5YR3/2	暗褐色	シルト 炭化物鉱・鐵土鉱を含む。
	8	5YR3/1	黒褐色	シルト 斑状に鐵土鉱を含む。
	9	7.5YR3/1	黒褐色	シルト 炭化物鉱・鐵土鉱を含む。
	10	10YR3/3	黒褐色	シルト 斑状に鐵土鉱を含む。
	11	7.5YR2/2	黒褐色	シルト 10YR5-3に5-6 黃褐色土ブロック・炭化物鉱を含む。
窓溝	12	7.5YR2/2	黒褐色	シルト 10YR5-3に5-6 黃褐色土ブロックを多量含む。
	13	7.5YR2/2	黒褐色	シルト 鐵土鉱。
	14	10YR3/2	黒褐色	シルト 炭化物鉱を含む。
カマド跡	15	10YR3/2	黒褐色	シルト 炭化物鉱・鐵土鉱を含む。
	16	2.5YR4/4	12.45-6 黄褐色	シルト (被熱碳化面)
	17	5YR3/1	黒褐色	シルト (被熱面)
	18	10YR4/1	褐紅色	— 10YR5-4に5-6 黃褐色土を含む。

SI13 施設堆積土質記表(1)

部位	層位	土色	土性	参考
P1	1	10YR3/2	黒褐色	シルト 10YR5-4に5-6 黄褐色土ブロックを含む。
	1	10YR3/2	黒褐色	シルト
	2	10YR5/4	12.45-6 黄褐色	シルト 斑状に10YR3-2 黑褐色土を多量含む。(柱前跡)
	3	10YR5/4	12.45-6 黄褐色	シルト 斑状に10YR3-2 黑褐色土を少量含む。
P2	4	10YR5/4	12.45-6 黄褐色	シルト 斑状に10YR3-2 黑褐色土を微量含む。
P3	—	—	—	灰土。

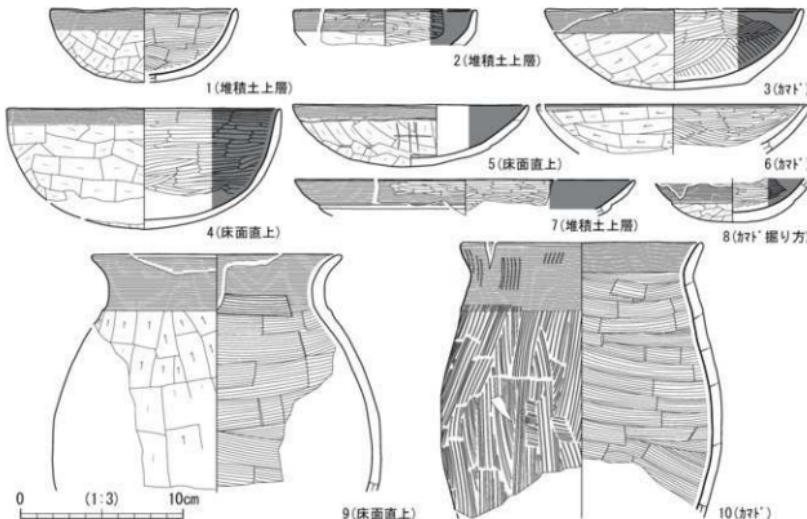
第71図 SI13堅穴住居跡(2)

SI13 施設堆積土剖面記表(2)

部段	層段	土色	土性	備考
P4	1	10YR6/4 に5y-黄褐色	シルト	斑状: 10YR7/2に5y-黄褐色土を含む。
	2	10YR2/2 黒褐色	シルト	炭化物・焼土粒を含む。
	3	10YR3/2 黒褐色	シルト	10YR6/4に5y-黄褐色土ブロック・炭化物・焼土粒を含む。
	4	10YR3/2 黒褐色	シルト	10YR6/4に5y-黄褐色土ブロック・炭化物・焼土粒を含む。
P5	①	10YR3/2 黒褐色	シルト	10YR5/4に5y-黄褐色土ブロック・焼土を含む。
	②	10YR5/4 に5y-黄褐色	シルト	10YR3/2黒褐色土ブロックを含む。
P6	-	-	-	欠番
P7	1	2.5Y3/1 黒褐色	-	ダラ化。
P8	1	-	-	焼土粒多量含む。
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	10YR5/4に5y-黄褐色土ブロックを多量、焼土粒を含む。
	3	5YR3/2 暗赤褐色	-	炭化物、多量の焼土ブロックを含む。
	4	10YR6/4 に5y-黄褐色	-	-
P9	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	上面に炭化物集積がある。
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	10YR5/4に5y-黄褐色土ブロックを多量、炭化物を含む。
	3	10YR2/1 黑色	-	炭化物弱、10YR5/4に5y-黄褐色土ブロック・焼土粒を含む。
P10	-	-	-	断面削り。

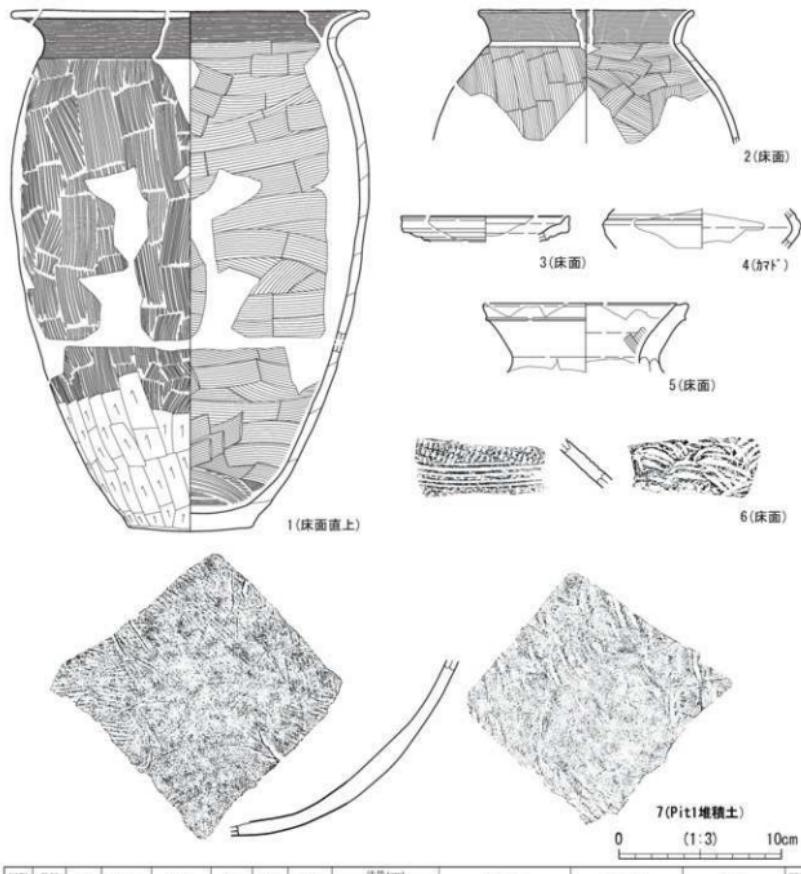
SI13 施設断面表

遺構名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備考	遺構名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備考
P1	調丸方形	79×73	15		P6	-	-	-	欠番
P2	丸丸方形	81×79	60		P7	扇円形 ^a	80×67	19	欠番
P3	-	-	-	欠番	P8	不整形	148×90	26	
P4	丸丸方形	69×66	22		P9	扇円形	82×72	32	
P5	扇円形	65×55	32		P10	扇円形	69×37	11	



国版番号	登録番号	調査区	出土場	層位	種別	器種	部狀	法量(cm)	外側調整	内面調整	備考	写真回数	
1	C-054	IIK	SE13	堆積土上層	土加器	环	口縁-底	(1.6)	-	4.5	11縁:3.2cm ^b 、底-底-~9.7cm ^c	内外面削減	45
2	C-060	IIK	SE13	堆積土上層	土加器	环	口縁-底	(1.4)	(2.2)	11縁:3.2cm ^b 、底-底-~9.7cm ^c	内面黒色処理	45	
3	C-055	IIK	SE13	付 ^d	土加器	环	口縁-底	16.0	-	5.0	11縁:3.2cm ^b 、底-底-~9.7cm ^c	内面黒色処理	45
4	C-056	IIK	SE13	床面直上	土加器	环	口縁-底	(6.8)	-	7.4	11縁:3.2cm ^b 、底-底-~9.7cm ^c	内面黒色処理	45
5	C-057	IIK	SE13	床面直上	土加器	环	口縁-底	(4.6)	-	3.8	11縁:3.2cm ^b 、底-底-~9.7cm ^c	外周:3.2cm ^b 、底-底-~9.7cm ^c	45
6	C-058	IIK	SE13	付 ^d	土加器	环	口縁-底	(7.0)	-	(0.0)	11縁:3.2cm ^b 、底-底-~9.7cm ^c	外周:3.2cm ^b 、底-底-~9.7cm ^c	45
7	C-061	IIK	SE13	堆積土上層	土加器	环	口縁-底	(2.0)	-	(2.2)	11縁:3.2cm ^b 、底-底-~9.7cm ^c	内面黒色処理、盤か	45
8	C-059	IIK	SE13	付 ^d 剥 ^e 方	土加器	环	口縁-底	-	-	(2.7)	11縁:3.2cm ^b 、底-底-~9.7cm ^c	内面黒色処理、盤か	45
9	C-064	IIK	SE13	床面直上	土加器	环	口縁-底	(5.5)	-	(4.6)	11縁:3.2cm ^b 、底-底-~9.7cm ^c	外周被熱	45
10	C-063	IIK	SE13	付 ^d	土加器	环	口縁-底	(5.0)	-	(5.9)	11縁:3.2cm ^b 、底-底-~9.7cm ^c	外周被熱	45

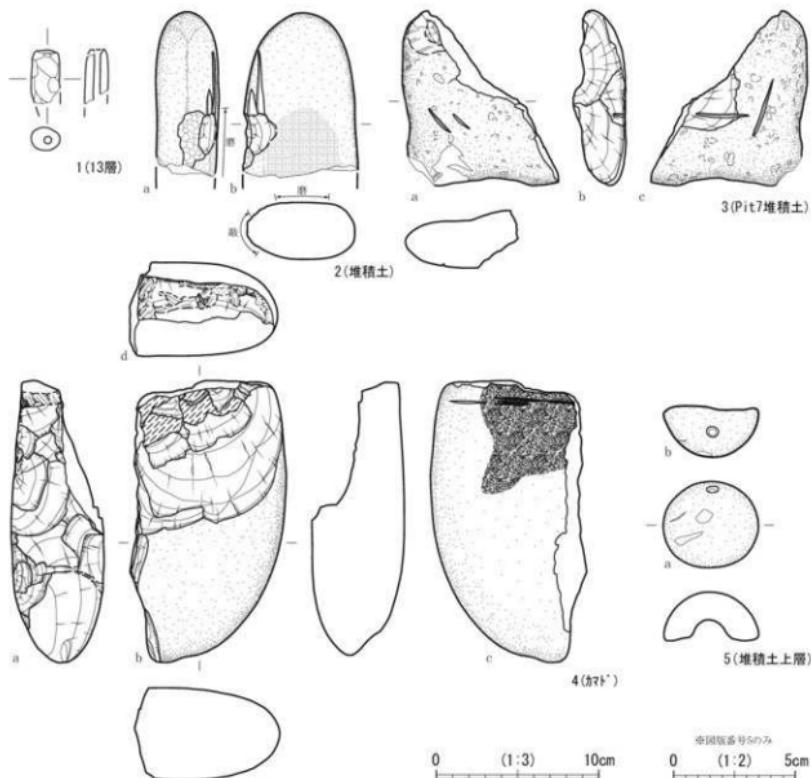
第72図 SI13堅穴住跡出土遺物(1)



第73図 SI13竪穴住居跡出土遺物(2)

て立ち上がる。煙出し部の北側はわずかに調査区外に延びるが、検出された範囲の規模は上端径29×25cm、深さ41cmを測り、ピット状に落ち込む。

[出土遺物]本竪穴住居跡からは、多くの遺物が出土した。それらのうち、土師器坏8点・甕4点、須恵器甕1点・



図版番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	特徴-備考	写真回数
							長	幅	厚			
1	P-005	IIK	S113	13層	土製品	土鉢	Ø21	1.8	1.9	(8.2)	細面調整	45
図版番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	法量(cm)			石材	備考	写真回数
							長	幅	厚			
2	Ke-001	IIK	S113	堆積土	石器	磨+敲	(10.0)	6.9	3.8	629.66	右奥安山岩 欠損品、唇(平)底(圓)側(斜)程度(強)、刃物痕あり	46
3	Kd-012	IIK	S113	Pit7 堆積土	石製品	刃物(?)と斧頭 のあわせ合	10.3	8.1	3.6	182.90	右奥安山岩質 無刃部	46
4	Kd-011	IIK	S113	砂?	石製品	支脚	17.3	9.7	5.7	637.75	右奥安山岩質 無刃部、上端部+左側縁加工、刃物痕あり、被熱あり	46
5	Kd-010	IIK	S113	堆積土 上層	石製品	不明石製品	3.9	1.6	1.2	21.36	右奥安山岩質 無刃部	46

第74図 S113堅穴住居跡出土遺物(3)

壺?1点、甕3点、土鉢1点、礫石器1点、石製品3点を掲載した(第72~74図)。

第72図-1~8の土師器は、出土層位こそ異なるものの、口縁部が幅狭で体部が内湾し、外面の口縁部と体部の境界に特徴的な明瞭な稜や段を持たないものが多い。中にはヨコナデが施された幅広な口縁部とその下端に設けられた段の大部分にヘラケズギリが施され、あたかもヨコナデと段が消されたかのような状況を呈するもの(5)も認められる。唯一内面にヘラナダが施され、胎土に赤色粒子を含む1を除く7点は、内外面共にはば同様の調整が施され、また胎土についても小珠や石英、海綿骨針を含む同質のものである。

土師器壺4点(第72図-9・10、第73図-1・2)については、最大径が胴部の中位に位置するもの(第72図-9・10)と胴部上位に位置するもの(第73図-1)が認められる。また、口縁部形態は第72図-10のみ他の3点と異なり、胴部の境界には段を持たず、口縁部も直線的に外傾する。これ以外の3点はいずれも口縁部が外反し、第73図-1・2は外面口縁部上端にわずかな括れを持つ。

須恵器5点はすべて破片資料で、第73図-3・4は、それぞれ龜、壺の肩部と目されるが判然としない。同図-5は口縁部に頬が付く壺、同図-6は格子タタキ目の後に5条1單位と推定される平行沈線が施される。

第74図-1は、煙出し部堆積土から出土した土錘である。やや扁平な円筒形を呈し、孔は中央からやや外れた箇所に設けられる。同図-2は堆積土から出土した磨痕と敲打痕が残存する砾石器で、a面には刃先が垂直に接触したような状況を呈する刃物痕のほか、強い敲打痕および敲打に伴う損傷の剥離面が、またb面の中央には磨痕がそれ認められる。石材は石英安山岩である。

3点掲載した石製品(同図-3～5)のうち、3はPit7堆積土から出土したもので、a面側からの打撃により扁平で不整形な礫が分割された後にa・c面の中央部に刃物によるものと考えられる条痕が各2条形成される。カマド支脚(4)は人頭大の楕円礫を素材としており、計画性のある製作過程が見出せるものである。分割により平坦面d面が形成された後、a面の左側縁側からは連続的に粗い二次加工が、また右側縁側からは細かい加工が施され、a面上半には直線的な柱状部が形成される。その後、d面の厚みを減らす作業が行われ、最後にa・d面の角張った部分が工具により削り落とされる。c面上部には刃物による条痕が認められるが、この由来については判然としない。d面は一部磨滅しているが、これは機能時の影響が大きいものと推測される。割れた砾片を素材とした用道不明石製品(5)の加工は、b面中央に施された径5mmの穿孔のみで貫通はしていない。横断面の凹部はノジュールが外れた痕跡である。3～5の石材は、いずれも石英安山岩質凝灰岩である。

SI14 壁穴住居跡(第75・76図)

[位置・確認]Ⅱ区北端部、E・F-1グリッドに位置する。南東側約1/4が検出された。残る大部分は調査区外にかかる。

[重複]SI13を切り、SE1に切られる。また、検出された部分の全域において搅乱の影響が大きい。

[規模・形態]検出された範囲の規模は、南北392cm、東西390cmを測り、平面形状は隅丸方形を呈するものと推測される。

[方向]東壁基準でN-12°-Wである。

[堆積土]3層に分層された。1・2層は住居堆積土で、1層は褐灰色グライ土、2層はにぶい黄褐色シルトブロックを含む。3層は周溝内堆積土で、酸化鉄を斑状に含む。

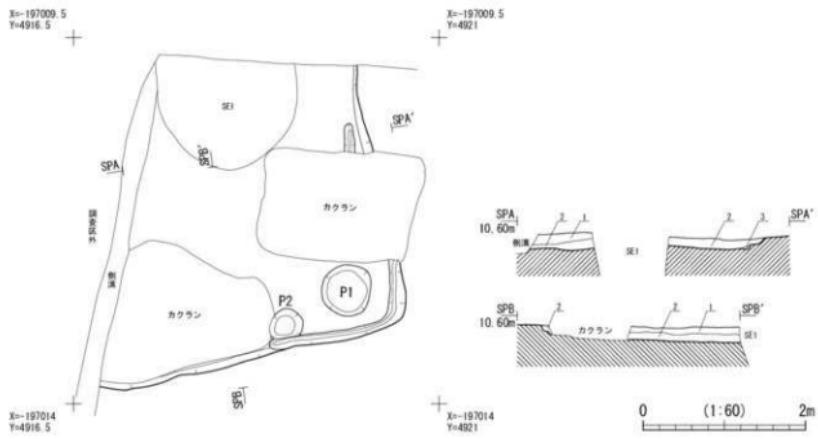
[壁面]検出された範囲の壁面は、直線的に大きく外傾して立ち上がる。残存する壁高は、東壁12cm、南壁16cmを測る。

[床面]緩やかな起伏が認められる。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

[柱穴]南東コーナー付近から2基検出された。いずれも柱痕跡は認められず、柱穴であるか否かは不明である。P2は堆積土中に多量の炭化物および焼土粒を含む。

[周溝]検出された範囲においては、南東コーナー周辺では壁面に沿って周り、東壁北側では壁のやや内側を周る。規模は幅10～20cm、深さ4～9cmを測り、断面形状はU字状を呈する。

[出土遺物]床面直上から出土した台石1点を掲載した(第76図)。円礫を素材としたもので、片面中央に浅い敲打痕が認められる。石材は石英安山岩質凝灰岩である。



SI14 埋積土記表

部位	層位	土色	土性	備考
住居堆積土	1	10YR3/1	黒褐色	シルト 10YR4/1 黒褐色グレイを含む。
	2	10YR3/1	黒褐色	シルト 10YR5/4にかけて 黒褐色シルトブロックを含む。
廻溝	3	10YR4/3	にじみ 黑褐色	粘土質シルト 廻溝に堆積土を含む。

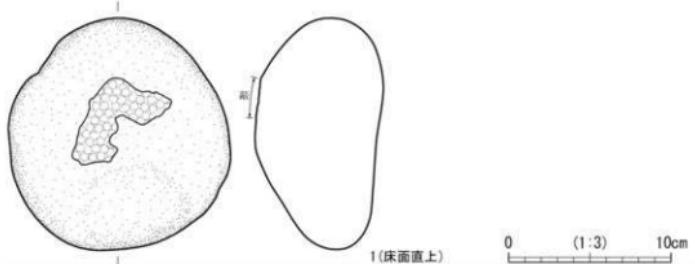
SI14 施設堆積土記表

部位	層位	土色	土性	備考
P1	1	10YR3/3	暗褐色	シルト 10YR5/6 黄褐色シルト-10YH4/2 黄褐色粘土を含む。
P2	1	10YR3/3	暗褐色	シルト 10YR5/6 黄褐色シルト-10YH4/2 黄褐色粘土。多量の炭化物、焼土を含む。

SI14 施設観察表

遺構名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備考	遺構名2	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備考
P1	円形	64×62	9		P2	円形	39×44	4	

第75図 SI14 穫穴住居跡



取扱 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	柱頭	柱脚	芯材	法量(cm)			重さ(t)	石材	備考	写真 回数
								長さ	幅	厚さ				
1	Kc-005	BR	SI14	床面上	礫石器	台石	15.3	13.6	7.8	1232.36	石英安山岩 凝灰岩	円錐、最上面1箇所程度(弱)	46	

第76図 SI14 穫穴住居跡出土遺物

SI15 穫穴遺構(第77図)

[位置・確認] II区北端部、F-1 グリッドに位置する。南壁際の一部のみが検出された。ほぼ全域が調査区外にかかる。検出範囲においてはカマドや柱穴、周溝が伴わないことから「竪穴遺構」として記載するが、遺構の略号と番号は調査時に付したものを使っている。

[重複]検出された範囲においては、他遺構との重複関係は無い。

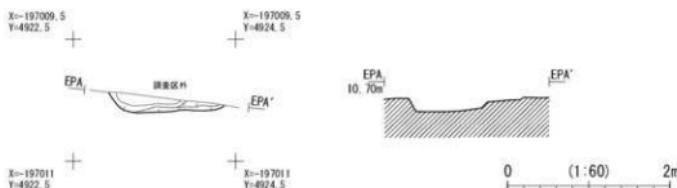
[規模・形態]検出された範囲の規模は、南北90cm、東西23cmを測り、検出面からの深さは15cm程を測る。平面形状は不明である。

[方向]南壁基準でN-88°-Eである。

[壁面]検出された範囲の壁面は、緩やかに外傾して立ち上がる。検出された部分の壁高は、最大20cmを測る。

[底面]検出された部分においては概ね平坦で、東側にテラス状の段を持つ。

[出土遺物]少量の土器片が出土しているが、掲載した遺物は無い。



第77図 SI15 穫穴遺構

SI16 穫穴住居跡(第78・79図)

[位置・確認]II区北端部、F-1グリッドに位置する。南西側の一部が検出された。住居跡の北側および東側の大部分は調査区外に延びる。

[重複]SB4に切られる。

[規模・形態]検出された範囲の規模は、南北475cm、東西210cmを測る。平面形状は方形ないし隅丸方形を呈するものと推測される。

[方向]西壁基準でN-17°-Wである。

[堆積土]調査区壁断面にて3層に分層された。1層は住居堆積土、2層は周溝内堆積土、3層は掘り方堆積土である。いずれも黒褐色シルトを主体とし、にぶい黄褐色シルトを含む。

[壁面]検出された範囲においては、南壁は直立気味に立ち上がり、西壁はほぼ直線的に外傾する。残存する壁高は最大16cmを測る。

[床面]3層上面を床面とし、わずかな起伏が認められる。

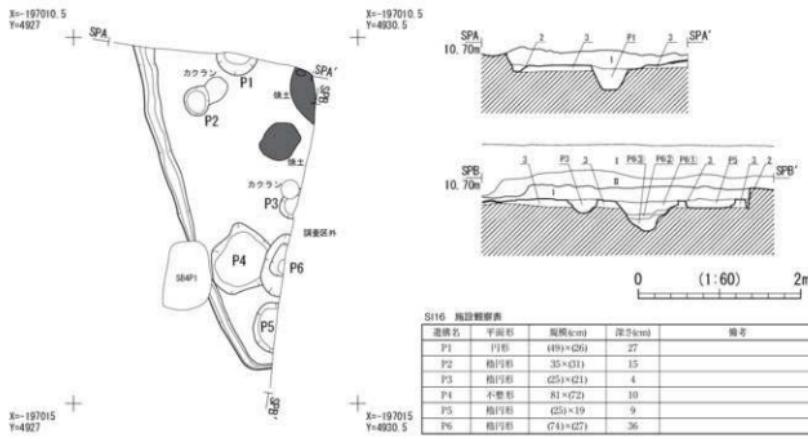
[柱穴]ピット6基が検出され、いずれも柱痕跡は認められなかった。P1・6は形状から柱穴の可能性があるが、主柱穴に相当するかは不明である。

[周溝]検出された範囲においては、壁面に沿って全周する。規模は幅7~20cm、深さ3~10cmを測り、平面形状は逆台形ないしU字状を呈する。

[その他の施設]調査区壁北東隅附近から、焼土範囲が2箇所検出された。南西側の範囲は長軸50cm×短軸40cm程を測り、平面形状は不整な長方形を呈する。もう一方はこの約15cm北東に位置し、調査区外に延びるため規模や形状は不明な点が多い。いずれも被熱深度は2~3cmと浅いもので、由来については判然としない。

[掘り方]住居跡の中央に向かってわずかな高まりが認められるが、概ね平坦である。

[出土遺物]土器片2点を掲載した(第79図)。いずれも床面から出土したものである。1の器形はいわゆる北武藏型の特徴を有するもので、口縁部形態はS字状に強く直立し、口唇部は尖り気味となる。色調は内外面共に浅黄橙色を呈し、胎土には径0.5mm程の石英が含まれる。内外面共に摩耗しているものの、口縁部は内外面ヨコナデ、



SI16 進積土柱記表

部位	層位	土色	土性	備考
住居構造土	1 10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR5/3に似る黒褐色シルトを複数に、炭化物粒・燒土粒を含む。
同上	2 10YR2/2	黒褐色	シルト	測定: 10YR5/3に似る黒褐色シルトを含む。
側方	3 10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR5/3に似る黒褐色シルトブロックを多量含む。層上部に施熱跡所あり。(點実)

SI16 施設地盤柱記表

部位	層位	土色	土性	備考
P1	-	-	-	断面同じ。
P2	-	-	-	断面同じ。
P3	1 10YR2/3	黒褐色	シルト	10YR5/3に似る黒褐色シルトブロックを多量含む。
P4	-	-	-	断面同じ。
P5	-	-	-	断面同じ。
P6	1 10YR2/3	黒褐色	シルト	炭化物粒を含む。
	2 10YR2/2	黒褐色	シルト	燒土粒を含む。
	3 10YR2/3	黒褐色	シルト	10YR5/3に似る黒褐色シルトブロックを含む。

第78図 SI16 穫穴住居跡



回収番号	登録番号	調査区	出土場	層位	種別	器種	部位	法長(cm)			外側調整	内側調整	備考	写真 図版
								口縁	底	器高				
1 C-067	B1K	SI16	床面	土壌部	环	口縁~底	(11.2)	-	(0.7)	(1縁:3.3cm, 底:2.9cm)	(1縁:3.3cm, 底:2.9cm)	内外面焼付	46	
2 C-068	B1K	SI16	床面	土壌部	环	口縁~底	(15.0)	-	(2.8)	(1縁:5.9cm, 底:5.9cm)(図示なし)→(2.8cm)	(2.8cm)	内外面黒色処理	46	

第79図 SI16 穫穴住居跡出土遺物

体部は外側がヘラケズリ、体部はヘラミガキにて整形される。2は口縁部と体部の境界に稜を持ち、直線的に外傾する体部から短く直立気味となる口縁部へといたる器形を呈する。調整は内外面共にヘラミガキが施されるが、外側体部にはその前段階に施されたヘラケズリの痕跡が観察される。また、内外面ともに黒色処理される。このほか、堆積土中から少量の骨片が出土しているが、詳細は不明である。

SI17 穫穴住居跡(第81・82図)

[位置・確認] 区北半部中央、F-1グリッドに位置する。西側約1/2を検出した。東側は調査区外にかかる。

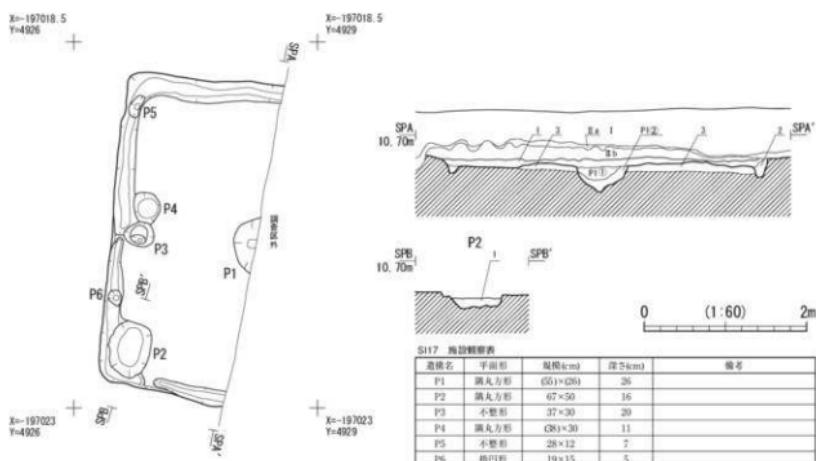
[重複]SI18・19・20を切る。

[規模・形態]検出された範囲の規模は、南北405cm、東西193cmを測り、平面形状は隅丸方形を呈するものと考えられる。

[方向]西壁基準でN-5°-Eである。

[堆積土]3層に分層された。1層は住居堆積土、2層は周溝内堆積土、3層は掘り方堆積土である。いずれも黒褐色シルトで炭化物を含む。

[壁面]検出された範囲の壁面は、北および西壁が内湾し、南側は直線的に外傾して立ち上がる。残存する壁高は、



SI17 掘立柱跡表			
部位	層位	土色	土性
P1	1 10YR3-2	黒褐色	シルト
	2 10YR2-2	黒褐色	シルト
P2	1 10YR3-2	黒褐色	シルト
P3	-	-	-
P4	-	-	-
P5	-	-	-
P6	-	-	-

SI17 掘立柱跡表			
部位	層位	土色	土性
P1	1 10YR3-2	黒褐色	シルト
	2 10YR2-2	黒褐色	シルト
P2	1 10YR3-2	黒褐色	シルト
P3	-	-	-
P4	-	-	-
P5	-	-	-
P6	-	-	-

第80図 SI17竪穴住居跡



国版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法面(km)		外面調整	内面調整	備考	写真 図版
								(1)性	(2)性				
1 C-071	IIIC	SI17	床面	土加器	环	11層～底	(0.24)	-	(0.7)	11層～底付、底～底～底付 11.918 ±	内面黒色劣化	46	
2 C-070	IIIC	SI17	床面	土加器	环	11層～底	(0.24)	-	(0.9)	11層～底付～底付 11.918 ±	内面黒色劣化	46	

第81図 SI17竪穴住居跡出土遺物

8cm程を測る。

[床面]北側では1層下面、中央部から南側では3層上面を床面とする。検出された部分については、貼床が認められる中央部から南側に起伏がみられる。

[柱穴]6基検出された。P5・P6は周溝内部から検出されたものであることから、本竪穴住居跡は壁柱穴構造の可能性がある。この両ピットのほぼ中間にはP3・P4が並んで位置しており、あるいはこの4基は関連性を持つピットである可能性も考えられる。床面中央部に位置するP1および南西コーナーに位置するP2は、規模・形態ともに土坑状を呈する。

[周溝]検出された範囲においては、壁面に沿ってほぼ全周し、南西コーナー付近の南壁で一部途切れる箇所がみられる。規模は幅11~28cm、深さは南壁および西壁で5cm前後、北壁で10cm前後を測り、断面形状は逆台形を呈する。

[掘り方]ほぼ平坦である。

[出土遺物]土師器壺2点を掲載した(第81図)。いずれも床面から出土したもので、器形は外面の口縁部と頸部の境界に段もしくは棱を持ち、口縁部形態は1が直線的に外傾し、2が内湾する。1の内面は全面ヘラミガキ後に黒色処理されるが、2は口縁部にヨコナデが施され、また黒色処理も認められない。

SI18 竪穴住居跡(第82~85図)

[位置・確認]Ⅱ区北半部中央、F-1・2グリッドに位置する。東側約2/3が検出された。西側約1/3は調査区外にかかる。

[重複]SI19を切り、SI17・22・23に切られる。

[規模・形態]検出された範囲の規模は、南北634cm、東西520cmを測り、平面形状は不整な隅丸方形を呈する。

[方向]カマド基準でN-9°-Wである。

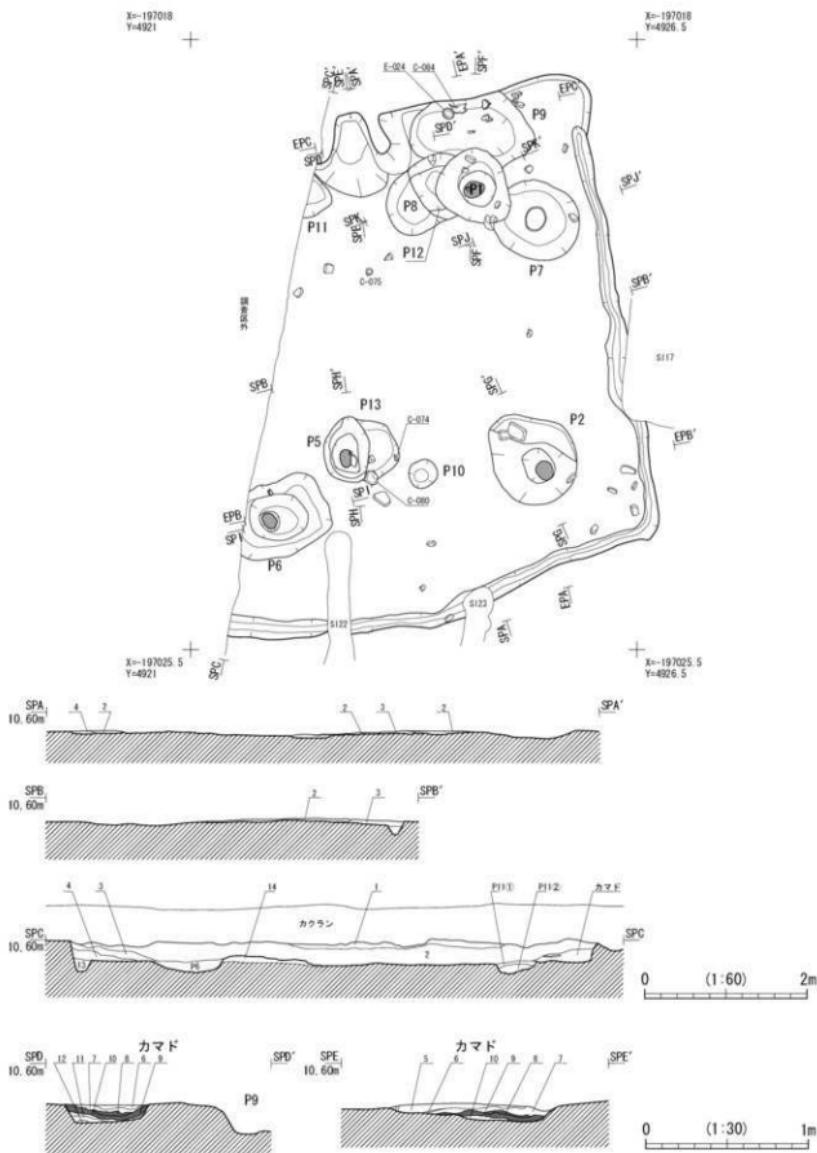
[堆積土]14層に分層された。1~4層は黒褐色シルトを主体とする住居堆積土で、2~4層は、にぶい黄褐色土ブロックを含む。また、3層下半部には、南側に位置するP6周辺を中心として炭化物の集積層が確認され、これと同質とみられるものは、主柱穴と考えられるP1・P2・P6および補助的な柱穴と考えられるP5に堆積する。4層は壁際のみで確認される三角堆積層である。5~12層はカマド周辺層位、13層は周溝内堆積土である。14層は西側調査区壁面でのみ確認された掘り方堆積土である。

[壁面]検出された範囲の壁面は、外反ないし直線的に外傾して立ち上がる。残存する壁高は、最大25cmを測る。

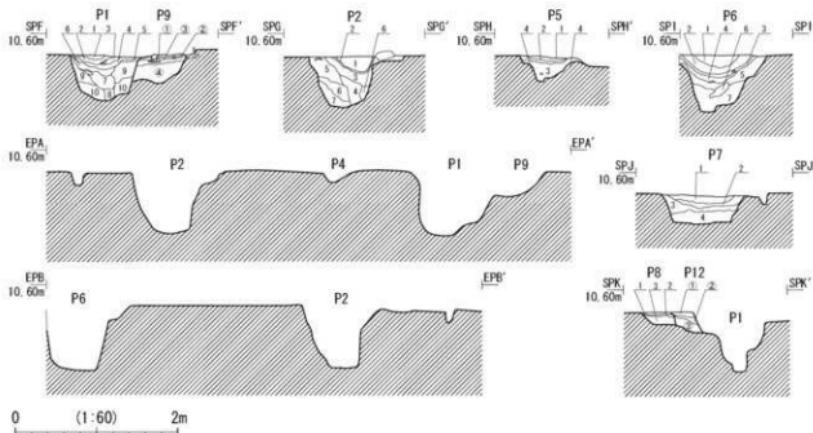
[床面]掘り方の確認された中央部南側は14層上面、壁際は3ないし4層下面、それ以外は2層下面を床面とする。掘り方の確認された南側には5cm程の高まりがみられるものの、概ね平坦である。

[柱穴]I3基検出され、P1・P2・P5~P7には柱痕跡が認められた。規模や位置関係、堆積土の状況から、P1・P2・P5・P6は主柱穴、P5は補助的な柱穴に相当し、またP1とP7は重複関係にあることから、部分的な造り替えが行われたものと考えられる。柱間寸法は、P2・P6、P1・P2が共に約330cm、P2・P7については約300cmを測る。P8・9は規模や位置関係のほか、堆積土に多量の炭化物・焼土を含むことから、カマドに関連する施設の可能性が考えられる。

本竪穴住居跡の主柱穴および補助柱穴に相当する4基の柱穴(P1・P2・P5・P6)は、炭化物を多量に含むP1・P2・P5の2層およびP6の3層が、それぞれリング状に回るプランで検出された。これはいずれも住居堆積土3層下半部にみられる炭化物集積層と同質のものである。また、土層断面ではこの4基の柱穴上半部に掘り返された痕跡が認められ、柱痕跡はその下位から確認された。こうした状況を併せると、本竪穴住居跡の主柱や補助柱は、住居廃絶時に柱根の一部を残して掘り返しによって抜き取られ、それにより窪地化した柱穴上部に住居堆積土3層相当の土が堆積したものと考えられる。



第82図 SI 18 壁穴住居跡(1)



SH18 地盤土質記載表

部位	層位	土色	土性	備考
住居堆積土	1	2.5Y3/2	黒褐色	炭化物を多量含む。
	2	10YR3-1	黒褐色	シルト 10YH5-4に沿い、黄褐色土ブロックを多量、炭化物粒・鐵土粒を含む。
	3	10YR3-3	暗褐色	シルト 10YH5-4に沿い、黄褐色土ブロック・炭化物・鐵土を含む。下層に炭化物集積層あり。
	4	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YH5-4 黄褐色土ブロック・炭化物粒を含む。
カマド	5	7.5Y3/2	黒褐色	粘土質シルト 炭化物粒を多量、鐵土粒を含む。
	6	10YR5-6	黃褐色	シルト 炭化物粒を含む。
	7	7.5YR2/2	黒褐色	シルト 10YH5-1 周灰色シルト・炭化物・多量の鐵土ブロック・鐵土粒を含む。
	8	5YR4-6	赤褐色	シルト 鐵土層。
	9	5YR4-4	10YR3-2 黒褐色	シルト 鐵土層。
	10	5YR4-4	10YR3-2 黒褐色	シルト 炭化物粒・シガソシルトを含む。
	11	7.5YR3/2	黒褐色	粘土質シルト 炭化物粒・鐵土粒を含む。
周溝	12	10YR4-6	褐色	粘土質シルト シガソシルトを含む。
排水沟	13	10YR3-4	暗褐色	粘土質シルト 10YH5-6 黃褐色シルトブロック・炭化物粒を含む。
排水沟	14	10YR5-4	10YR3-2 黒褐色	シルト 10YH5-2 黑褐色粘土質シルト、復状・無鉄・無炭化鉄を含む。

SH18 施設堆積土質記載表(1)

部位	層位	土色	土性	備考
P1	1	10YR3-3	暗褐色	炭化物・鐵土粒を含む。
	2	10YR2-3	黒褐色	シルト 炭化物・鐵土粒を含む。
	3	10YR3-3	暗褐色	シルト 炭化物粒を含む。
	4	10YH4-2	灰褐色	粘土質シルト 鐵土・シルト・シルトブロックを含む。
	5	2.5Y3/2	黒褐色	シルト 鐵土・シルト・シルトブロックを含む。
	6	10YR2-3	黒褐色	粘土質シルト 鐵土・シルト・シルトブロックを含む。
	7	10YR3-1	黒褐色	粘土 炭化物粒を含む。(柱軸跡)
	8	10YR2-3	黒褐色	粘土 炭化物粒を含む。(柱軸跡)
	9	10YR3-2	黒褐色	粘土 10YH5-6 黃褐色シルトブロックを含む。
	10	10YR4-2	灰褐色	粘土 10YH3-2 黑褐色粘土・シルト・シルトブロックを含む。
P2	1	10YR3/3	暗褐色	シルト 炭化物・鐵土・シルトを含む。
	2	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト 10YR4-2 灰褐色土上層・10YR5-6 黃褐色シルトブロックを含む。
	3	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト 10YR5-6 黃褐色シルトブロック・炭化物粒を含む。(柱軸跡)
	4	10YR2/2	黒褐色	粘土 10YR3-2 2倍厚粘土・シルト・シルトブロックを含む。
	5	10YR4-3	10YR3-2 黑褐色	粘土質シルト 復状・無鉄・シガソシルトを含む。
	6	10YR4/2	灰褐色	粘土質シルト 復状・無鉄・シガソシルトを含む。
	7	10YR4-3	10YR3-2 黑褐色	粘土質シルト 復状・無鉄・シガソシルトを含む。
P3	-	-	-	欠番
P4	-	-	-	欠番
P5	1	10YR3-2	黒褐色	シルト Y層に炭化物集積層あり。
	2	10YR2-2	暗褐色	シルト 10YR5-4(柱軸跡) 黄褐色土ブロックを含む。
	3	10YR3-3	暗褐色	シルト 10YH6-4(柱軸跡) 黄褐色土ブロック・炭化物を含む。
P6	1	10YR4-3	10YR3-2 黑褐色	粘土質シルト 10YR5-6 黃褐色シルト・炭化物を含む。
	2	10YR3-3	暗褐色	粘土質シルト 10YH4-2(柱軸跡) 黑褐色土を多量含む。
	3	10YR3-4	暗褐色	粘土質シルト 10YR5-6 黃褐色シルト・シルト・炭化物を含む。
	4	10YR2-3	黒褐色	粘土質シルト 10YR3-2 黑褐色粘土・シルト・シルトブロックを含む。
	5	10YR4-4	褐色	粘土質シルト 炭化物粒を含む。(柱軸跡)
	6	10YR3-2	黒褐色	粘土 10YR3-2 黑褐色粘土・シルト・シルトブロックを含む。
	7	10YR4-6	褐色	粘土質シルト 10YR3-2 黑褐色粘土・シルト・シルトブロックを含む。

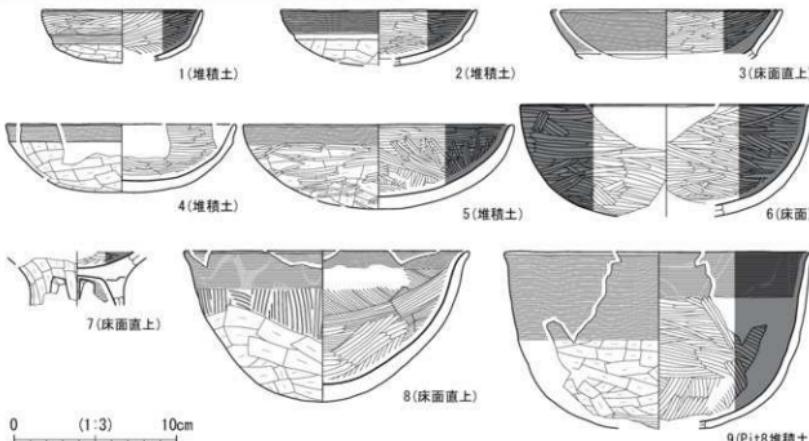
第83図 SH18豎穴住居跡(2)

SI18 施設堆積土剖面記表(2)

部段	層段	土色	土性	備考
P7	1	10YR3/3	暗褐色	シルト 10YR5-6 黄褐色シルト・炭化物鉱・焼土ブロックを含む。
	2	10YR4/3	12.45-黄褐色	シルト 10YR5-6 黄褐色シルト・炭化物鉱・焼土鉱を含む。
	3	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト 10YR5-6 黄褐色シルト・炭化物鉱を含む。
	4	10YR3/2	暗褐色	粘土質シルト 10YR5-6 黄褐色シルト・焼土鉱を含む。
P8	1	7.5YR3/2	暗褐色	シルト 炭化物鉱・焼土ブロックを多量含む。
	2	10YR5/4	12.45-黄褐色	粘土質シルト 炭化物鉱・10YR4-2(6) 黄褐色を多量含む。
	3	10YR3/4	暗褐色	粘土 10YR5-6 黄褐色シルト鉱・多量の炭化物鉱・焼土鉱を含む。
P9	①	7.5YR3/2	暗褐色	シルト 炭化物鉱・焼土ブロックを多量含む。
	②	2.5Y3/2	暗褐色	砂 焼土鉱を含む。
	③	2.5Y4/2	暗褐色	粘土質シルト 炭化物鉱・焼土鉱・骨粉を含む。
	④	2.5Y3/2	暗褐色	粘土質シルト 10YR5-6 黄褐色シルト鉱・多量の炭化物鉱を含む。
P10	1	10YR3/3	暗褐色	シルト 炭化物鉱を含む。
P11	①	7.5YR2/2	暗褐色	シルト 炭化物鉱・焼土鉱・骨粉を多量含む。
	②	10YR4/3	12.45-黄褐色	粘土質シルト 10YR5-6 黄褐色シルト鉱を多量含む。
	③	10YR2/3	暗褐色	シルト 炭化物鉱・焼土鉱を含む。
P12	①	10YR5/4	12.45-黄褐色	粘土質シルト 炭化物鉱・焼土鉱を含む。
	②	7.5YR3/3	暗褐色	粘土 10YR5-6 黄褐色シルト鉱・多量の炭化物鉱・焼土鉱を含む。
	③	-	-	- 断面固なし。

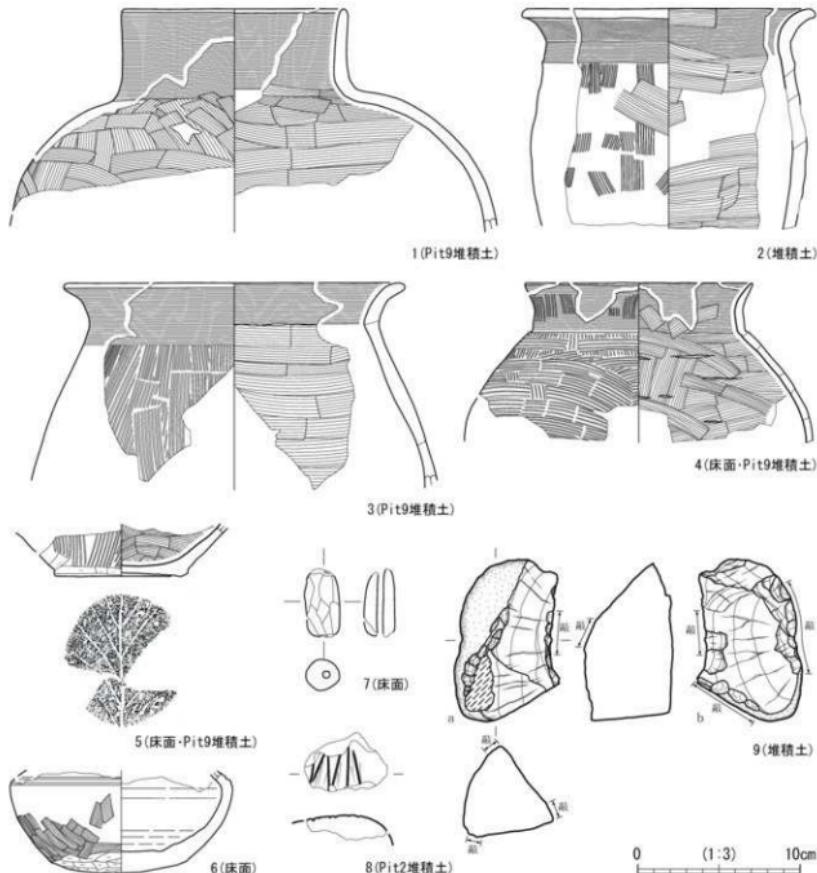
SI18 施設觀察表

遺構名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備考	遺構名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備考
P1	楕円形	94×86	80		P8	楕円形	75×40	20	
P2	楕円形	121×105	78		P9	不整形	151×80	36	
P3	-	-	-	欠番	P10	円形	35×32	14	
P4	-	-	-	欠番	P11	満丸方形	639×633	16	
P5	長楕円形	79×55	66		P12	満丸方形	80×60	24	
P6	満丸方形	(117)×92	80		P13	満丸方形	70×63	11	
P7	円形	92×69	45						



回収 番号	登録 番号	調査区	土生地	層段	種別	器種	部位	剖面6cm			外面調整	内面調整	備考	写真 回数
								上層	中層	下層				
1	C-028	II区	SI18	堆積土	土加筋	环	口縁-底	10.0	-	3.3	11層-23層→101層 底-底-99層	外壁 内面	内面黒色処理	46
2	C-036	II区	SI18	堆積土	土加筋	环	口縁-底	(0.22)	-	0.4	11層-23層 底-底-99層	外壁 内面	内面黒色処理	46
3	C-074	II区	SI18	床面直上	土加筋	环	口縁-底	(0.12)	-	0.0	11層-23層 底-底-99層	外壁 内面	内面黒色処理	46
4	C-077	II区	SI18	堆積土	土加筋	环	口縁-底	(0.12)	-	4.2	11層-23層 底-底-99層	外壁 内面	内面黒色処理	46
5	C-073	II区	SI18	堆積土	土加筋	环	口縁-底	(16.8)	-	5.2	11層-23層 底-底-99層	外壁 内面	内面黒色処理	46
6	C-072	II区	SI18	床面	土加筋	环	口縁-底	(8.82)	-	6.91	0.91層	外壁 内面	外壁黒色処理 内面黒色処理 环部内面黒色処理 舞足込なし	46
7	C-075	II区	SI18	床面直上	土加筋	环	口縁-底	-	-	0.31	0.91層	外壁 内面	外壁黒色処理 内面黒色処理 环部内面黒色処理 舞足込なし	46
8	C-080	II区	SI18	床面直上	土加筋	环	口縁-底	(17.6)	-	9.3	11層-23層 底-底-99層	外壁 内面	内面黒色処理	46
9	C-079	II区	SI18	P05堆積土	土加筋	环	口縁-底	(0.91)	-	0.09	11層-23層 底-底-99層	外壁 内面	内面黒色処理	46

第84図 SI18 積穴住居跡出土遺物(1)



図版番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法量(cm)			外面調整	内面調整	備考	写真 図版
								長径	幅	厚さ				
1	C-084	IIK	SI18	Pit9堆積土	土器部	壺	口縁一部	(14.0)	-	(3.7)	口縁:3.2cm、肩:~5cm	口縁:3.2cm、肩:~5cm	-	47
2	C-081	IIK	SI18	堆積土	土器部	壺	口縁一部	(38.4)	-	(33.5)	口縁:3.2cm、肩:~5cm	口縁:3.2cm → 4.0cm、肩:~5cm	外面削減、内面削減	47
3	C-083	IIK	SI18	Pit9堆積土	土器部	壺	口縁一部	(20.4)	-	(22.7)	口縁:3.2cm、肩:~5cm	口縁:3.2cm、肩:~5cm	-	47
4	C-082	IIK	SI18	Pit9堆積土	土器部	壺	口縁一部	(14.2)	-	(9.8)	口縁:3.2cm → 4.0cm、肩:~5cm	口縁:3.2cm → 4.0cm、肩:~5cm	-	47
5	C-085	IIK	SI18	Pit9堆積土	土器部	壺	肩下端	-	8.2	(3.2)	肩下端:5.4cm → 5.9cm、肩:~5cm	肩:~5cm	内面削減	47
6	E-024	IIK	SI18	床面	帶状器	帯	肩~底	-	6.5	(2.0)	口縁調整:~5.4cm → 5.9cm、肩:~5cm	口縁調整	外火堆灰、平底の可能性あり	47

図版番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法量(cm)			若松-参考	写真 図版	
								長径	幅	厚さ			
7	P-006	IIK	SI18	床面	土製品	土器	口縁	(4.2)	2.1	1.9	(16.6)	表面調整	47

図版番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法量(cm)			重さ(g)	石材	備考	写真 図版
								長径	幅	厚さ				
8	Kd-013	IIK	SI18	Pit9	石製品	砾石	(3.6)	(5.0)	(2.5)	(20.0)	石英安山岩質 無孔状	欠損品、素材形状不明、刃物痕あり	47	
9	Kc-006	IIK	SI18	堆積土	石製品	砾石	9.5	6.5	5.5	447.57	石英安山岩質 無孔状	欠損品、刃物痕、敲打箇所(鉋)	47	

第85図 S18竪穴住居跡出土遺物(2)

【周溝】検出された範囲においては、東壁および南壁に沿って全周する。規模は幅13～25cm、深さ10～15を測り、断面形状は逆台形を呈する。

【カマド】北壁に位置し、壁面にはほぼ直交して付設される。西袖の西側約1/2は調査区外に延び煙道部と煙出し部は削平により失われている。袖部は住居構築時に残された地山(基本層序第IV層)を直接利用している。検出された袖部の規模は、西袖が長さ約80cm、幅約15～20cm、東袖が長さ約90cm、幅約40～50cmを測り、北壁から「ハ」字状に延びる。燃焼部は幅45～70cm、奥行き100cm、奥壁高は約20cmを測る。底面は奥壁に向かって緩やかに下り、北半部は5cm程低くなる。

【出土遺物】土師器壺6点・高杯1点・鉢2点・壺1点・甕4点、須恵器壺、土錘、礫石器、石製品を各1点掲載した(第84・85図)。床面から堆積土にいたるまで多くの遺物が出土しており、なかでもカマド東側に隣接するPit9からのものが多い。

土師器壺(第84図-1～6)の器形はいずれも丸底で、外面の口縁部と体部の境界に段もしくは棱を持つもの(1～4)と持たないもの(5・6)に大別され、口縁部は短く外反する同図-4を除き、内湾もしくは内湾気味となる。6は内外面共にヘラミガキが施された後に黒色処理される。同図-7は、土師器高杯の壺部下端から脚部上端にかけての破片資料である。外面はヘラケズリが施され、壺部と脚部の境界は緩く外反する。壺部内部のみ黒色処理される。土師器鉢2点(同図-8・9)は口径と器高の比率がほぼ同等となるが、器形や器厚、内外面の調整には違いがみられる。土師器壺(第85図-1)は丸みを持つ肩部から直立する口縁部へといたるもので、最大径は肩部上半に持つものと推定される。調整は内外面とも口縁部にヨコナデ、肩部にはヘラナデが施される。なお、土師器壺としては今次調査において唯一の出土となる。土師器甕3点(同図-2～4)は、いずれも口縁部が外反する。前者は最大径を口縁部に持ち頸部中程が屈曲するもので、胴部上位にわずかな張りを持つ。胴部下半は底部に向かって直線的に窄まるものと推定される。後二者は共にPit9堆積土から出土したもので、胴部中位に最大径を持つ。

床面から出土した須恵器壺(同図-6)は、胎土に多量の海綿骨針や径2～7mm程の小礫を含む。肩部には幅3mmの沈線が2条施される。

床面から出土した土錘(同図-7)は全長に対して幅が広く、孔の位置は中央からわずかに外れる。両末端には使用によるものと思われる部分的な欠損が認められる。

Pit2堆積土から出土した砾石(同図-8)の片面には研磨による擦痕のほか複数条の刃物痕が認められる。堆積土から出土した敲石(同図-9)のa・b面には、共に敲打痕の周間に損傷による剥離面が伴う。これら8・9の石材は、いずれも石英安山岩質凝灰岩である。このほか、堆積土中から少量の骨片が出土しているが、詳細は不明である。

SI19 穫穴住居跡(第86図)

【位置・確認】II区北半部中央、F-1・2グリッドに位置する。南東コーナー周辺と北壁東側が、それぞれ部分的に検出された。

【重複】SI17・18に切られる。残存状況は悪い。

【規模・形態】残存する部分の規模は、南北520cm、東西76cmを測る。平面形状は不明である。

【方向】東壁基準で真北である。

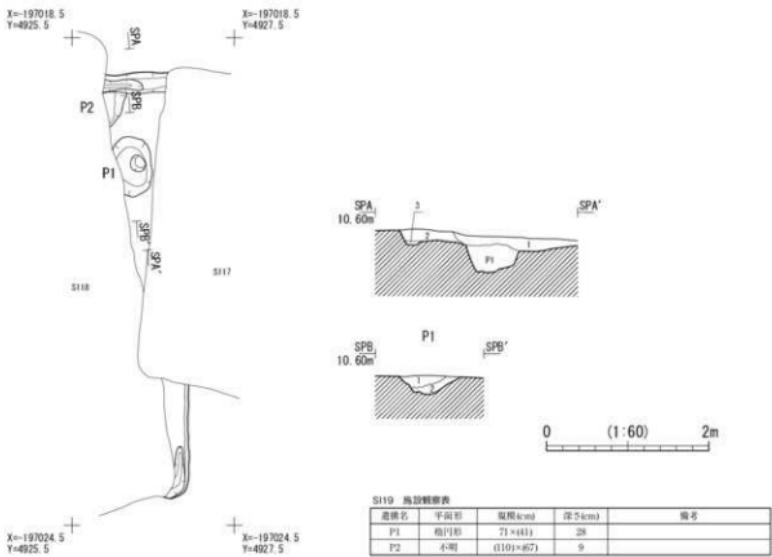
【堆積土】3層に分層された。1・2層は住居堆積土、3層は周溝内堆積土である。

【壁面】残存する部分の壁面は直線的に外傾して立ち上がる。残存する壁高は5～8cmを測る。

【床面】やや起伏が認められる。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

【柱穴】2基検出された。P1は規模や位置関係から主柱穴に相当する可能性がある。

【周溝】残存する部分においては、東壁南側を除いて壁沿いに周る。規模は幅10cm前後、深さ5～9cmを測り、断



SI19 堆積土柱記表

部位	層位	土色	土性	備考
住居堆積土	1	10YR3-2 黒褐色	粘土質シルト	10YR5-6に近い黒褐色シルト粒・マンガン粒を含む。
	2	10YR5-4 に近い・黄褐色	シルト	10YR3-2黒褐色粘土質シルトブロックを含む。
周溝	3	10YR2-3 黒褐色	粘土質シルト	10YR5-6に近い黒褐色シルトブロックおよびマンガン粒を含む。

SI19 施設堆積土柱記表

部位	層位	土色	土性	備考
P1	1	10YR4-3 に近い・黄褐色	シルト	10YR5-6に近い黒褐色シルトブロック・炭化物粒・焼土粒を含む。
	2	10YR3-4 暗褐色	シルト	炭化物粒・焼土粒を含む。

第86図 SI19 竪穴住居跡

面形状は逆台形を呈する。

[出土遺物] 堆積土中から土器片が少量出土しているが、掲載した遺物は無い。

SI20 竪穴住居跡(第87・88図)

[位置・確認] II区北半部中央、F-1グリッドに位置する。西側の一部が検出された。東側の大部分は調査区外にかかる。

[重複] SI17に切られる。

[規模・形態] 検出された範囲の規模は、南北543cm、東西151cmを測る。平面形状は隅丸方形を呈するものと推測される。

[方向] 西壁基準で真北である。

[堆積土] 単層で住居堆積土であるが、詳細は不明である。

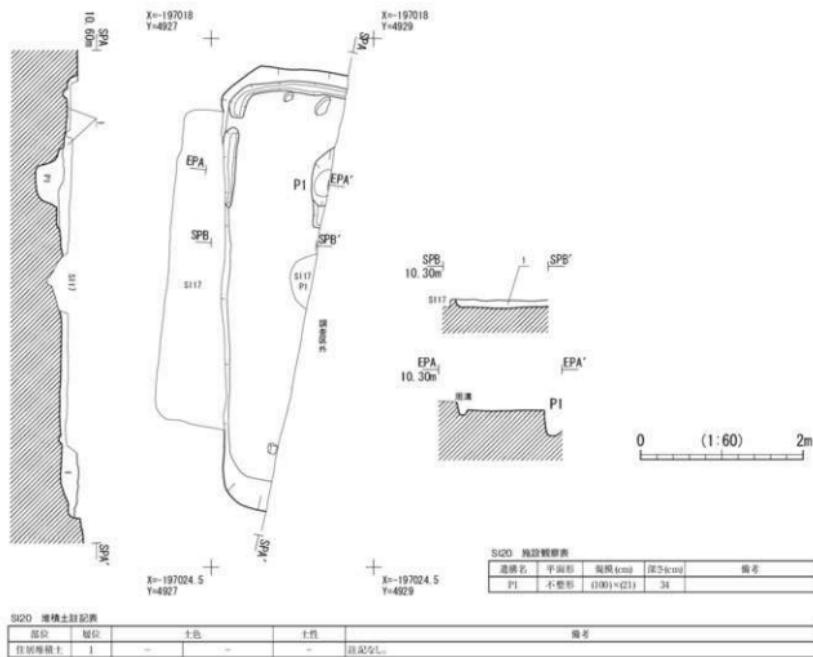
[壁面] 検出された範囲の壁面は、内湾気味に立ち上がる。残存する壁高は、10cm前後を測る。

[床面] 概ね平坦である。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

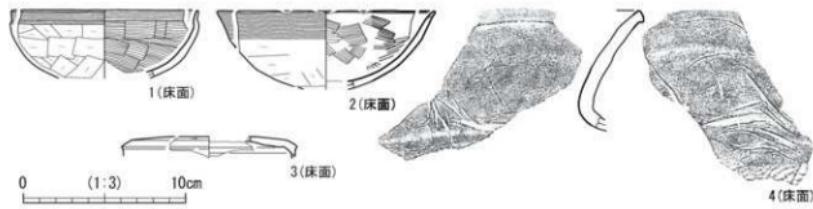
[柱穴] 1基検出された。東側1/2は調査区外であるため、規模や柱跡の有無について不明な点が多い。

[周溝]検出された範囲においては、西壁北側の一部と北壁の縦沿いに周る。規模は、幅8~20cm、深さ5cm前後を測り、断面形状は逆台形を呈する。

[出土遺物]土師器壺2点、須恵器蓋・甕各1点を掲載した(第88図)。いずれも床面から出土したものである。Iの器



第87図 SI20竪穴住跡



回数	登録番号	調査区	出土場	層位	種別	横径	縦径	高さ	法量(cm)	外面調整	内面調整	備考	写真
1	C-086	IIK	SI20	床面	土師器	壺	口縁-底	(11.6)	-	(4.2)	口縁-底付、底一辺-内付	-	47
2	C-087	IIK	SI20	床面	土師器	壺	口縁-底	(13.5)	-	(4.2)	口縁-底付、底一辺-内付	-	47
3	E-025	IIK	SI20	床面	須恵器	蓋	天井	-	-	(1.7)	口縁-底付、底一辺-内付	内外面磨耗	47
4	E-026	IIK	SI20	床面	須恵器	甕	口縁-底	-	-	(7.4)	口縁-底付調整、天井-削削-内付	外侧面摩耗	47

第88図 SI20竪穴住跡出土遺物

形はいわゆる北武藏型の特徴を有するもので、体部以下は半球形の丸底で、口縁部が短く直線的に外傾し、器厚は体部以下の1/2程度となる。色調は橙色ないし灰黄褐色を呈し、胎土には多くの海綿骨針や径1mm程度の小殻や石英のほか、赤色粒子を含む。口縁部は内外面共にヨコナデが施され、体部以下については外面にヘラケズリ、内面にはヘラナデが施される。2の器形は、直線的に外傾する口縁部と緩やかに内湾する体部の境界に不明瞭な稜を持ち、口縁部上端はわずかに外反する。内外面共に摩耗が著しいものの、わずかに整形の痕跡が観察される。色調は内外面共に灰白色を呈し、胎土には径1mm未満の石英が多く含まれる。須恵器環(3)の器形は、上半に回転ヘラケズリが施され下端がわずかに張り出す平坦気味な天井部から直立気味な口唇部へといたるもので、外面天井部には火櫻痕が認められる。4は口縁部に頬が付く須恵器壺である。

SI21 壁穴住居跡(第89図)

[位置・確認] II区北半部中央、F-2グリッドに位置する。西壁北側と北西コーナーのみが検出された。残る大部分は調査区外にかかる。

[重複] 検出された範囲においては、他遺構との重複は認められない。

[規模・形態] 検出された範囲の規模は、南北117cm、東西51cmを測る。平面形状は隅丸方形を呈するものと推測されるが、判然としない。

[方向] 西壁基準でN-4°-Wである。

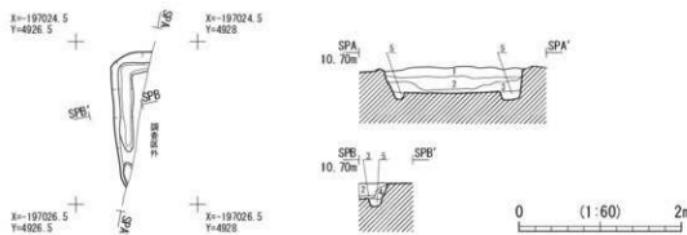
[堆積土] 5層に分層された。1～4層は黒褐色ないし暗褐色シルトを主体とする住居堆積土で、1・3・4層は、にぶい黄褐色ないしにぶい黄橙色土ブロックを含む。5層は周溝内堆積土である。

[壁面] 検出された範囲の壁面は、直線的に外傾して立ち上がる。残存する壁高は最大33cmを測る。

[床面] 概ね平坦である。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

[周溝] 検出された範囲においては、壁面に沿ってほぼ全周する。規模は幅10～18cm、深さは10cm程度を測り、断面形状は逆台形を呈する。

[出土遺物] 堆積土中から土師器片が少量出土しているが、掲載した遺物は無い。



SI21 堆積土註記表

部位	層位	寸法	土性	土性	備考
住居堆積土	1	10YR3/-2	黒褐色	シルト	遺灰に10YR5/-4に近い黒褐色土ブロックを含む。
	2	10YR3/-3	暗褐色	シルト	地土中に含む。
	3	10YR2/-2	黒褐色	シルト	遺灰に10YR6-4に近い黄褐色土ブロックを含む。
	4	10YR2/-2	黒褐色	シルト	10YR6-4に近い黄褐色土ブロックを多量含む。
	5	-	-	-	目記なし。

第89図 SI21壁穴住居跡

SI22 積穴住居跡(第90～95図)

[位置・確認] II区北半部中央、F-2グリッドに位置する。西壁北半部および北西コーナーは調査区外に延びる。

[重複] SI18・23・24・25Aを切る。

[規模・形態] 検出された範囲の規模は、南北505cm、東西463cmを測り、平面形状は隅丸方形を呈する。

[方向] カマド煙道部基準で真北である。

[堆積土] 25層に分層された。1～4層は暗褐色シルトを主体とした住居堆積土で、すべての層がにぶい黄褐色シルトや炭化物、マンガン粒を含む。5～21層はカマド間連層位で、13～15層は天井部崩落土、16層は層厚10cm程の灰層で、18層上面に堆積する。22層は周溝内堆積土である。23～25層は黒褐色シルトを主体とするカマド抽部構築土である。

[壁面] 検出された範囲の壁面は概ね直線的に外傾して立ち上がり、一部上半が外反する箇所がみられる。残存する壁高は30cm前後を測る。

[床面] 概ね平坦である。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

[柱穴] 10基検出された。柱痕跡が認められたものは無いものの、位置や規模からみてP1・P2・P4・P5が主柱穴に相当すると考えられる。カマドの西側袖部末端から60cm程南にはP3・P5・P6・P9・P10が重複して位置することから、北西側主柱穴については数回の造り替えが行われた可能性が考えられる。柱間寸法はP1・P2、P2・P4共に250cm程を測り、P5を北西側主柱穴とした場合の柱間寸法は、P1・P5、P4・P5共に200cm程を測る。

[周溝] 検出された範囲においては、北壁西半、西壁、南壁の一部を除く壁面に沿って周る。規模は幅10～25cm、深さ3～10cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。

[カマド] 北壁中央に位置し、壁面には直交して付設される。袖部の規模は、西袖が長さ76cm、幅40～65cm前後、東袖が長さ115cm、幅50～70cm前後を測り、北壁に直交して直線的に延びる。

燃焼部は北壁から約80cm屋外へ張り出して構築され、幅33～60cm、奥行き約100cmを測る。東西壁面は内湾気味に、奥壁は外反して立ち上がり、東西の壁面には被熱の痕跡が認められる。底面は皿状に窪み、奥壁に向かって緩やかに上る。また、底面の中央には東西の壁面と同様に、45×30cmを測る被熱範囲が認められた。

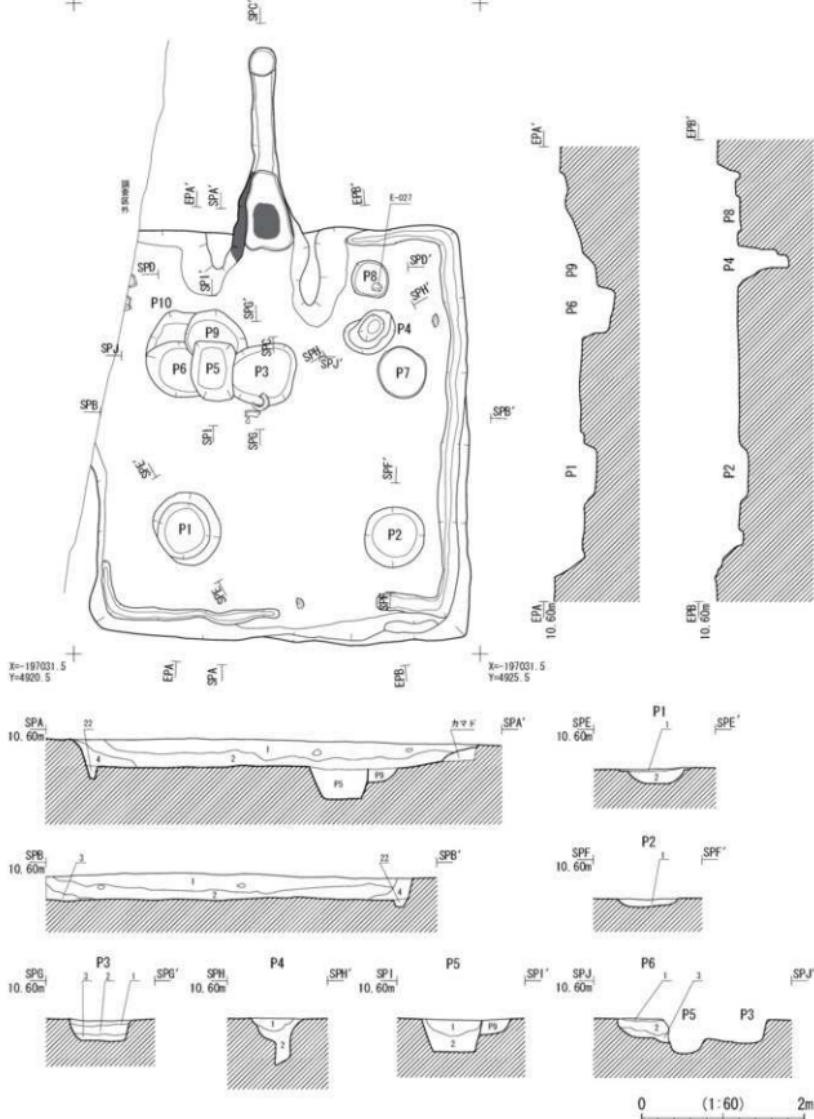
煙道部の規模は、長さ151cm、幅25～30cm、深さ10～23cmを測り、底面は煙出し部に向かって緩やかに下り、煙出し部の手前で緩く立ち上がる。煙出し部は上端径約18cm、深さ35cm程の規模を測るビット状を呈し、北壁は直立に近い角度で立ち上がる。

[出土遺物] 土師器壺13点・鉢1点・甕5点、須恵器壺・甕を各1点、鉄製品3点、礫石器4点、石製品1点を掲載した(第92～95図)。本堅穴住居跡からは多くの遺物が出土したもの、床面から出土したものは少ない。とりわけ住居跡南東部においては1層下面ないし2層上面から土師器の一括出土が認められた。これらの遺物の出土状況は、水平分布的には南東コーナー付近を中心対角線上に並び(第91図)、垂直分布的には床面中央部方向に下るものである(写真図版17)。こうした出土状況から、本堅穴住居跡が埋没する過程で南東コーナー付近に多くの土師器が一括廃棄された後に、一部が住居中央部方向に移動したものと考えられる。

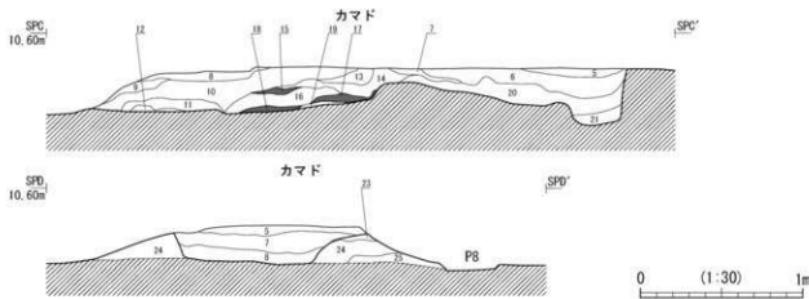
土師器壺13点(第92図、第93図-1～5)には床面上直や堆積土下層から出土したものが多く、上記した一括廃棄に由来するものも存在する(第92図-2～7、第93図-2～5)。器形は底部が丸底の他に平底状の丸底(第92図-4・6・8、第93図-4)や丸底状の平底(第93図-5)といった中間的なものが多く認められ、体部から口縁部にかけては内湾するものが殆どで、内外面共に口縁部と体部の境界に段や明瞭な棱を持つもののが概して少ない。棱を持つものについては、口縁部に施されるヨコナデ下端部と棱の位置が対応しないもの(第92図-5・6)がみられる。口縁部形態については、体部からの内湾を維持するもの(第92図-3、第93図-1)と、全体もしくは上端が短く外反するもの(第92図-1・2・4～7、第93図-3・4)に区別される。また、口径と器高の比率については、第92図の8点と第93図-1～5

X=197023.5
Y=4920.5

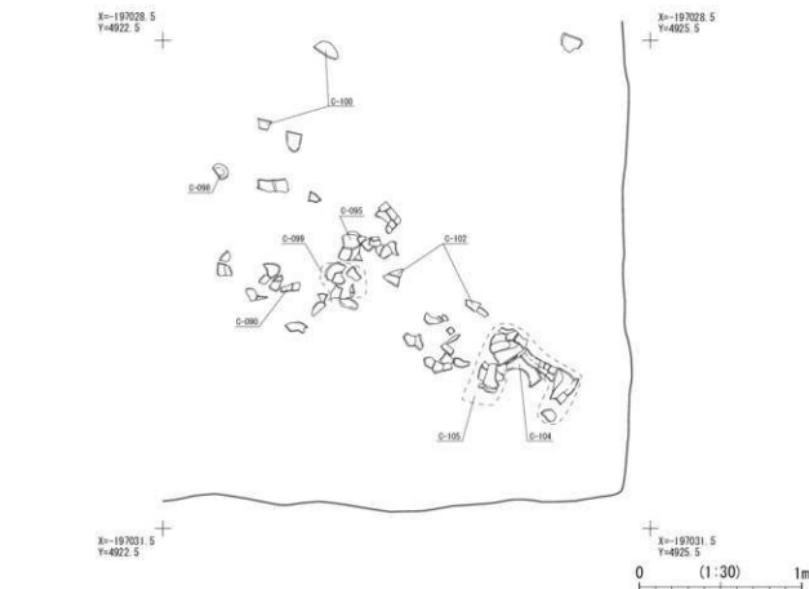
X=197023.5
Y=4925.5



第90図 SI22竪穴住居跡(1)



南東側遺物出土状況(堆積土中層～床面直上)



S22 堆積土記録表(2)

部位	層位	土色	土性	備考
住居堆積土	1	10YR3/-3	暗褐色	シルト 10YR5-6にぶく・黄褐色シルトブロック・炭化物・マンガン鉱を含む。
	2	10YR3/-4	暗褐色	シルト 10YR5-6にぶく・黄褐色シルトブロックを多量、炭化物・焼土粒・マンガン鉱を含む。
	3	10YR3/-2	黒褐色	粘土質シルト 10YR5-6にぶく・黄褐色シルト・炭化物・焼土粒・マンガン鉱を含む。
	4	10YR3/-3	紅褐色・黄褐色	粘土質シルト 10YR5-6にぶく・黄褐色シルトブロック・炭化物・マンガン鉱を含む。
カマド	5	10YR3/-3	暗褐色	シルト 10YR5-6にぶく・黄褐色シルトブロックを含む。
	6	10YR3/-2	黒褐色	シルト 炭化物・焼土ブロックを含む。
	7	10YR3/-2	黒褐色	シルト 10YR5-6にぶく・黄褐色シルトブロックを多量、焼土粒を含む。
	8	10YR3/-2	黒褐色	シルト 10YR5-6にぶく・黄褐色シルトブロック・炭化物を含む。
	9	10YR3/-2	黒褐色	シルト 10YR5-6にぶく・黄褐色シルトブロック・炭化物を含む。
	10	10YR3/-3	暗褐色	シルト 10YR5-6にぶく・黄褐色シルトブロック・10YR5-4にぶく・黄褐色シルトブロックを複数に、焼土ブロックを含む。
	11	10YR2/-3	暗褐色	シルト
	12	10YR5/-4	紅褐色・黄褐色	シルト 10YR5-6にぶく・黄褐色シルトブロック・炭化物粒・焼土粒を含む。

第91図 S122堅穴住跡(2)

S22 進積土鉢記表(2)

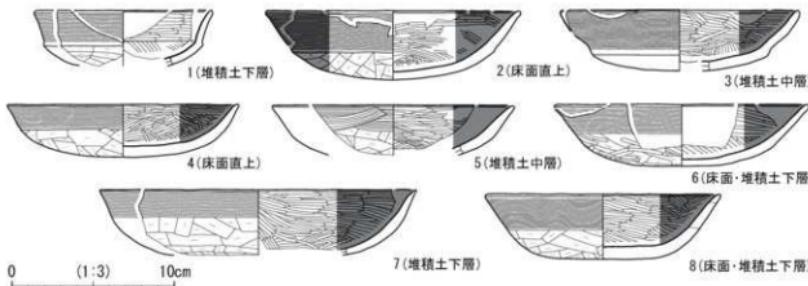
部材	層位	土色	土性	備考	
ガマド	13	10YR5/4	にじく・黄褐色	シルト 10YR3-2/黒褐色土ブロック・炭化物粒・進土粒を含む。(天井崩落土)	
	14	2.5YR3/1	暗赤褐色	シルト 7.5YR3-1/黒褐色土・炭化物・進土ブロックを含む。(天井崩落土)	
	15	10YR3/3	黒褐色	—	進土層。(天井崩落土)
	16	7.5YR4/3	褐褐色	—	炭屑・炭化物・進土を含む。
	17	5YR4/4	にじく・褐褐色	—	進土層。10YR3-4にじく・黄褐色土ブロック・炭化物を含む。
	18	2.5YR3/3	暗赤褐色	—	進土層。
	19	10YR2/1	黑色	—	炭化物を多量、進土粒を含む。
	20	10YR3/2	黒褐色	シルト 10YR5-4にじく・黄褐色土ブロック・進土ブロックを含む。	
	21	10YR2/1	黑色	シルト 炭化物を多量、進土ブロックを含む。	
	22	10YR3/2	黒褐色	シルト 10YR2-2/黒褐色土ブロック・炭化物粒・進土粒を含む。	
タマゾ筋	23	10YR3/2	黒褐色	シルト なし	
	24	10YR3/2	黒褐色	シルト 10YR5-4にじく・黄褐色土ブロック・進土粒を含む。	
	25	10YR2/2	黒褐色	シルト 炭化物粒を含む。	

S22 施設堆積土鉢記表

部材	層位	土色	土性	備考
P1	1	10YR3/2	黒褐色	シルト なし
	2	10YR4/4	褐色	シルト 10YR3-2/黒褐色シルトブロックを含む。
P2	1	10YR3/2	黒褐色	シルト 10YR4-4褐色シルトブロックを含む。
	1	10YR3/1	黒褐色	シルト 10YR5-4にじく・黒褐色土・炭化物・進土ブロックを含む。
P3	2	10YR3/3	黒褐色	シルト 10YR5-4にじく・黒褐色土ブロックを多量、炭化物を含む。
	3	10YR3/1	黒褐色	シルト 炭化物を含む。
	1	10YR3/1	黒褐色	シルト 炭化物を含む。
P4	1	10YR3/2	黒褐色	シルト 10YR4-4褐色シルトブロックを含む。
	2	10YR3/2	黒褐色	シルト 10YR5-4にじく・黒褐色土ブロック・多量の炭化物を含む。
P5	1	10YR3/2	黒褐色	シルト 10YR3-2/黒褐色シルトブロックを含む。
	2	10YR5/4	にじく・黄褐色	シルト 10YR3-2/黒褐色シルトブロックを含む。
P6	1	10YR3/1	黒褐色	シルト 10YR5-4にじく・黒褐色土を斑状に、炭化物粒を含む。
	2	10YR3/1	黒褐色	シルト 10YR5-4にじく・黑褐色土ブロックを多量、炭化物を含む。
	3	10YR3/1	黒褐色	シルト 10YR5-4にじく・黑褐色土ブロック・炭化物を含む。
P7	1	10YR3/2	黒褐色	シルト 10YR5-4にじく・黒褐色土ブロックを含む、断面固なし、記述のみ。
P8	1	10YR3/2	黒褐色	シルト 10YR5-4にじく・黒褐色土ブロック・炭化物粒を含む、断面固なし、記述のみ。
P9	—	—	—	断面固なし。
P10	—	—	—	断面固なし。

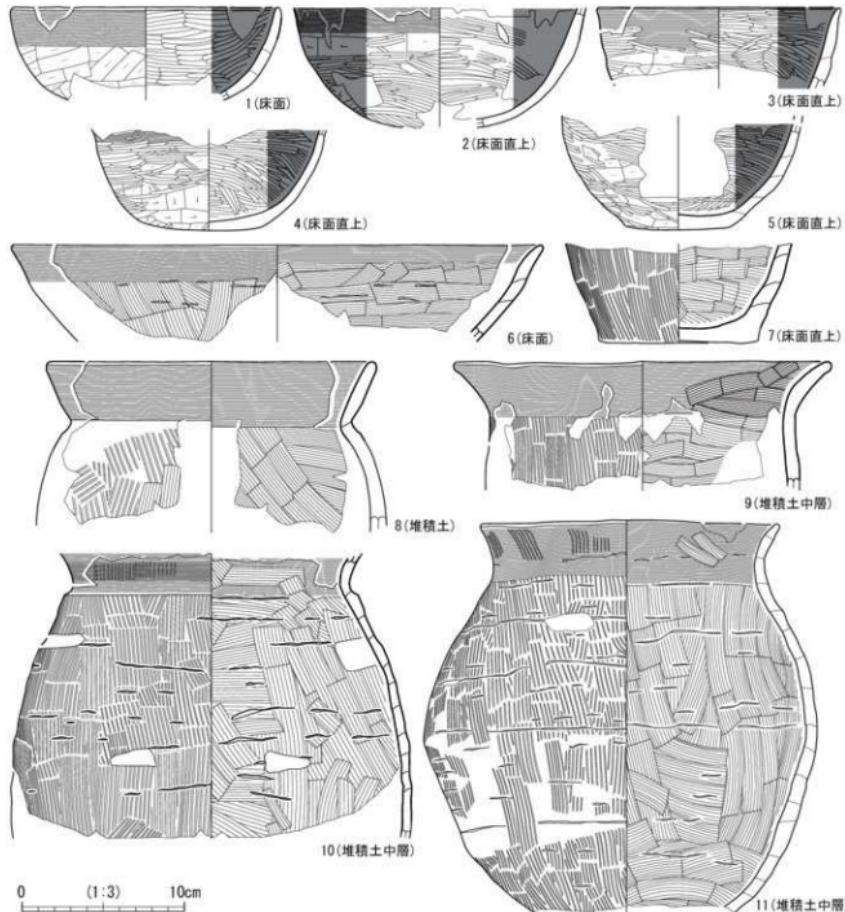
S22 施設體積表

造形名	平面形	規模(cm)	深度(cm)	備考	造形名	平面形	規模(cm)	深度(cm)	備考
P1	橢円形	88×75	19		P6	橢円形	86.5×65	30	
P2	円形	74×72	12		P7	円形	64×39	3	
P3	圓丸方形	76×67.4	30		P8	圓丸方形	45×41	4	
P4	橢円形	63×45	37		P9	橢円形	73×69	17	
P5	圓丸方形	71×69	43		P10	圓丸方形	(38)×(35)	12	



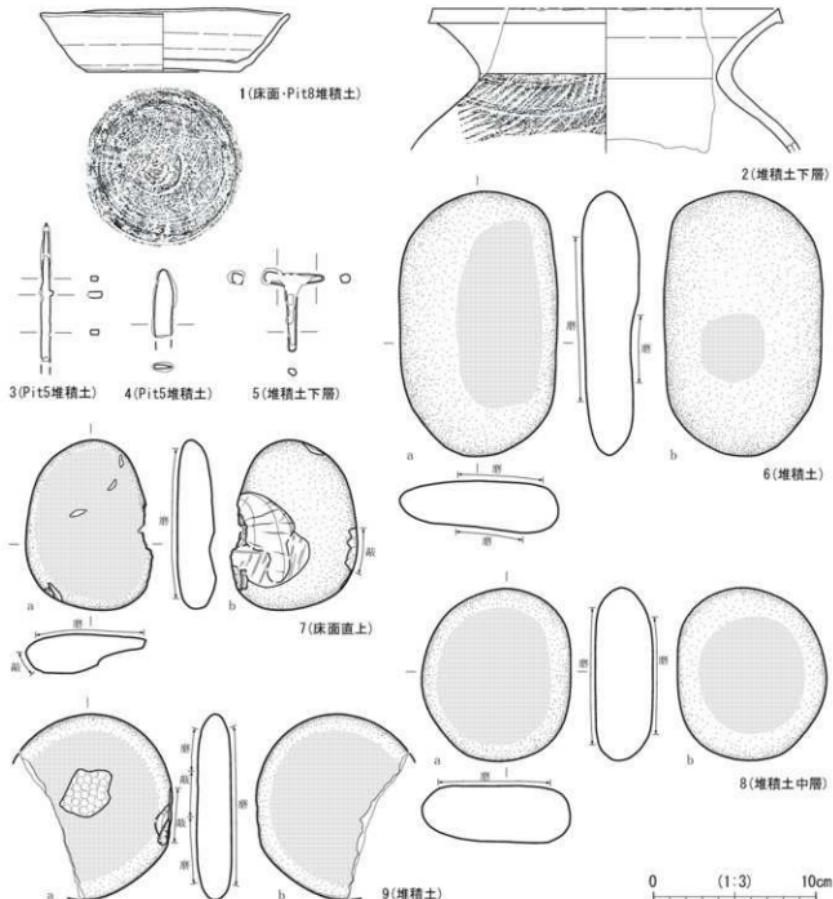
番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法面(cm)	外面調整	内面調整	備考	写真
1	C-093	BIK	S222	堆積土下層	土器部	环	口縁-底	(1.0)	—	G.4	10脚・20cm、体・底・側・付アリ	±0.18±
2	C-095	BIK	S222	床面上	土器部	环	口縁-底	(15.8)	—	4.2	10脚・20cm、体・底・側・付アリ	±0.18±
3	C-092	BIK	S222	堆積土中層	土器部	环	口縁-底	(14.6)	—	G.7	10脚・20cm、体・底・側・付アリ	±0.18±
4	C-098	BIK	S222	床面上	土器部	环	口縁-底	(14.2)	—	3.3	10脚・20cm、体・底・側・付アリ	±0.18±
5	C-091	BIK	S222	堆積土中層	土器部	环	口縁-底	(15.0)	—	G.11	10脚・20cm、体・底・側・付アリ	±0.18±
6	C-096	BIK	S222	床面上	土器部	环	口縁-底	(15.8)	—	3.8	10脚・20cm、体・底・側・付アリ	±0.18±
7	C-094	BIK	S222	堆積土下層	土器部	环	口縁-底	(19.6)	—	G.12	10脚・20cm、体・底・側・付アリ	±0.18±
8	C-088	BIK	S222	床面上	土器部	环	口縁-底	(14.6)	—	4.0	10脚・20cm、体・底・側・付アリ	±0.18±

第92図 SII22堅穴住居跡出土遺物(1)



段級 番号	管轄 番号	調査区	出土地	層位	性別	器種	部位	注意(cm)			外面調整	内部調整	備考	写真 箇所
								上縫	底縫	器高				
1	C-089	IIK	SZ22	床面	土器部	环	上縫一底	16.8	-	(5.7)	[上縫:3.25", 底:~5.7"]	[上縫:3.25", 底:~5.7"]	内面黒色處理	47
2	C-097	IIK	SZ22	床面上	土器部	环	上縫一底	-	-	(7.3)	[上縫:3.25", 底:~7.3"]	[上縫:3.25", 底:~7.3"]	内面黒色處理	47
3	C-099	IIK	SZ22	床面上	土器部	环	上縫一底	(5.0)	-	(5.0)	[上縫:3.25", 底:~5.0"]	[上縫:3.25", 底:~5.0"]	内面黒色處理	47
4	C-100	IIK	SZ22	床面上	土器部	环	上縫一底	-	-	(6.2)	[上縫:3.25", 底:~6.2"]	[上縫:3.25", 底:~6.2"]	内面黒色處理	47
5	C-099	IIK	SZ22	床面上	土器部	环	体一底	-	6.4	(7.0)	[上縫:3.25", 底:~6.4"]	[上縫:3.25", 底:~6.4"]	内面黒色處理	47
6	C-101	IIK	SZ22	床面	土器部	环	上縫一底	(33.0)	-	(5.8)	[上縫:3.25", 底:~5.8"]	[上縫:3.25", 底:~5.8"]	48	
7	C-106	IIK	SZ22	床面上	土器部	束	上縫一底	-	9.8	(6.1)	[上縫:3.25", 底:~9.8"]	[上縫:3.25", 底:~9.8"]	48	
8	C-103	IIK	SZ22	堆積土	土器部	束	上縫一底	(19.8)	-	(10.5)	[上縫:3.25", 底:~10.5"]	[上縫:3.25", 底:~10.5"]	48	
9	C-102	IIK	SZ22	堆積土中層	土器部	束	上縫一底	(23.4)	-	(7.9)	[上縫:3.25", 底:~7.9"]	[上縫:3.25", 底:~7.9"]	48	
10	C-104	IIK	SZ22	堆積土中層	土器部	束	上縫一底	-	-	(7.5)	[上縫:3.25" → 2.25", 底:~7.5"]	[上縫:3.25" → 2.25", 底:~7.5"]	48	
11	C-105	IIK	SZ22	堆積土中層	土器部	束	上縫一底	18.6	-	(21.2)	[上縫:3.25" → 2.25", 底:~21.2"]	[上縫:3.25" → 2.25", 底:~21.2"]	粘土接着合間に組み	48

第93図 SI22豎穴住居出土遺物(2)



因版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法量 cm ³			外周調整	内面調整	備考	写真 図版
								長	幅	厚				
1	E-027	B区	SE22	床面 Pit8堆積土	須恵器	环	口縁～底 (完形)	15.4	9.4	3.9	070調整 →回転系切口→回転系切口 →回転系切口	070調整		48
2	E-028	B区	SE22	堆積土下層	須恵器	甕	口縁～底	21.6	—	48.9	11縁～底:070調整, 底:070調整→070調整	070調整		48
因版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法量 cm ³			特徴・参考		写真 図版	
3	N-003	B区	SE22	Pit5堆積土	金銀製品	不明鉢形品	6.51	10.80	0.3	(4.4)				48
4	N-004	B区	SE22	Pit5堆積土	金銀製品	刀子	6.11	1.4	0.8	(5.6)				48
5	N-005	B区	SE22	堆積土下層	金銀製品	不明鉢形品	5.2	3.9	1.1	10.8				48
因版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法量 cm ³			重さ(g)	石材	備考	写真 図版
6	Kc-010	B区	SE22	堆積土	礫石器	台石	16.2	9.8	3.5	961.33	石美安山岩 円錐, 備2面(平+凹)			49
7	Kc-008	B区	SE22	床面直上	礫石器	磨+鑿	9.9	7.8	2.4	174.01	石美安山岩 円錐, 備2面(平), 磨(側面)箇所(斜面)程度(弱)			49
8	Kc-009	B区	SE22	堆積土中層	礫石器	磨石	10.6	9.1	3.6	612.24	石美安山岩 円錐, 備2面(平)			49
9	Kc-007	B区	SE22	堆積土	礫石器	磨+鑿	11.5	9.4	2.1	618.80	石美安山岩 欠損品, 備2面(平), 磨(側面)箇所(弱)			49

第94図 Si22豎穴住居出土遺物(3)



第95図 SI22堅穴住居跡出土遺物(4)

の5点に大きな差異が認められる。このほか、いずれも各部位における整形技法には共通する点が多いものの、器高に対する口径の割合が大きいものは、整形の最終段階に施される粗雑なヘラミガキが特徴的である(第93図2～4)。胎土はいずれも海綿骨針や径1mm程の小躰を多く含み、これに少量の赤色粒子が混じる。第93図-3～5の鉢は、第92図に掲載した壺を大型化したような器形を呈するもので、内外面とも体部にヘラナデが施される第93図-6とは器形・整形共に区別される。

4点掲載した土師器壺(第93図8～11)のうち、口縁部に最大径を持つ第93図-9については、壺の可能性がある。胴部中位に最大径を持つ第93図-8・10・11のうち、後二者は一括廃棄されたもので、胴部と頸部の境界にわずかな段を持つ器形や内外面の整形技法、明瞭な粘土縫の輪積痕など、同様の特徴が認められる。

また、第93図-11の外面胴部には、剥落面におけるハケメ調整の痕跡のほか、粘土紐上面に施された幅1～5mm、深さ4～6mmを測る溝状の刻みが部分的に観察された(写真図版48-6)。剥離面におけるハケメ調整については、一度整形された後に粘土の上塗りおよび再度の整形が行われたことを意味し、且つ上塗りの際の表面積増加の意図も窺われるものである。粘土紐上面の刻みについては、製作時に上下の粘土紐を噛み合わせることで接合を強固するために施されたものと考えられる。とはいって、この刻みや粘土紐の接合は総じて雑なもので、刻みの深さは4mm程を測るのに対して上位の粘土紐の食い込みは無く等しく、刻みの作出途上の箇所もみられる。

須恵器の出土量は土師器に比べて少ない。第94図-1は直線的に外傾する体部から口縁部が短く外反する須恵器壺で、底部の切り離しには回転糸切りと回転ヘラケツギが併用される。同図-2は口縁部に短い頸が付く撫肩の須恵器壺である。

第93図-3・5は用途不明の鉄製品である。前者は刀子片(同図-4)と共にPit5堆積土から出土した針状のもので、残存する中央部にわずかな張り出しを持ち、横断面は長方形を呈するものである。

礫石器および石製品(第94図-7～10、第95図)は、いずれも扁平な円錐もしくは楕円錐を素材としたものである。礫石器4点のうち、第93図-7・9には擦痕と敲打痕の二種、同図-6・8には磨痕のみが認められ、いずれも磨痕は平坦面の広範囲におよぶ。第95図-1はa上面端およびb面において縁辺に直交する細い条痕が認められる礫片である。石材は第94図-7および第95図-1が石英安山岩質凝灰岩、第94図-6・8・9は石英安山岩である。

このほか、写真図版49-6には小玉石とした石製品(登録番号:Kd-015)を掲載した。最大長1.2cm、最大幅1.0cm、最大厚0.5cm、重量0.90gを測る。石材は瑪瑙で、色調は褐灰色ないし灰白色を呈する。堆積土下層から出土したもので、人為的な加工は認められないものの、遺跡外から持ち込まれた可能性が想定されたため、写真でのみの掲載とした。

なお、この小玉石については本遺跡の東に隣接する郡山遺跡第35次調査において、Ⅰ期官衙以前の所産と考えられるSI444堅穴住居跡堆積土から28点(黒色23点・白色5点、いずれも石材不明)、Ⅰ期官衙期の所産と考えられ

るSI446竪穴住居跡掘り方堆積土から36点(色調・石材共に不明)出土している(仙台市教委1984)。

SI23 竪穴住居跡(第96~98図)

[位置・確認] II区北半部中央、F-2グリッドに位置する。東壁際と煙道部のみが検出された。

[重複] SI18・22に切られる。

[規模・形態] 残存する部分の規模は、南北456cm、東西85cmを測る。平面形状は隅丸方形を呈するものと推測される。

[方向] カマド煙道部基準でN-8°-Eである。

[堆積土] 11層に分層された。1・2層は住居堆積土、3~11層はカマド煙道部堆積土である。いずれも炭化物を含む黒褐色ないし暗褐色シルトを主体とする。

[壁面] 残存する部分の壁面は、やや外反して立ち上がる。残存する部分の壁高は、7~18cmを測る。

[床面] 概ね平坦である。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

[柱穴] 3基検出された。いずれも柱痕跡は認められず、柱穴であるか否かは不明である。P1・2は上端径が1mを超える土坑状のもので、P3は北東コーナーに位置する。

[カマド] 煙道部のみが検出された。煙出し部の北側上面はSI18に切られる。煙道部の規模は、長さ110cm、幅25cm前後、深さ10~23cmを測り、底面はわずかな起伏を持ちながら煙出し部に向かって緩やかに下る。煙出し部は上端径36cm、深さは最大36cmを測るピット状を呈する。

[出土遺物] 土師器壺・高壺・甕・瓶を各1点掲載した(第97・98図)。いずれもピットの堆積土や床面上から出土したもので、時期的には本竪穴住居跡の廃絶と近接するものと考えられる。

北東コーナーの床面上から出土した土師器壺(第97図-1)は、外面に段や棱を持つたす部から口縁部が大きく開く丸底を呈するものである。Pit2堆積土から出土した同図-2は小振りな壺部の破片資料で、外面の口縁部と体部の境界に段を持つ器形を呈する。床面上から出土した土師器甕(第98図-1)は、最大径を胴部中位に持つ。

SI24 竪穴住居跡(第99~101図)

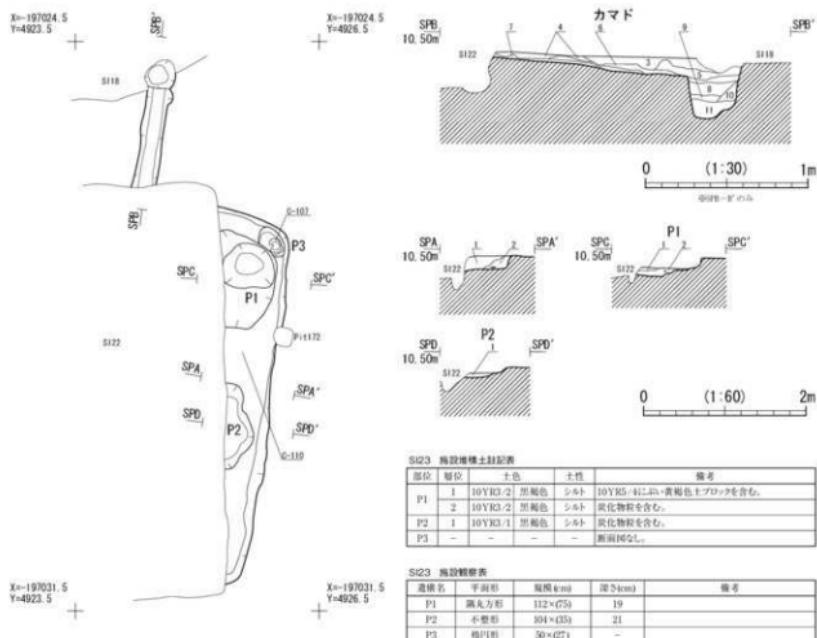
[位置・確認] II区北半部南側、F-2グリッドに位置する。南東側は調査区外にかかる。

[重複] SI25A・Bを切り、SI22・26、Pit182に切られる。これらのうち、規模や本竪穴住居跡との位置関係、またカマドの付設位置からみて、後述するSI25Aについては本竪穴住居跡の建て替え前の可能性が考えられるが、重複関係をみると、本竪穴住居跡とSI25Aの間には後述するSI25Bが介在する。SI25Bは本竪穴住居跡およびSI25Aの東側に軸を立てて構築されたものであるが、このような重複および位置関係からは、SI25A→SI25B→SI24(本竪穴住居跡)という建て替えの変遷が想定される。とはいっても、SI25Bは局所的な検出に留まるものであるため、建て替えの有無も含めた3軒の重複関係については判然としない。

[規模・形態] 検出された規模は、南北555cm、東西477cmを測る。平面形状は隅丸長方形を呈する。

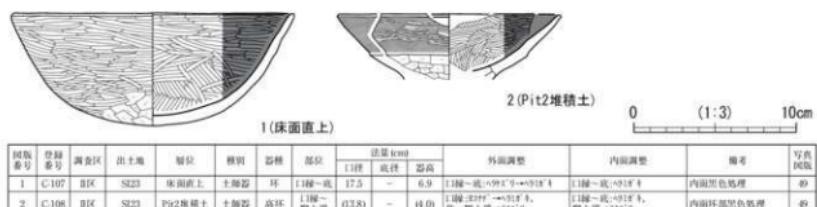
[方向] カマド1煙道部基準でN-10°-Wである。

[堆積土] 47層に分層された。1~4層は黒褐色シルトを主体とする住居堆積土で、中央部北側には4層、それ以外には2層が厚く堆積する。5~14層はカマド1間連層位で、6層は層下位に被熱箇所が認められることから天井部の崩落土と考えられる。15~21層はカマド1袖部構築土である。東側袖部の構築土に相当する18層は硬化が著しい焼土層であるが、周辺には硬化する程の火が焚かれた事を裏付けるような被熱の痕跡が認められないことから、カマド2天井部に由来する可能性がある。22~23層はカマド1の掘り方堆積土である。24~35層はカマド2間連層位である。34層は被熱による硬化が認められる焼土層で、燃焼部底面に堆積する。36~47層はカマド3間連層位で

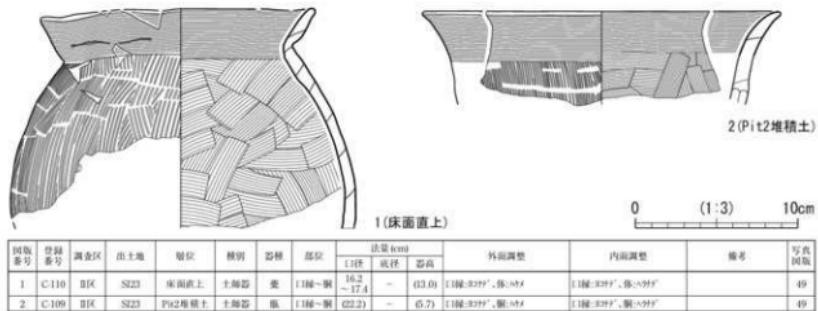


SI23 堆積土記表				備考	
部位	層位	土色	土性		
住居堆積土	1	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR5-4に5-6黄褐色土ブロックを複数に、炭化物粒を含む。
	2	10YR3/3	黒褐色	シルト	炭化物粒を含む。
カマド	3	10YR3/2	黒褐色	シルト	10YR5-6黄褐色土ブロック・炭化物粒を含む。
	4	10YR2/3	黒褐色	シルト	10YR5-6黄褐色土ブロック・焼土ブロックを含む。
	5	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	10YR5-6黄褐色土・炭化物粒を含む。
	6	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒を含む。
	7	10YR5-6	黄褐色	シルト	焼土・炭化物粒を含む。
	8	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒・焼土ブロックを含む。
	9	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	炭化物粒を多量含む。
	10	10YR3/4	暗褐色	粘土	炭化物粒を含む。
	11	10YR5-6	黄褐色	シルト	灰状・炭化物を含む。

第96図 SI23竪穴住居跡



第97図 SI23竪穴住居跡出土遺物(1)



第98図 SI23堅穴住居跡出土遺物(2)

ある。37~39層は煙道部天井崩落土、42~43層は燃焼部天井崩落土にそれぞれ相当し、いずれも被熱の痕跡が認められる。

【壁面】検出された部分の壁面は、直線的にわずかに外傾して立ち上がる。残存する壁高は、6~18cmを測る。

【床面】概ね平坦である。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

【柱穴】12基が検出され、ほぼ半数のP1~P5・P8・P11には柱痕跡が認められた。規模や位置関係からみて、少なくともP2・P3・P6は主柱穴に相当すると考えられ、これらの柱間寸法は、P2・P6、P3・P6と共に約280cmを測る。また、P2とP7、P3とP10はそれぞれ重複関係にあることや複数基存在するカマドの存在を併せると、本堅穴住居跡では建て替えが行われたものと考えられる。

このほか、床面中央部には西からP1、P5、P8が東西方向に150~170cm程の間隔で直線的に並ぶように位置する。これらについては、3基共に補助的な柱穴に相当する可能性、或いはP1およびP4・P8・P11のいずれかが上記の主柱穴として加わり、亀甲形に近い柱穴配置を呈する可能性が想定される。P12はカマド1の袖部構築土下面より検出されたもので、カマド2に伴うものと考えられる。

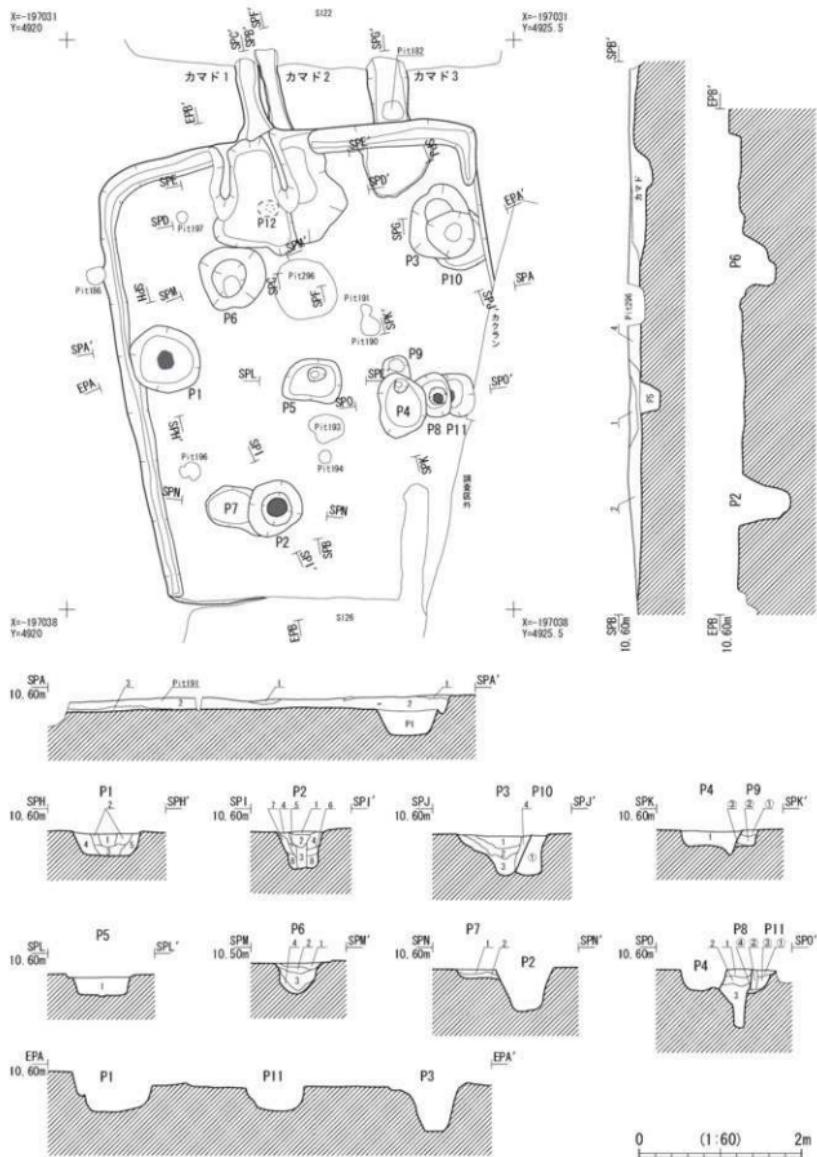
【周溝】検出された範囲においては、南壁と東壁の一部を除き全周し、規模は西壁が幅18~27cm、深さ7~12cm、北壁が幅27~30cm、深さ7~14cmを測る。北壁の周溝はカマド2・3を切って構築されていることから、カマド1機能時に伴うものと考えられるが、それ以外の部分がどの段階で構築されたものなのかについては、本堅穴住居跡の建て替えやカマドの造り替えに伴う掘り直しの可能性も想定されるため、判然としない。

【カマド】本堅穴住居跡からは、計3基のカマドが検出された。いずれも北壁に位置するもので、カマド1および2は中央部のやや西寄りに、カマド3は北東コーナー寄りに、それぞれ壁面には直交する形で付設される。

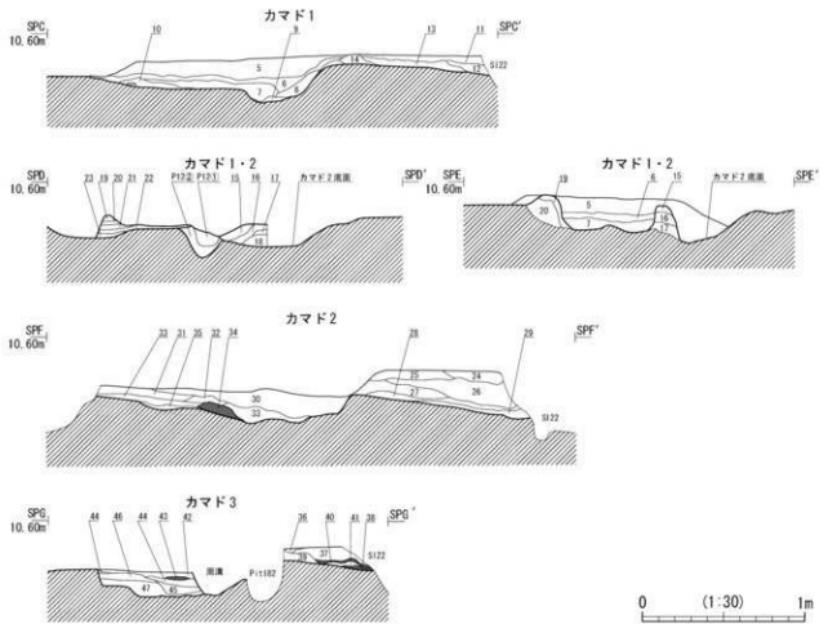
カマド1とカマド2は重複関係にあることから最低1度の造り替えが認められ、またカマド1が住居廃絶時まで機能していたものと考えられる。カマド2とカマド3の新旧関係および同時性については判然としない。

カマド1は北壁の中央部からやや西側に付設され、カマド2を切る。袖部の規模は東袖が長さ116cm、幅16~30cm、西袖が長さ95cm、幅20~35cmを測り、北壁から末端がわずかに開く「ハ」字状に延びる。燃焼部の規模は、幅45~100cm、奥行き155cm、奥壁高35cmを測り、平面形状は前庭部と一体化した不整形を呈する。底面は南側が概ね平坦で北側に窪みを持ち、奥壁は直線的に外傾して立ち上がる。煙道部は奥壁の中心からやや東に軸を外して構築され、北側および煙出し部はSI22に切られる。残存する部分の規模は長さ100cm、幅25~45cm、深さ12~22cmを測り、底面は先端に向かって緩やかに下る。

カマド2は北壁のほぼ中央に付設され、カマド1に切られる。西側を除く燃焼部と煙道部南側が残存する。残存



第99図 SI24竪穴住居跡(1)



SI24 進積土註記表(1)

部位	層位	土色	土性	備考
住居堆積土	1	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YR4-1褐色灰色グリナイトを含む。
	2	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YR4-1褐色灰色グリナイト・マンガンを斑状に、炭化物・鐵十石を含む。
	3	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YR5-4(4.5m) 黃褐色土ブロックを多量含む。
	4	10YR3-2	黒褐色	腐泥中にマンガンを含む。
カマド1	5	10YR3-1	黒褐色	シルト 10YR5-1褐色灰土を斑状に、炭化物鉱・鐵十石を含む。
	6	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YR5-4(4.5m) 黄褐色土・炭化物鉱・鐵十石を含む。層子間に被熱崩所あり。(天井崩落土)
	7	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YR5-4(4.5m) 黄褐色土ブロックを多量含む。
	8	10YR3-3	暗褐色	シルト 10YR5-4(4.5m) 黄褐色土ブロック・炭化物鉱を含む。
	9	10YR5-4	10YR4-1褐色	シルト 10YR5-4(4.5m) 黄褐色土を斑状に、炭化物・鐵十石を含む。
	10	10YR3-3	暗褐色	シルト 10YR5-4(4.5m) 黄褐色土ブロックを多量含む。
	11	10YR3-3	暗褐色	シルト 炭化物鉱・鐵十石を含む。
	12	10YR3-3	暗褐色	シルト 10YR5-4(4.5m) 黄褐色土を斑状に、炭化物鉱を含む。
	13	10YR3-3	暗褐色	シルト 10YR5-4(4.5m) 黄褐色土ブロック・炭化物鉱を含む。
	14	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YR5-4(4.5m) 黄褐色土ブロック・炭化物鉱を含む。
	15	10YR3-2	黒褐色	シルト 炭化物鉱・鐵十石を含む。
	16	10YR3-3	暗褐色	シルト 10YR6-4(4.5m) 黄褐色土ブロック・炭化物・鐵十石ブロックを含む。
	17	10YR2-2	黒褐色	鐵十石ブロック・鐵十石を多量含む。
カマド1 築	18	2.5YR4-6	赤褐色	一 焼成の固形断面、カマド2大舟崩落土の可能性あり。
	19	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YR5-4(4.5m) 黄褐色土・炭化物鉱を含む。
	20	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YR5-4(4.5m) 黄褐色土ブロックを多量、鐵十石を含む。
	21	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YR5-4(4.5m) 黄褐色土を斑状に、鐵十石を含む。
カマド1 壁	22	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YR5-4(4.5m) 黄褐色土ブロックを多量含む。
	23	10YR5-4	10YR4-1褐色	シルト 10YR3-2 黑褐色土ブロックを含む。
	24	10YR6-4	10YR4-1褐色	シルト 調査: 10YR3-2 黑褐色土を多量含む。
カマド2	25	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YR6-4(4.5m) 黄褐色土ブロック・炭化物鉱を含む。
	26	10YR3-3	暗褐色	シルト 10YR6-4(4.5m) 黄褐色土ブロック・鐵十石を含む。
	27	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YR6-4(4.5m) 黄褐色土ブロック・炭化物鉱を含む。
	28	10YR2-2	黒褐色	シルト 鐵十石を含む。

第100図 SI24堅穴住居跡(2)

S24 培養土計測表(2)

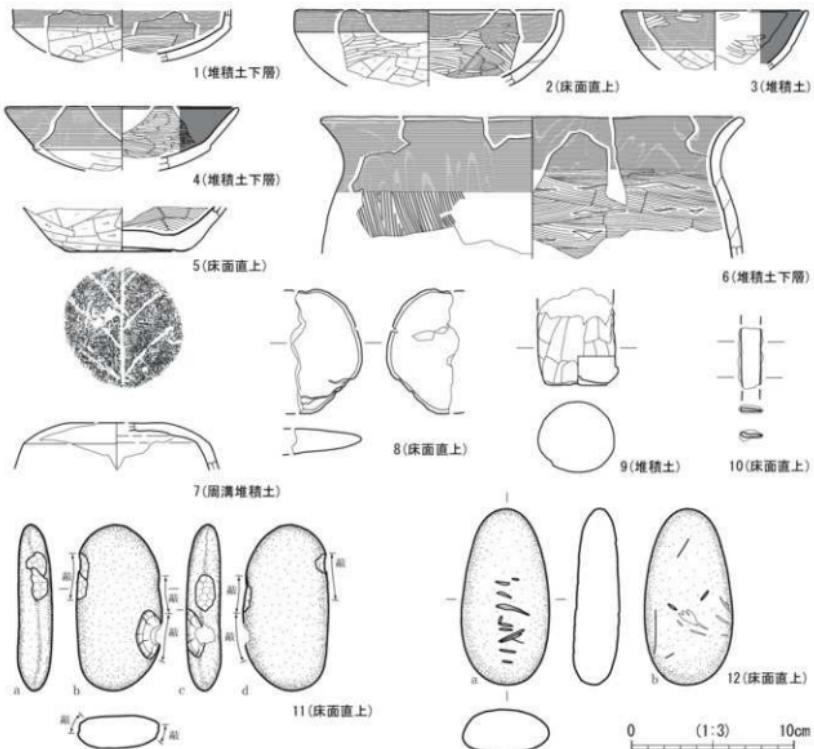
部位	層位	土色	土性	備考
カマド2	29	10YR6-4 にじみ・黄褐色	シルト	なし
	30	10YR3-2 黒褐色	シルト	10YR5-3にじみ・黄褐色土を斑状に、炭化物・鐵土ブロックを含む。
	31	10YR5-3 にじみ・黄褐色	シルト	10YR3-2黒褐色土を斑状に、鐵土ブロックを多量含む。
	32	5YR3-1 黒褐色	シルト	炭化物、炭灰土を含む。
	33	5YR4-1 暗褐色	シルト	鐵土を含む。
	34	2.5YR5-6 明褐色	シルト	鐵熱・汙褐色。
	35	10YR6-4 にじみ・黄褐色	シルト	10YR3-2黒褐色土ブロックを含む。
カマド3	36	5YR3-1 黒褐色	シルト	鐵土を含む。
	37	10YR3-2 黒褐色	シルト	炭化物・鐵土を含む。(天井崩落土)
	38	-	-	鐵土層。(天井崩落土)
	39	10YR6-4 にじみ・黄褐色	シルト	(天井崩落土)
	40	10YR3-2 黒褐色	シルト	10YR6-4にじみ・黄褐色土ブロックを含む。
	41	-	-	鐵土層。
	42	10YR3-2 黒褐色	シルト	炭化物、鐵土を含む。(天井崩落土)
	43	5YR3-1 黒褐色	シルト	鐵土層。(天井崩落土)
	44	10YR3-2 黒褐色	シルト	層状に10YR5-4にじみ・黄褐色土を含む。
	45	10YR3-3 暗褐色	シルト	10YR6-4にじみ・黄褐色土ブロックを含む。
	46	10YR3-2 黒褐色	シルト	10YR6-4にじみ・黄褐色土を多量含む。
	47	10YR6-4 にじみ・黄褐色	シルト	10YR3-2黒褐色土ブロックを含む。

S24 施設地土壤記録表

部位	層位	土色	土性	備考
P1	1	10YR3-3 暗褐色	シルト	10YR5-6にじみ・黄褐色土シルトブロック・炭化物群・鐵土を含む。(柱軸跡)
	2	10YR5-4 にじみ・黄褐色	粘土質シルト	10YR5-6にじみ・黄褐色土シルトブロック・炭化物群・鐵土を含む。
	3	10YR4-3 にじみ・黄褐色	粘土質シルト	10YR5-6にじみ・黄褐色土シルトブロック・炭化物群・鐵土を含む。
	4	10YR5-3 にじみ・黄褐色	粘土質シルト	炭化物群を含む。
	5	10YR4-4 にじみ・黄褐色	粘土質シルト	10YR3-2黒褐色土シルトブロックを含む。
P2	1	10YR3-2 黒褐色	シルト	炭化物群を含む。
	2	10YR3-3 暗褐色	シルト	10YR5-6にじみ・黄褐色土シルト・炭化物群・鐵土を含む。(柱軸跡)
	3	10YR3-2 黒褐色	粘土質シルト	炭化物群を含む。(柱軸跡)
	4	10YR3-3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物群を含む。
	5	10YR3-2 黒褐色	粘土質シルト	炭化物群を含む。
	6	10YR5-3 にじみ・黄褐色	粘土質シルト	炭化物群を含む。
P3	7	10YR5-6 黄褐色	シルト	10YR5-6黄褐色シルトブロック・炭化物群を含む。
	8	10YR5-3 にじみ・黄褐色	粘土質シルト	炭化物群を含む。
	9	10YR4-3 にじみ・黄褐色	シルト	10YR5-6黄褐色シルトブロック・炭化物群・鐵土・マンガン鉱を含む。
P4	10	10YR5-6 黄褐色	シルト	10YR5-6黄褐色シルトブロック・炭化物群・鐵土・マンガン鉱を含む。
	11	10YR3-2 黒褐色	シルト	10YR5-6黄褐色シルトブロック・炭化物群・鐵土・マンガン鉱を含む。
	12	10YR3-2 黒褐色	シルト	炭化物群を含む。
P5	13	10YR3-2 黒褐色	シルト	炭化物群を含む。
	14	10YR3-4 暗褐色	シルト質粘土	鐵土・マンガン鉱を含む。
	15	10YR3-3 暗褐色	シルト質粘土	鐵土・マンガン鉱を含む。
	16	10YR3-3 暗褐色	シルト質粘土	炭化物群・鐵土・マンガン鉱を含む。
P6	17	2.5Y4-1 黄褐色	シルト	鐵土・マンガン鉱を含む。
	18	10YR4-2 黄褐色	シルト	2.5Y4-1黄褐色土シルト・鐵土・マンガン鉱を含む。
P7	19	10YR3-3 暗褐色	シルト	2.5Y4-1黄褐色土シルトブロック・鐵土・マンガン鉱を含む。
	20	10YR4-2 黄褐色	シルト	2.5Y4-1黄褐色土シルト・鐵土・マンガン鉱を含む。
	21	10YR3-2 黒褐色	シルト	2.5Y4-1黄褐色土シルトブロック・鐵土・マンガン鉱を含む。
P8	22	10YR2-3 黒褐色	シルト	炭化物群を含む。
	23	10YR2-3 黒褐色	シルト	2.5Y4-1黄褐色土シルトブロック・鐵土・マンガン鉱を含む。
	24	10YR3-2 黒褐色	シルト	炭化物群・鐵土・ブロックを含む。
P9	25	10YR3-2 黒褐色	シルト	鐵土・マンガン鉱を含む。
	26	10YR2-3 黒褐色	シルト	10YR3-2黒褐色土を含む。
	27	10YR2-3 黒褐色	シルト	鐵土・マンガン鉱を含む。
P10	28	10YR3-2 黒褐色	シルト	10YR3-4にじみ・黄褐色土ブロックを多量含む。
	29	10YR3-2 黒褐色	シルト	10YR3-4にじみ・黄褐色土ブロック・鐵土ブロックを含む。
	30	2.5YR5-4 黄褐色	シルト	鐵土・マンガン鉱を含む。
P11	31	10YR3-2 黒褐色	シルト	鐵土・マンガン鉱を含む。
	32	10YR3-2 黒褐色	シルト	鐵土ブロックを含む。
	33	10YR3-2 黒褐色	シルト	鐵土を含む。
	34	10YR4-3 にじみ・黄褐色	シルト	炭化物群を含む。
P12	35	5YR3-1 黒褐色	シルト	10YR5-6にじみ・黄褐色土ブロック・炭化物・鐵土を含む。
	36	10YR4-2 黒褐色	シルト	10YR5-4にじみ・黄褐色土ブロック・微量の炭化物を含む。

S24 地盤特徴表

透徹名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備考
P1	扇円形	89×78	22	
P2	扇円形	68×62	61	
P3	圓丸方形	90×79	23	
P4	圓丸方形	76×55	26	
P5	圓丸方形	70×52	26	
P6	圓丸方形	77×56	43	
透徹名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備考
P7	長袖円形	63×14	11	
P8	圓丸方形	54×131	20	
P9	圓丸方形	32×38	27	
P10	圓丸方形	665×123	50	
P11	圓丸方形	52×68	31	
P12	扇円形	25×20	20	セマド2に伴うビット



団版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法量(cm) —口径 傷徑 器高	外観調整	内面調整	備考	写真 図版
1	C111	IIK	S224	堆積土下層	土器部	环	口縁～底	—	—	(3.2)	口縁:3.2mm、底:~5mm 底下平一底:~3mm	49
2	C112	IIK	S224	床面直上	土器部	环	口縁～底	(0.6)	—	(4.7)	口縁:3.2mm、 底:~5mm 底下平一底:~3mm	49
3	C113	IIK	S224	堆積土	土器部	环	口縁～底	(1.6)	—	(3.6)	口縁:3.2mm、 底:~5mm 底下平一底:~3mm	49
4	C114	IIK	S224	堆積土下層	土器部	环	口縁～底	(1.4)	—	(3.9)	口縁:3.2mm、底:~5mm 底下平一底:~3mm	49
5	C116	IIK	S224	床面直上	土器部	束	口縁～底	—	7.0	(2.7)	側下端:~9.7mm、底:本器最高 底下平一底:~3mm	49
6	C115	IIK	S224	堆積土下層	土器部	束	口縁～底	(3.6)	—	(8.7)	口縁:3.2mm、側:~5mm 底下平一底:~3mm	49
7	E029	IIK	S224	堆積堆積土 土器部	束	天井 —口縫	—	—	(2.9)	口縫調整	外面自然輪付着	49

団版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法量(cm) —長 幅 厚	重量(g)	特徴	備考	写真 図版
8	P-008	IIK	S224	床面直上	土製品	焼成物土塊	—	(7.6) (4.3) (0.5)	(0.8)	堅状		49
9	P-007	IIK	S224	堆積土	土製品	支脚	—	(6.0) 4.7 4.4	(132.1)	表面調整		49

団版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法量(cm) —長 幅 厚	重量(g)	特徴	備考	写真 図版
10	N-006	IIK	S224	床面直上	金屬製品	刀子?	—	(3.8) 2.0 0.5	(4.2)			49

団版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法量(cm) —長 幅 厚	重さ(g)	石材	備考	写真 図版
11	Ke-011	IIK	S224	床面直上	礫石器	礫石	—	10.3 5.2 2.3	337.95	石英岩山岩質 底凹槽、底(側)崎所程度(強)		49
12	Kd-016	IIK	S224	床面直上	石製品	刃物による 剝離のある標本	—	10.8 5.5 2.8	382.39	石英岩山岩質 底凹槽、刃物痕あり		49

第101図 SII24 積穴住居跡出土遺物

する燃焼部の規模は、幅75cm、奥行き140cm、奥壁高約20cmを測り、平面形状は前庭部と一体化したような不整形を呈する。底面は起伏を持ちながら皿状に窪み、奥壁は直線的に外傾して立ち上がる。煙道部北側および煙出し部はSI22に切られる。残存する規模は、長さ100cm、幅30cm前後、深さ35~55cmを測り、底面は北側に大きく下る。

カマド3は北壁の東側に付設される。袖部は残存しておらず、燃焼部および煙道部の一部が残存する。残存する燃焼部の規模は幅85cm、奥行き62cmを測り、断面形状は深さ15cm程の土坑状を呈する。奥壁から煙道部南側末端にかけては周溝および後世の構造に、また煙道部北側および煙出し部はSI22に切られる。残存する煙道部の規模は、長さ82cm、幅45~50cm、深さ14~24cmを測り、底面は北側に緩やかに下る。

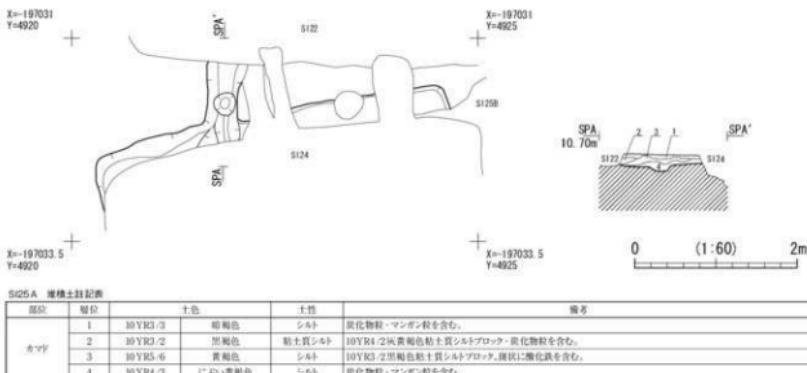
[出土遺物] 土師器環4点・壺2点、須恵器蓋1点、土製品2点、鉄製品および礫石器・石製品各1点を掲載した(第101図)。1・2は、いわゆる鬼高系土師器の特徴を有する土師器環で、丸底で体部が内湾し、短く直立する口縁部と体部の境界に段もしくは稜を持つ器形を呈する。色調は前者が内外面共に橙色、後者は同じく浅黄橙色を呈し、胎土は径1mm程の小穂や石英のはか、海綿骨針や赤色粒子を多く含む。調整はいずれも内外面口縁部にヨコナデ、外面体部にヘラケズリ、内面体部にヘラナデが施され、後者はこの後に粗いヘラミガキが施される。これに対し、3・4は、いわゆる在地系の特徴を有するもので、丸底で体部から口縁部が内湾し、外面の口縁部と体部の境界に段を持つ器形を呈する。後者はこれに加えて内面の口縁部と体部の境界が屈曲する。胎土はいずれも海綿骨針および径1mm程の小穂を多く含む。6は最大径を胴部上半に持つ土師器壺で、内面胴部には明瞭な輪積痕が認められる。

7は口唇部を欠損する須恵器環で、回転ヘラケズリが施される天井部と直線的に外傾する口縁部の境界に稜を持つ器形を呈する。周溝堆積土からの出土であるが、厳密な地点については不明である。

焼成粘土塊とした8は、側縁が先細の盤状に捏ねられたもので、全体の形状は不明である。何らかの未完成である可能性も想定される。9は指頭調整により径4.5cm程に整形された円筒形の支脚下端部である。10は、刀子の刃部片と推定される。11・12は共に扁平な梢円形を素材とした敲石および石製品である。前者は平坦面の側縁部に、後者は両平坦面に使用痕が認められる。石材はいずれも石英安山岩質凝灰岩である。

SI25A 積穴住居跡(第102~103図)

[位置・確認] II区北半部南側、F-2グリッドに位置し、北壁際と煙道部のみが検出された。



第102図 SI25A 積穴住居跡

[重複] SI 22・24・25B に切られる。このうち、SI 24・SI 25B と本竪穴住居跡は、建て替えられた1軒のものである可能性が想定される。この点については、SI 24 の項を参照されたい。

[規模・形態] 残存する部分の規模は、南北80cm、東西444cmを測る。平面形状は隅丸方形を呈するものと推測される。

[方向] カマド煙道部基準でN-3°・Eである。

[堆積土] 4層に分層された。いずれもカマド煙道部堆積土である。住居部分の堆積土については不明である。

[カマド] 北壁に位置し、中央部の西側に付設される。煙道部の一部のみが残存し、壁面に対しやや東に軸を傾けた状態で構築される。残存する規模は、長さ80cm、幅25～50cm、深さ10～15cmを測る。底面は概ね平坦で、残存する中央部には上端径40cm前後、深さ8cmを測るピット状の落ち込みが認められる。

[出土遺物] 堆積土中から土師器片が出土しているが、本竪穴住居跡からの出土遺物として掲載したのは堆積土中から出土した砥石1点のみである(第103図)。素材となる礫の形状は不明で、分割された面の1部に砥面が形成される。石材は石英安山岩質凝灰岩である。



第103図 SI 25A 竪穴住居跡出土遺物

SI 25B 竪穴住居跡(第104図)

[位置・確認] II区北半部南側、F-2グリッドに位置する。北壁の一部のみが検出されたが、それがどの部分に相当するかは不明である。東側および南側の大半は調査区外にかかる。

[重複] SI 25A を切り、SI 24 に切られる。この2軒と本竪穴住居跡は、建て替えられた1軒のものである可能性が想定される。この点については、SI 24 の項を参照されたい。

[規模・形態] 検出された部分の規模は、南北250cm、東西204cmを測る。平面形状は不明である。

[方向] 北壁基準でN-71°・Eである。

[堆積土] 4層に分層された。いずれも住居堆積土である。

[壁面] 検出された部分の壁面は内湾気味に立ち上がる。残存する壁高は、10cm前後を測る。

[床面] 南側に向かって緩やかに下り、北側に10cm程の落ち込みが認められる。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

[柱穴] 2基検出された。いずれも柱痕跡は認められず、柱穴であるか否かは不明である。

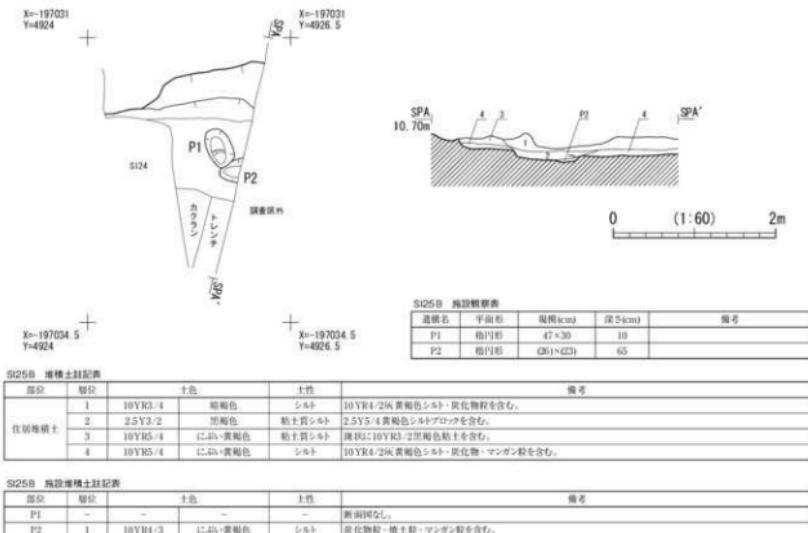
[出土遺物] 遺物は出土していない。

SI 26 竪穴住居跡(第105・106図)

[位置・確認] II区北半部南側、F-2・3グリッドに位置する。北西側約1/4が検出された。東側は調査区外にかかる。

[重複] SI 24 を切り、SD 19 に切られる。南および西側の大半は搅乱により失われている。

[規模・形態] 検出された範囲の規模は、南北253cm、東西295cmを測り、平面形状は方形ないし隅丸方形を呈するものと推測される。



第104図 SI25B堅穴住居跡

[方向]カマド煙道部基準でN.3°Eである。

[堆積土]21層に分層された。1～4層は炭化物を含む黒褐色シルトを主体とする住居堆積土で、1・2層にはにぶい黄褐色土を含む。5～16層はカマド関連層位で、10層は層下位に面的な被熱箇所が認められることから天井部崩落土と考えられる。17層は周溝内堆積土である。18・19層はカマド袖部構築土、20・21層はカマド掘り方堆積土にそれぞれ相当する。

[壁面]検出された範囲の壁面は、直線的に外傾して立ち上がる。残存する壁高は、概ね7cm前後を測る。

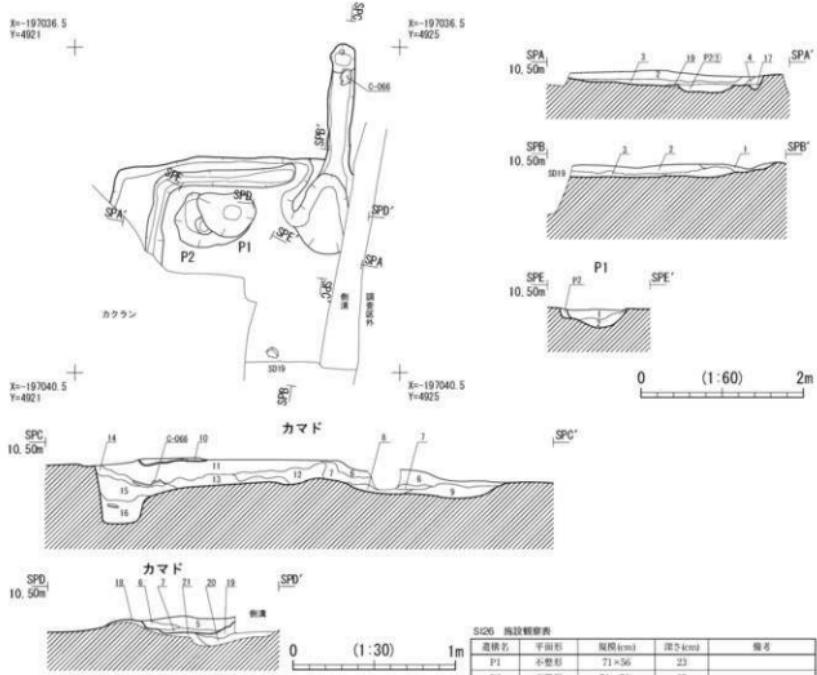
[床面]概ね平坦である。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

[柱穴]2基検出された。これらは重複関係にあり、P1に切られるP2には柱痕跡が認められた。規模や位置関係から、この2基は造り替えが行われた主柱穴に相当する可能性がある。

[周溝]検出された範囲においては、西壁で約40cm、北壁で約10cm壁面の内側を周る。規模は幅15～25cm、深さ7～17cmを測り、断面形状は逆台形状を呈する。

[カマド]北壁に位置し、壁面にほぼ直交して付設される。袖部は西側が長さ90cm、幅27～40cmを測り、東側の殆どは調査時の個溝により失われているものの、わずかに残存する部分から平面形状はハ字状を呈するものと推測される。燃焼部の規模は、幅20cm、奥行き80cm、深さ20cm、奥壁高約10cmを測る。底面は皿状に窪み、奥壁は緩やかに立ち上がる。また、本堅穴住居跡のカマドは、西側が7cm高くなるテラス状の掘り方を持つ。煙道部は長さ115cm、幅30cm前後、深さ14～18cmを測り、底面は煙出し部に向かって緩やかに下る。煙出し部は上端径が35×30cm、深さ42cmのピット状を呈する。

[出土遺物]土師器壺3点・壺1点、須恵器壺1点を掲載した(第106図)。土師器壺(1～3)は、いずれも丸底で体部から口縁部にかけて内湾する器形を呈する。前二者は外面の口縁部と体部の境界に段を、後者は括れを持ち、また3



SI26. 施設概要表			
施設名	平面形	幅員(cm)	津丈(cm)
P1	小整形	71×56	23
P2	小整形	74×50	25

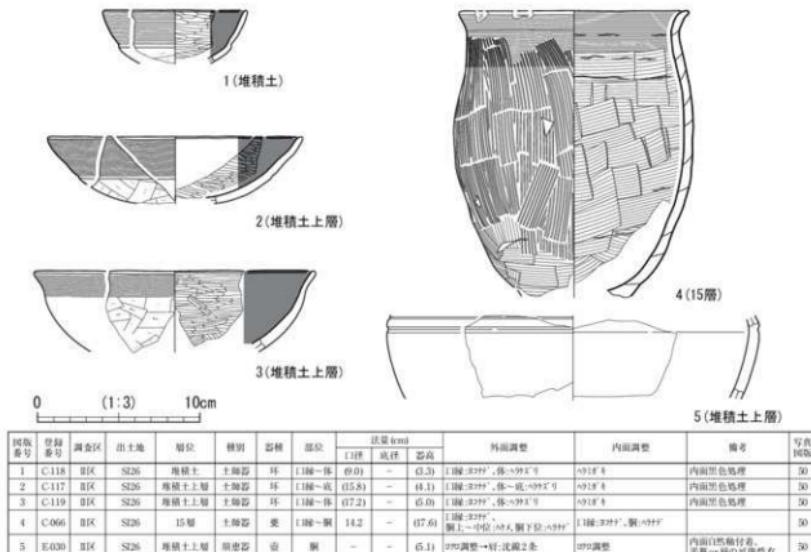
SI26. 埋積土跡記表

層位	層位	土色	土性	備考
住居堆積土	1	10YR2-1	黒色	シルト 液状化なし。10YR2-4に似る。
	2	10YR3-2	黒褐色	シルト 液化物・鐵・礫を含む。
	3	10YR3-1	黒褐色	液化物を多量含む。
	4	10YR3-3	黒褐色	シルト 液化物を多量含む。
カマド	5	10YR3-3	暗褐色	シルト 液化物・鐵・マンガン鉱を含む。
	6	10YR4-3	[に]5-黄褐色	シルト 10YR5-4に似る。液化物・鐵・ブロックを多量含む。
	7	10YR3-2	黒褐色	シルト 液化物・鐵・ブロックを多量含む。
	8	10YR4-4	褐色	粘土質シルト 液化物・鐵を含む。
	9	10YR2-3	黒褐色	シルト 液化物を多量含む。
	10	10YR4-2	灰褐色	粘土質シルト 液化物あり。(天津崩落)
	11	7.5Y4-2	灰オーブ色	砂質シルト 液化物・鐵・土砂を含む。
	12	2.5Y5-3	暗褐色	シルト 液化物・鐵・土砂を含む。
	13	10YR5-6	青褐色	シルト 液化物・鐵・土砂を含む。
	14	2.5Y5-3	暗褐色	シルト 液化物を多量含む。
周溝	15	10YR2-3	黒色	シルト 液化物を多量含む。
	16	10YR4-4	褐色	粘土質シルト 液化物を含む。
カマド脇	17	10YR3-1	黒褐色	シルト 10YR6-4に似る。
	18	10YR4-4	褐色	粘土質シルト 10YR6-4に似る。
カマド側方	19	-	-	記述なし。
	20	-	-	記述なし。
	21	10YR6-4	[に]5-黃褐色	-

SI26. 施設堆積土跡記表

層位	層位	土色	土性	備考
P1	1	10YK3-3	黒褐色	シルト 10YR5-4に似る。液化物・鐵・土砂を含む。
	2	10YR5-4	[に]5-黃褐色	シルト 10YR3-1黒褐色ブロックを含む。
P2	1	10YK3-2	黒褐色	シルト 10YR6-4に似る。液化物・鐵・土砂を含む。

第105図 SI26竪穴住居跡



第106図 SI26 穫穴住居跡出土遺物

点共に内面の同位置は緩く括るものである。土師器壺(4)は煙道部北側末端から煙出し部にかけて堆積する15層から出土したもので、器形は最大径を胴部中位に持ち、口縁部は短く外反する。色調は内外面共に明赤褐色を呈し、胎土には径海綿骨針および0.5~3mm程の小礫や石英を多量に含むほか、金雲母と目される鉱物片を少量含む。5は胴部上端に2条の沈線が施される須恵器壺である。

SI27 穫穴住居跡(第107・108図)

[位置・確認] II区北半部南側、F-2・3グリッドに位置する。後世の造構に切られており、カマド周辺、竪穴住居跡中央部、南壁および東南コーナー周辺が南北に断続した状態で検出された。西側は調査区外にかかる。

[重複] SI28を切り、SD18・19に切られる。東側の大半は搅乱により失われている。

[規模・形態] 検出された規模は、南北420cm、東西235cmを測る。平面形状は方形ないし長方形を呈するものと思われる。

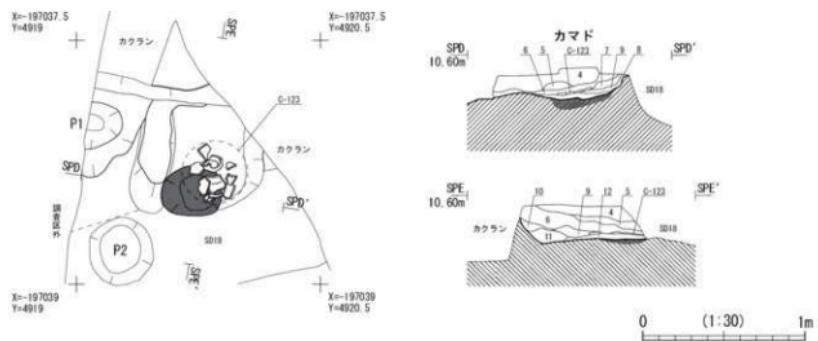
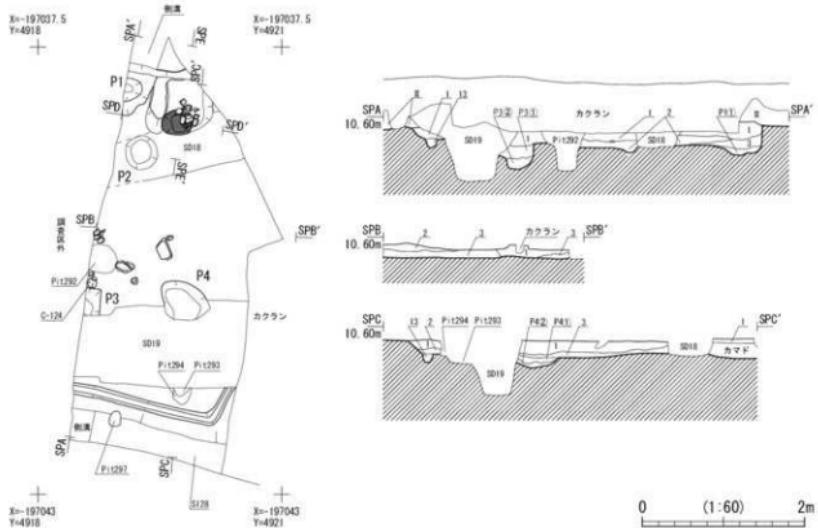
[方向] カマド標準でN-5°Eである。

[堆積土] 13層に分層された。1~3層は住居堆積土で、すべての層に黄褐色土ブロック・炭化物粒・マンガン粒を含む。4~12層はカマド関連層位、13層は周溝内堆積土である。

[壁面] 南壁は直線的に大きく外傾して立ち上がり、北壁は直立気味に立ち上がる。残存する壁高は、調査区壁面で最大12cmを測る。

[床面] 概ね平坦である。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

[柱穴] 4基検出された。柱痕跡が認められたものは無い。カマドに近接して位置するP1およびP2はカマドに関連する可能性が考えられる。



SI27 墓積土註記表

部位	層位	土色	土性	備考
住居構築	1	10YR3/3	暗褐色	シルト 10YR5-6 黄褐色土ブロック・炭化物粒・マンガン鉄を含む。
	2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト 10YR5-6 黄褐色土ブロック・炭化物粒・マンガン鉄を含む。
	3	10YR3/3	10YR5-7 黄褐色	シルト 10YR5-6 黄褐色土ブロックを多量、炭化物粒・マンガン鉄を含む。
カマド	4	10YR3/2	黒褐色	シルト 10YR5-4 黄褐色土を斑状に、焼土粒を含む。
	5	10YR3/1	黒褐色	シルト
	6	10YR2/3	黒褐色	シルト 10YR5-4 黄褐色土を斑状に、炭化物粒を含む。
	7	10YR5/4	10YR5-7 黄褐色	シルト 焼土ブロックを含む。
	8	5YR3/2	暗赤褐色	シルト 焼土多量含む。
	9	7.5YR2/2	黒褐色	シルト 炭化物粒・焼土を含む。
	10	7.5YR2/2	黒褐色	シルト 10YR5-4 黄褐色土ブロックを含む。
	11	10YR5/4	10YR5-7 黄褐色	シルト 7.5YR2/2 黑褐色土ブロックを多量、炭化物粒・焼土ブロックを含む。
周溝	12	5YR3/4	暗赤褐色	-
	13	10YR3/2	黒褐色	シルト 焼土を多量含む。

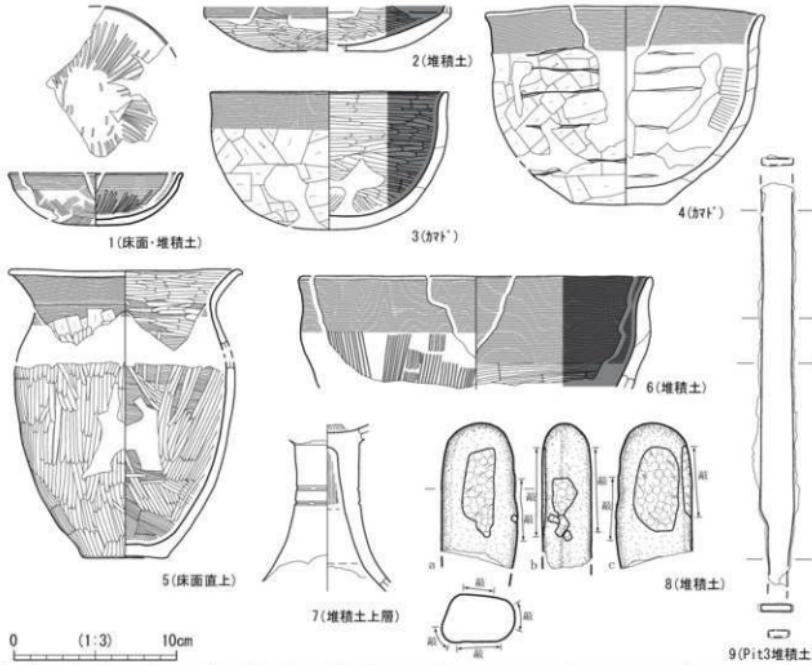
第107図 SI27 壁穴住居跡

SI27 施設堆積土目録表

部位	層位	土色	土性	備考
P1	①	10YR5/3	紅褐色・黃褐色	シルト 10YR3-1黒褐色土を含む。
P2	-	-	-	新雨園なし。
P3	1	10YR3-1	黒褐色	シルト 10YR4-1褐灰色土を斑状に、炭化物粒・燒土粒を含む。
	2	10YR5/4	紅褐色・黃褐色	シルト 10YR3-1黒褐色土を含む。 炭化物を含む。
P4	1	10YR3-1	黒褐色	シルト

SI27 施設觀測表

遺構名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備考	遺構名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備考
P1	円形	55×32	13		P3	方形	(31)×(18)	24	
P2	円形	40×39	11		P4	扇円形	(56)×(46)	15	



国版登録番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法量(cm)	外側調整	内面調整	備考	写真回数	
1	C-120	IIK	SI27	床面	土器部	环	口縁～底	(10.8)	-	3.2 [1縁:3.2cm] [1縁:3.2cm]	[1縁:3.2cm]、底～中付 →1縁:底、斜板:3.2cm	30	
2	C-122	IIK	SI27	堆積土	土器部	环	口縁～底	-	-	[2.8] (2.8) [2.8] (2.8) [2.8] (2.8) [2.8] (2.8)	内雨黑色處理	50	
3	C-121	IIK	SI27	壁	土器部	环	口縁～底	14.8	-	8.5 [1縁:3.2cm]、底～中付	[1縁:3.2cm]、内雨黑色處理	50	
4	C-123	IIK	SI27	壁	土器部	环	口縁～底	(17.1)	6.0 [5.0] (5.0) [5.0] (5.0)	12.2 [1縁:3.2cm]、体～底、中付	[1縁:3.2cm]、内雨黑色處理	50	
5	C-124	IIK	SI27	床面直上	土器部	变	口縁～底	(13.9)	5.2 [2.1] (2.1) [2.1] (2.1)	6.0 [1縁:3.2cm]、底～中付 →2縁:2.1cm [2.1] (2.1) [2.1] (2.1)	[1縁:3.2cm] →[1縁:2.1cm]、 剥～底、内付→[2.1cm]	内雨黑色處理用材、 地上覆瓦	50
6	C-125	IIK	SI27	堆積土	土器部	环	口縁～底	(21.6)	-	6.9 [1縁:3.2cm]、底～中付	[1縁:3.2cm]、剥～底	内雨黑色處理、淋水	50
7	E-031	IIK	SI27	海綿土上直上	泥炭土	环	-	-	[6.0] (6.0) [6.0] (6.0)	上半～3.2cm、下半:3.2cm調整		50	

国版登録番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	法量(cm)	重量(g)		備考	写真回数		
								長	幅	厚			
8	Kc-012	IIK	SI27	堆積土	礫石部	礫石	(8.5)	4.7	2.9	(90.32)	黄鞍山岩質 礫石	矢張品、點b直上箇所、b直上箇所、b直上箇所(程度:弱)	50

国版登録番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	法量(cm)	重量(g)	特徴・備考	写真回数		
9	N-007	IIK	SI27	PtG2堆積土	金属性製品	直刀	(24.8)	2.2	0.4	(62.2)		50

第108図 SI27 積土住居跡出土遺物

[周溝]検出された範囲においては南壁沿いに周る。検出された範囲の規模は、幅約15cm、深さ約10cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。

[カマド]北壁に付設され、東側袖部および燃焼部と煙道部の一部が後世の遺構や搅乱により失われている。袖部西側の規模は、長さ約80cm、幅20cm前後を測り、壁面に直交して直線的に延びる。残存する燃焼部の規模は、幅60cm、奥行き70cm、奥壁高約30cmを測る。底面は皿状に窪み、奥壁は内湾して緩やかに立ち上がる。また、底面南側からは南北100×東西120cmを測る被熱の痕跡が認められた。

[出土遺物]土師器壺2点・鉢3点(鉢?1点を含む)・壺1点、須恵器高环、敲石、鉄製品を各1点掲載した(第108図)。土師器壺2点(1・2)のうち、前者は床面と堆積土から出土した破片が接合したもので、器形は平底状の丸底で体部は緩やかに内湾し、口縁部が短く外反する器形を呈する。内面は口縁部から体部にヨコナデ、底部にはヘラナデが施された後、幅1mm程の工具で緻密な放射状のヘラミガキが施される。色調は外面が橙色ないし明黄褐色、内面は橙色を呈し、胎土には径1mm以下の小礫を少量含む。器厚は3~4mmを測る。後者は堆積土中から出土したもので、平底状の丸底で直線的に大きく外傾する体部から強く屈曲して直立する口縁部へといたる器形を呈し、体部の器厚は底部に比べて倍程に厚い。ヨコナデが施される外面口縁部を除いて全面にヘラミガキが施され、内面は黒色処理される。

3・4は、いずれもカマドから出土した土師器鉢である。前者は丸底で緩やかに内湾する体部の上端に最大径を持ち、直立する口縁部の上端が短く外反する器形を呈する。内面はヘラミガキ後に黒色処理される。これに対し、後者は平底で緩やかに内湾する体部から、短く外反する口縁部上端に最大径を持つ。内面はヘラナデが施されるのみで、また内外面共に明瞭な輪積痕と被熱の痕跡が観察される。5は内外面共に広範囲におよぶヘラミガキを最終調整とする土師器壺である。図上復元したものであるが、口縁部に最大径を持つものと推定される。6は推定される口径と外面胴部のハケメ調整、器厚等から鉢?としたが、壺の可能性もある。内面の黒色処理や器形の特徴は、3に類似するものがある。

7は柱状の脚部外面中位に幅2~3mmの沈線が2条施される須恵器高环の脚部である。

8は下半部を欠損する敲石で、a~c面に敲打痕が認められる。とりわけb面は凹凸が顕著で、またa~c面には敲打痕の範囲内に条線状の擦痕が認められる。石材は石英安山岩質凝灰岩である。9は残存する部分の断面形がいずれも長方形を呈するものである。

SI28 積穴住居跡(第109・110図)

[位置・確認]Ⅱ区北半部南端、F-3グリッドに位置する。調査区壁面および搅乱の間から、わずかに残存するブランクが検出された。西側は調査区外にかかる。

[重複]SI27に切られる。南側および東側は搅乱により失われている。

[規模・形態]検出された範囲の規模は、南北80cm、東西180cmを測る。平面形状は不明である。

[方向]基準とする対象物が残存していないため、不明である。

[堆積土]2層に分層された。いずれも住居堆積土である。

[床面]残存する部分については、平坦である。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

[柱穴]1基検出された。柱痕跡は認められない。規模や床面内での位置など、不明な点が多い。

[出土遺物]土師器鉢・壺を各1点掲載した(第110図)。1は平底で体部は直線的に外傾し、口縁部は外面がわずかに屈曲して外傾する器形の土師器鉢である。内面は黒色処理されており、一次整形として口縁部にヨコナデ、体部から底部にヘラケズリ状の強いヘラナデが施された後、口縁部から体部上半にかけて幅の狭い工具による粗いヘラミガキが限定的に施される。器厚は法量に比べて厚く、外面体部上端には粘土粗接合痕にも似た凝集の亀裂が等間隔にみられる。2は外面の口縁部と体部の境界に段を持ち、胴部下位がやや張る単孔の土師器壺である。

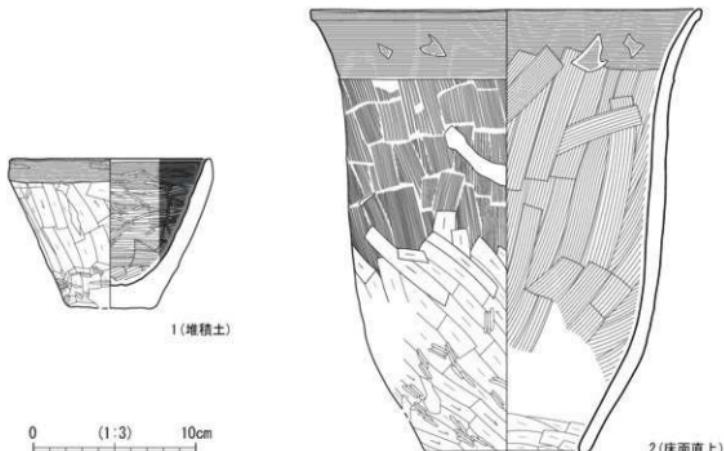
X=197041.5
Y=4918
+ SPA
X=197041.5
Y=4920.5
+ SPA
Pit 249
SI27
PI
G-126
カクラン
+ SPA
X=197043
Y=4918
+ SPA
X=197043
Y=4920.5
+ SPA

SI28 施設細部調査
遺物名 平面形 規模(cm) 深さ(cm) 参考
PI 円形 177×72 11

SI28 施設堆積土記表
部位 層位 土色 土性 参考
住居堆積土 1 10YR3/3 灰褐色 シルト 黄化物質・マンガン鉱を含む。
2 10YR4/2 灰黃褐色 黑土質シルト 10YR5-6黄褐色十ブロックを多量、灰化物・マンガン鉱を含む。

SI28 施設堆積土記表
部位 層位 土色 土性 参考
PI 1 - - - 黄化物・灰を多量含む。
2 - - - 泥混合。

第109図 SI28竪穴住居跡



回数	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法面(km)	外面調整	内面調整	備考	写真
1	C254	IIK	SI28	堆積土	土器部	鉢	口縁～底	(12.5) (5.2)	9.2 [口縁-底]→[5.2]→[9.2]→[底下]	[口縁-底]→[5.2]→[9.2]→[底下]	内面黒色処理	50
2	C126	IIK	SI28	床面上	土器部	瓶	口縁～底	24.0	9.6 [口縁-底]→[9.6]→[24.0]	[口縁-底]→[9.6]→[24.0]	単孔	50

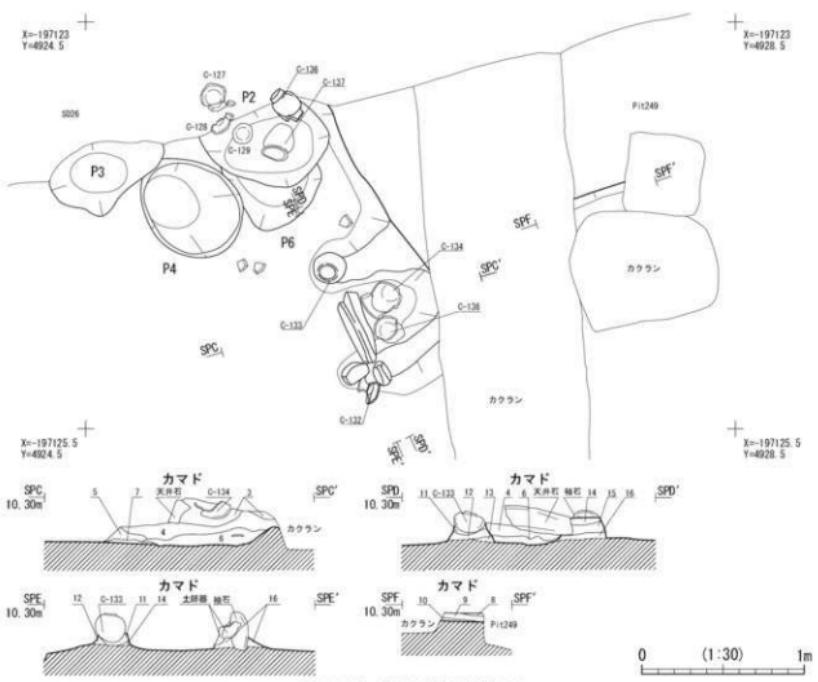
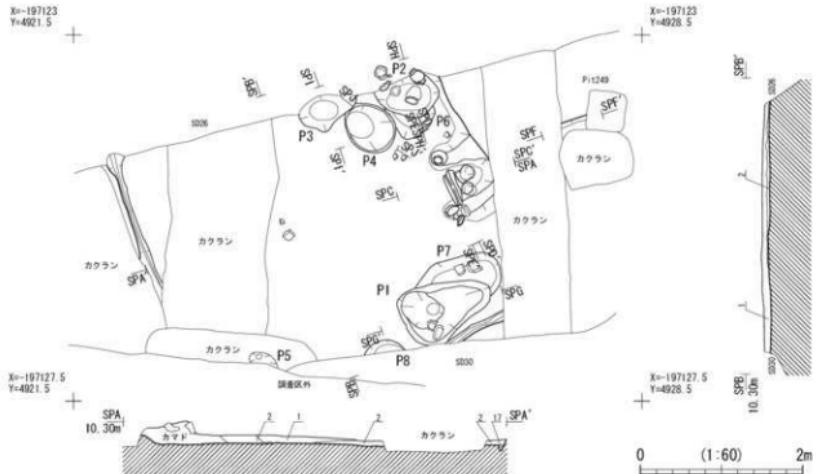
第110図 SI28竪穴住居跡出土遺物

SI29 竪穴住居跡(第111~114図)

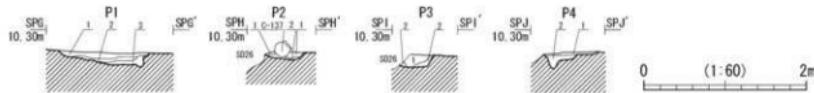
[位置・確認] IV区中央部南側、G-H-8グリッドに位置する。南西コーナーは調査区外にかかる。

[重複] SD 26・30、Pit 249に切られる。袖部南側の一部および突出部を含む煙道部の大部分は重複と搅乱により失われている。

[規模・形態] 検出された範囲の規模は、南北326cm、東西433cmを測る。平面形状は方形ないし隅丸方形を呈する



第111図 SI29竪穴住居跡(1)



SI29 埋設物記表

部位	層位	土色	土性	備考
住居堆積土 カマド	1	10YR5/6 暗褐色	粘土質シルト	斑状にマンガン鉱・酸化鉄を含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物類・斑状に酸化鉄を含む。
	3	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物類・マンガン鉱を含む。
	4	10YR3/2 黒褐色	シルト	燒土粒・マンガン鉱を含む。
	5	10YR4/2 灰褐色	シルト	10YR6/4に近い・黄褐色土を多量含む。
	6	10YR3/1 暗褐色	シルト	燒土粒を含む。
	7	10YR2/1 黒色	—	炭化物多量・燒土粒を含む。
	8	10YR5/4 10YR5/6 暗褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルトブロックを含む。
	9	10YR3/1 暗褐色	シルト	10YR5/4に近い・黄褐色土ブロック・炭化物を含む。
	10	10YR5/4 10YR5/6 暗褐色	シルト	炭化物類・斑状に酸化鉄を含む。
	11	5YR3/2 暗褐色	—	炭化物・焼土粒を含む。
カマド袖	12	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物類・燒土ブロックを含む。
	13	10YR4/3 10YR4/6 暗褐色	粘土質シルト	炭化物類・焼土粒・マンガン鉱を含む。
	14	10YR4/3 10YR4/6 暗褐色	粘土質シルト	10YR5/6 黄褐色土粒・マンガン鉱を含む。
	15	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物類・燒土ブロックを含む。
	16	10YR2/2 暗褐色	粘土質シルト	炭化物類・燒土ブロックを含む。
	17	—	—	記記なし。

SI29 施設埋填土記表

部位	層位	土色	土性	備考
P1	1	10YR4/3 10YR4/6 暗褐色	粘土質シルト	炭化物類・焼土粒を含む。
	2	10YR4/2 灰褐色	粘土質シルト	炭化物類・焼土粒・マンガン鉱を含む。
	3	10YR5/3 10YR5/6 暗褐色	粘土質シルト	炭化物類・焼土ブロック・マンガン鉱を含む。
P2	1	10YR4/3 10YR5/6 暗褐色	粘土質シルト	炭化物類・焼土粒・マンガン鉱を含む。
	2	10YR5/6 暗褐色	シルト	燒土粒を含む。
P3	1	10YR4/3 10YR5/6 暗褐色	粘土質シルト	炭化物・燒土粒・マンガン鉱を含む。
	2	10YR5/6 暗褐色	粘土質シルト	燒土粒・マンガン鉱を含む。
P4	1	—	—	記記なし。
P5	—	—	—	記記なし。
P6	—	—	—	新面無なし。
P7	—	—	—	新面無なし。

SI29 施設觀察表

追跡名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備考	追跡名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備考
P1	長袖内円形	111×69	26		P5	円形	25×(2)	29	
P2	圓丸方形	(68)×(56)	9		P6	圓丸方形	51×(40)	10	
P3	不規形	72×(42)	16		P7	長袖内円形	(101)×(54)	9	
P4	橢円形	64×(56)	27		P8	円形	47×(14)	3	

第112図 SI29豎穴住居跡(2)

ものと推測される。

【方向】カマド基準でN-70°-Eである。

【堆積土】17層に分層された。1・2層は住居堆積土、3～11層はカマド関連層位、12～16層はカマド袖部構築土、17層は周溝内堆積土である。

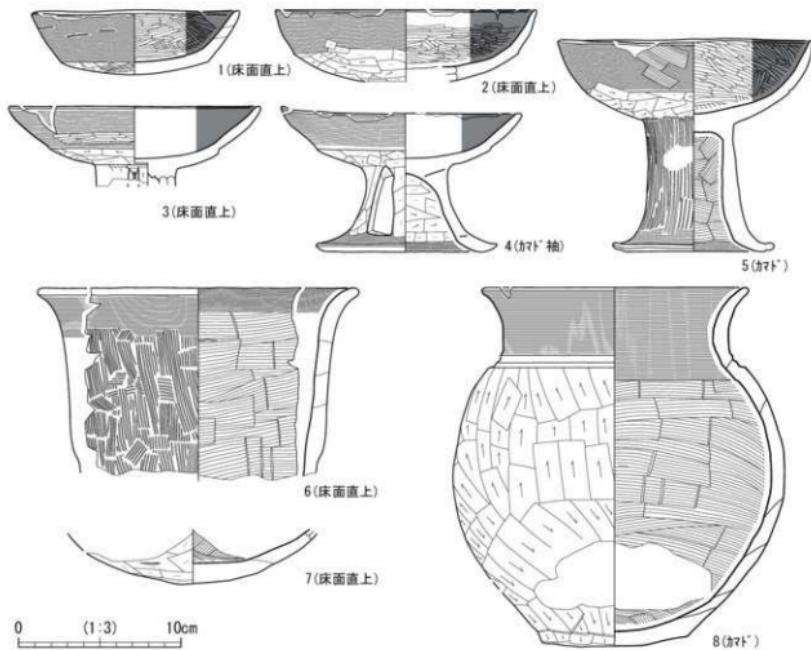
【壁面】検出された部分の壁面は、わずかに外反して立ち上がる。残存する壁高は、最大6cmを測る。

【床面】概ね平坦である。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

【柱穴】7基検出された。いずれも柱痕跡は認められない。位置や規模からみてP1・P4・P5が主柱穴に相当する可能性があるものの、P1堆積土は炭化物や焼土を多く含むことから、カマドに関連する可能性も否めない。このP1と同様にP2・P6・P7はカマドに近接して位置するもので、カマドに関連する施設の可能性が考えられる。

【周溝】検出された範囲においては、東壁を除く壁面に沿って全周する。規模は、幅15cm前後、深さ10cm前後を測り、断面形状は逆台形を呈する。

【カマド】本豎穴住居跡のカマドは東壁に付設される。煙道部は部分的に残存するものの、そのほかについては比較

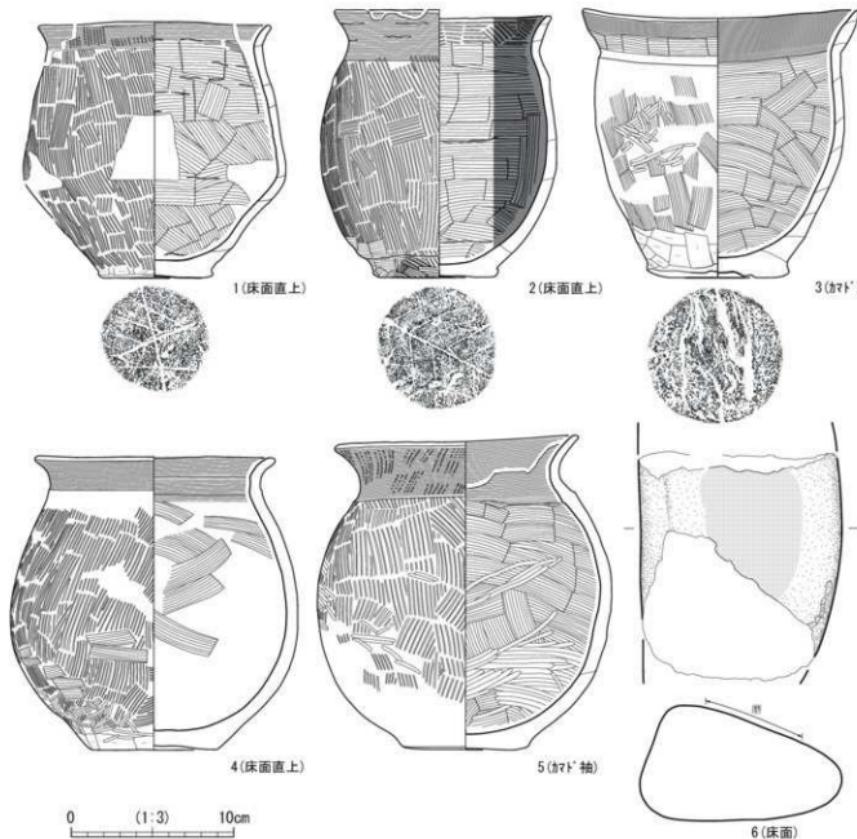


図版番号	登録番号	調査区	出土地	部位	種別	器種	部位	法長 [cm]	外削調整	内削調整	備考	写真図版		
1	C-129	W区	SI29	床面上	土加器	环	口縁～底（確定形）	0.29	-	4.0	口縁:3.27mm、底:1.45mm、側:1.45mm	内面黒色処理	51	
2	C-128	W区	SI29	床面上	土加器	环	口縁～底	0.62	-	0.4	口縁:3.07mm、底:1.45mm、側:1.45mm	内面黒色処理	51	
3	C-127	W区	SI29	床面上	土加器	高环	口縁～脚上端	15.6	-	4.9	口縁:3.27mm、側:1.45mm、底:1.45mm	口:不明、脚上端:1.45mm	内面環状黒色處理	51
4	C-132	W区	SI29	がく' 抽	土加器	高环	口縁～脚	14.7	脚深10.0	8.9	口縁:3.27mm、底:1.45mm、側:1.45mm	口縁～脚:1.45mm、脚:1.45mm、側:1.45mm	内面環状黒色處理	51
5	C-131	W区	SI29	がく'	土加器	高环	口縁～脚	15.8	脚深10.0	13.1	口縁:3.27mm、側:1.45mm、底:1.45mm	口縁:1.45mm、脚:1.45mm、側:1.45mm	内面環状黒色處理 (一部未焼成)、外削(底周辺に削痕あり)の確認	51
6	C-129	W区	SI29	床面上	土加器	変	口縁～底	0.98	-	0.18	口縁:3.27mm、脚:1.45mm	口縁:3.27mm、脚:1.45mm	内面黒色処理	51
7	C-130	W区	SI29	床面上	土加器	変	底	-	-	0.4	0.17mm	内面黒色処理	51	
8	C-134	W区	SI29	がく'	土加器	変	口縁～底	0.66	9.0	22.1	口縁:3.27mm、脚:1.45mm、底:1.45mm	外削削下下端付着	51	

第113図 SI29堅穴住居跡出土遺物(1)

的良好的な残存状況で検出された。

袖部の規模は、北側が長さ約60cm、幅30cm前後、南側は残存する部分で長さ約65cm、幅25～40cm前後を測り、平面形状は「ハ」字形に延びる。燃焼部の規模は、幅30～40cm、奥行き65cm、奥壁高20cm程度を測る。底面は平坦で、奥壁は内済気味に緩やかに立ち上がる。煙道部は部分的に残存するのみであるが、残存する部分の位置関係から、少なくとも長さは130～150cm程度と考えられ、残存する部分の深さは10cm前後を測る。



図版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部灰	法蓋 (cm)			外縁調整	内縁調整	備考	写真 版
								口径	底径	厚さ				
1	C-135	NIK	S229	床面上	土器	甕	口縁～底	(14.4)	6.8	15.6	口縁: ハラフリ、 側面: ハラフリ、 腹: ハラフリ、 底: ハラフリ	口縁: ハラフリ、 側面: ハラフリ、 腹: ハラフリ		51
2	C-136	NIK	S229	床面上	土器	甕	口縁～底	13.2	7.2	16.4	口縁: ハラフリ、 側面: ハラフリ、 腹: ハラフリ	口縁: ハラフリ、 側面: ハラフリ、 腹: ハラフリ	内面黑色處理	51
3	C-138	NIK	S229	片	土器	甕	口縁～底 (略定形)	17.0	8.8	16.6	口縁: ハラフリ、 側面: ハラフリ、 底: ハラフリ	口縁: ハラフリ、 側面: ハラフリ、 底: ハラフリ		51
4	C-137	NIK	S229	床面上	土器	甕	口縁～底 (略定形)	14.9	7.8	18.1	口縁: ハラフリ、 側面: ハラフリ、 底: ハラフリ	口縁: ハラフリ、 側面: ハラフリ、 底: ハラフリ	外面上半段化粧付材、 内面磨光	52
5	C-133	NIK	S229	片	土器	甕	口縁～底 (略定形)	15.0	7.8	19.4	口縁: ハラフリ、 側面: ハラフリ、 底: ハラフリ	口縁: ハラフリ、 側面: ハラフリ、 底: ハラフリ	外面部底部下半磨耗、 底材材に板用	52
図版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	法蓋 (cm)			重さ (g)	石材	備考	写真 版	
							長さ	幅	厚さ					
6	Ke-013	NIK	S229	床面	磚石器	台石	(3.5)	12.4	7.1	(1879.10)	石英安山岩	欠損部、凹凸(平)	52	

第114図 SI29 穴状住居跡出土遺物(2)

また、両袖部の末端付近には芯材として土師器甕および自然縞が使用されている状況が認められた。

南側袖部では直立した梢円形状の自然縞が構築土で覆われ、その上部に梢円形状のやや扁平な自然縞が積まれた状態で、北側袖部では土師器甕(第114図-5)が倒置された状態で検出された。これら芯材の上面はほぼ同じ標高値を示すことから、両袖部は同じ高さになるように調整されたものと考えられる。

なお、南側袖部の上面からは、芯材に近接して被熱の痕跡が著しい土師器高坏(第113図-4)が出土している。カマドに関連する可能性が高いものの、判然としない。

燃焼部においては、燃焼部西側底面の10～15cm直上、両袖芯材の間から、長さ45cm、幅・厚さ10cm、重量2,700g程の被熱が著しい板状縞(石英安山岩質凝灰岩)が検出された。この板状縞は、その特徴や出土位置、直下の土層堆積状況からみて、崩落した天井石と考えられる。

また、燃焼部中央に相当する板状縞の北側からは、南北に並び口縁部を西側に向けた斜位の状態で土師器甕2点(北側:第113図-8、南側:第114図-3)が、また北側の土師器甕直下からは、被熱の痕跡が認められる略完形の土師器高坏(第113図-5)が脚部を上にした倒位の状態で出土した。このような燃焼部内における土師器の出土状況から、土師器高坏は支脚として転用されたものと考えられる。なお、南側の土師器甕直下からは、支脚もしくは支脚と考えられるものが認められなかった。

このような袖部や燃焼部における遺物出土状況から、本竪穴住居跡のカマドは使用時の状態を留めたまま廃絶したものと考えられる。また、崩落した天井石や燃焼部から出土した土師器甕の出土状況からは、カマドの崩壊は何らかの作用が東側から働いた事によるものと想定される。

【出土遺物】土師器甕2点・高坏3点・甕8点、台石1点を掲載した(第112～114図)。上記したカマドに由来するもののほかにも、床面直上を中心多くの遺物が出土した。とりわけカマドに関連する第113図-5・8、第114図-3・5、Pit 2が位置する床面直上からまとめて出土した第113図-1～3、第114図-2・4については、それぞれ一括りの高いものと考えられることに加え、これら2地点から出土した土器は、器形や整形技法等の特徴からみて、層位こそ異なるものの、同時期或いは極めて近接する時期の所産と考えられる。

土師器甕および高坏(第113図-1～5)は、いずれも口縁部から体部が内湾し、両部位の外面境界に段もしくは明瞭な稜を持つ器形を呈するもので、また、海綿骨針や径1mm前後の小縞や石英を多量に含む胎土や内外面の整形技法についても共通するものがある。高坏はいずれも坏部と脚部が直角に近い角度で強く屈曲し、脚部は直線的な柱状のもの(3・5)と裾部に向かって外反するもの(4)、透かしを持たないもの(5)、三方に持つもの(3・4)が認められる。裾部はいずれもラッパ状に強く外反する。

土師器甕(第113図-6～8、第114図-1～5)は、外面の口縁部と胴部の境界には段を持つもの(第113図-8、第114図-3～5)と、段を持たずに口縁部が短く外反するもの(第113図-6・第114図-1・2)に大別される。また、底部形状については丸底(第113図-7・8)と、上げ底の平底(第114図-1～5)が認められる。最大径の位置については、口縁部に持つもの(第113図-6、第114図-3)と胴部中位或いはやや下位に持つもの(第113図-8、第114図-1・2・4・5)に大別される。

第114図-1～3はほぼ同一の器高でありながらも器形や整形技法の特徴が各々異なり、とりわけ胴部が「く」字状に強く屈曲する第114図-1については、今次調査で出土した多くの土師器甕の中でも異質である。この3点とは対照的に、第114図-4・5は法量や内外面調整がほぼ共通するものである。

第114図-6は、断面三角形の柱状縞を素材とした台石で、片面中央の平坦面に磨痕が残されている。石材は石英安山岩である。

SI30 壁穴住居跡(第9・115図)

[位置・確認] VII区中央部西側、D-11グリッドに位置する。西側のごく一部のみが検出された。

[重複] 残存する部分においては他遺構との重複関係は認められないものの、全体の殆どが搅乱により失われている。

なお、東側は当該調査区での古代面の調査に先行して実施した下層調査の調査区西側境界に接する。

[規模・形態] 残存する部分の規模は、南北75cm、東西184cmを測る。平面形状は不明である。

[方向] わずかに残存する西壁基準でN-10°Eである。

[堆積土] 3層に分層された。1・2層は住居内堆積土、3層は周溝堆積土である。なお、VII区では古代面の調査に先行して実施した下層調査時に稲作の有無の検討を目的として土壤サンプルを採取しており(第9図)、その後の古代面の調査時に本竪穴住居跡が検出され、土壤サンプル採取時に4層とした層が本竪穴住居跡1層、同じく5層とした層が本竪穴住居跡堆積土2層であることが確認された。

[壁面] 残存する部分においては直線的に大きく外傾して立ち上がる。残存する壁高は10cm前後を測る。

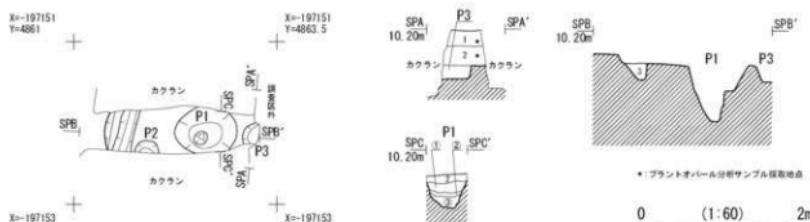
[床面] 概ね平坦である。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

[柱穴] 3基検出された。深さ69cmを測るP1には柱痕跡が認められたものの、主柱穴に相当するか否かについては検出範囲が局所的であるため判然としない。

[周溝] 残存する部分においては、西壁に沿って10cm程内側を周る。規模は幅・深さ共に20cm程を測り、断面形状は逆台形を呈する。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

[その他] 上記したように、VII区では古代面の調査に先行して下層調査を実施しており、その際に稲作の有無を検討するため土壤サンプルを採取している。その中には、土壤サンプル採取時に4層とした本竪穴住居跡堆積土1層(以下、「1層」と記載)、および採取時に5層とした本竪穴住居跡堆積土2層(以下、「2層」と記載)が含まれている。こ



SI30 壁穴住居跡

部位	層位	土色	土性	参考
住居堆積土	1 10YR3-1	黒褐色	シルト	10YR4-3に5-6%黄褐色土・灰化物を含む。
	2 10YR2-3	黒褐色	シルト	10YR5-3に5-6%黄褐色砂質シルト・灰化物を含む。
周溝	3 10YR2-3	黒褐色	シルト	10YR4-2%黄褐色土ブロックを含む。

SI30 施設堆積土記表

部位	層位	土色	土性	参考
P1	① 10YR3-1	黒褐色	シルト	10YR5-4に5-6%黄褐色土ブロックを含む。
	② 10YR4-1	褐色	シルト	なし
	③ 10YR3-2	黒褐色	シルト	10YR5-4に5-6%黄褐色土ブロックを多量含む。
P2	1 10YR2-3	黒褐色	シルト	なし
P3	-	-	-	記述なし

SI30 施設剖面表

遺構名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	参考	遺構名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	参考
P1	円形	75×66	69		P2	円形	627×499	18	
P2	椭丸方形	27×65	14						

第115図 SI30 壁穴住居跡

れら1層および2層を含むプラント・オバール分析の結果、1層から採取した土壤サンプルからイネのプラント・オバールが⁶6,800個/gという高い数値で検出され、稲作の行われていた層である可能性が高いという見解が示されている(第6章第2節参照)。第9図に示してあるように、プラント・オバール分析にあたっては、3箇所の壁面から土壤サンプルを採取している。これはⅦ区を含む各調査区全域に擾乱の影響が大きく、上層から下層まで良好な残存状況を呈する壁面が少ない事に起因するものである。

1層は土壤サンプルが採取されたSPD-D'にのみ堆積する層で、且つSPD-D'の最上位にあたり、また下位には2層が堆積する。この1層の南北両側および上面は擾乱により大きく失われているものの、周辺の土層堆積状況からみて、1層の上位にはサンプル採取時に2層とした基本層序第Ⅲ層(以下、「Ⅲ層」と記載)が、またその上位にはサンプル採取時に1層とした、中世以降の耕作土に相当する基本層序第Ⅱ層(以下、「Ⅱ層」と記載)が、それぞれ堆積していたものと考えられる。このⅡ層およびⅢ層から採取した土壤サンプルからは2,900個/gと比較的高い数値のイネのプラント・オバールが検出されており、1層と同様に稲作の可能性が指摘されているものの、1層の下位に堆積する2層から採取した土壤サンプルからは、イネのプラント・オバールが検出されていない。また、Ⅶ区を含む今次調査では、古代から中世の時間幅に収まる畦畔や耕作跡と考えられる小溝状遺構等は検出されておらず、また本竪穴住居跡の周辺を含むⅧ区は擾乱の影響が著しく、本竪穴住居跡においても残存するのはごくわずかである。

以上の調査時の所見と分析結果を併せると、1層が稲作に由来する可能性は低く、何らかの外的要因でイネのプラント・オバールが1層中にもたらされたものと想定される。あくまでも可能性に留まるものであるが、例えば1層が堆積する過程における流水作用、1層堆積後に局所的に形成されたクラック、或いは偶発的因素の強い人的作用などが挙げられる。とはいっても根拠に乏しく推測の域を出るものではない。

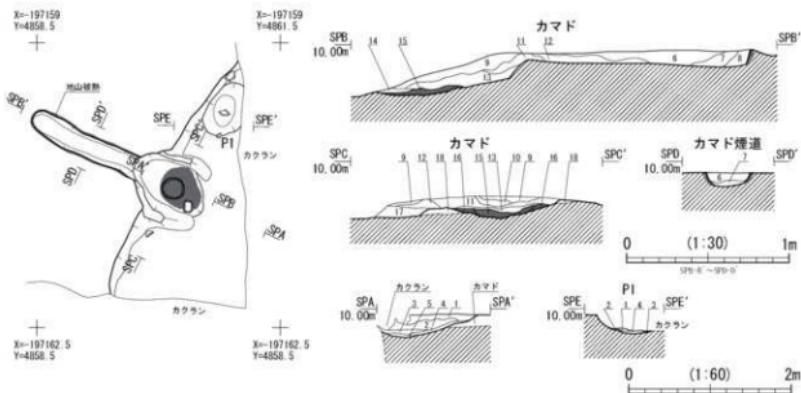
SI31 竪穴住居跡(第116・117図)

[位置・確認]Ⅷ区南側、D-11グリッドに位置する。カマドと西壁周辺の一部のみが検出された。

[重複]SD41を切る。南東側大部分は擾乱により失われており、残存状況は悪い。

[規模・形態]残存する部分の規模は、南北328cm、東西172cmを測る。平面形状は隅丸方形ないし長方形と思われる。

[方向]カマド煙道部基準でN-64°-Wである。



第116図 SI31竪穴住居跡

[堆積土]18層に分層された。1～5層は黒褐色シルトを主体とした住居堆積土である。6～17層はカマド関連層位、18層はカマド袖構築土である。

[壁面]残存する部分の壁面は、概ね内湾して立ち上がる。残存する壁高は、13～30cmを測る。

[床面]概ね平坦である。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

[柱穴]1基検出された。柱痕跡は認められず、規模や位置関係からカマドに関連する施設の可能性が考えられる。

S131 堆積土記表

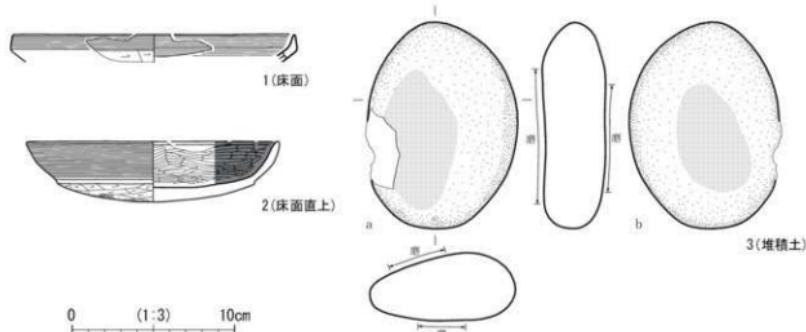
部位	層位	土色	土性	備考
住居堆積土	1	10YR3-3	暗褐色	シルト 斑状に10YR5-4に似る黄褐色土ブロックを含む。
	2	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YR5-4に似る黄褐色土ブロックを含む。
	3	10YR2-2	黒褐色	壁下部に炭化物変質層あり。
	4	10YR3-2	黒褐色	炭化物・焼土粒を含む。
	5	10YR4-2	灰黃褐色	シルト
カマド	6	2.5Y4-2	暗褐色	炭化物・焼土を含む。
	7	5Y3-1	オーラー・黒色	シルト 2.5Y4-2層に黄色土を含む。
	8	2.5Y4-2	暗褐色	シルト 5Y3-1層・暗褐色土ブロックを多量含む。
	9	10YR3-3	黒褐色	炭化物・焼土ブロックを含む。
	10	10YR5-3	1.5Y4-2 黄褐色	焼土板を微量含む。
	11	5YR2-2	黒褐色	焼土ブロックを含む。
	12	10YR3-3	暗褐色	シルト 斑状に焼土板を含む。
	13	10YR2-1	黒褐色	シルト 炭化物層・焼土板を含む。
	14	7.5YR3-3	暗褐色	シルト 炭化物層・焼土板を含む。
	15	5YR4-6	赤褐色	— 燒土層。
カマド脚	16	5YR3-2	暗赤褐色	シルト 燒土層。
	17	10YR4-2	灰黃褐色	シルト 10YR5-3に似る黄褐色土ブロックを含む。
	18	10YR4-2	灰黃褐色	シルト

S131 施設堆積土記表

部位	層位	土色	土性	備考
P1	1	10YR3-2	黒褐色	シルト
	2	10YR1-7-1	黒色	—
	3	10YR5-3	1.5Y4-2 黄褐色	シルト
	4	10YR3-2	黒褐色	—

S131 海沿駕籠表

造形名	平面形	規格(cm)	深さ(cm)	備考
P1	圓筒形	71×(66)	7	



図版番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法面(cm)	外側調整	内側調整	備考	写真箇所
1	C-141	港区	SD3	床面	土被基	環	口縁～底	17.41	～	(0.7)	11層・33cm、底～39cm	33cm 内面黒色漆仕上げ
2	C-140	港区	SD3	床面直上	土被基	環	口縁～底	15.7	～	3.7	11層・33cm、底～39cm	39cm 内面黒色塗装

図版番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法面(cm)	重さ(g)	石材	備考	写真箇所
3	Kc-014	M1K	SD3	堆積土	礫石基	砾石	12.7	0.41	4.5	698.43	安山岩 欠損品、船形、磨2面(平)、鉄熱丸	52

第117図 S131 積立住居跡出土遺物

[カマド]西壁に位置し、東コーナーから150cm程北側に付設される。袖部の規模は、北袖が長さ約70cm、幅15cm前後、南袖が長さ約65cm、幅20~30cmを測り、馬蹄形に延びる。燃焼部の規模は、幅30~50cm、奥行き約90cm、奥壁高約10cmを測る。底面は皿状に窪み、奥壁は緩やかに外反して立ち上がる。煙道部の規模は、長さ140cm、幅30cm前後、深さ5~10cmを測る。底面は煙出し部に向かって緩やかに下る。煙出し部に落ち込み等は認められない。また、煙道部および煙出し部の壁面には、厚さ2~4cmの被熱による変色が認められる。

[出土遺物]土器師器2点、螺旋石1点を掲載した(第117図)。いわゆる鬼高系の特徴を有する1は、胎土に径0.5mm程の小礫や石英、赤色粒子を少量含む。いわゆる在地系の特徴を有する2は、海綿骨針や径3mm程の小礫や石英を多量に含む。3は扁平な楕円形を素材とした磨石でa·b面に使用痕が認められる。石材は安山岩である。

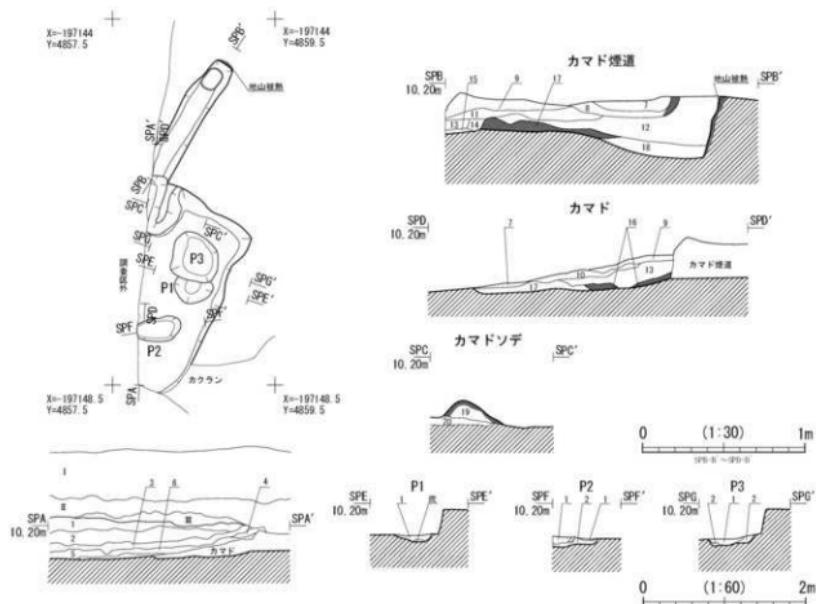
SI32 壁穴住居跡(第118-119図)

[位置・確認]Ⅷ区北半部西側、C-10・11グリッドに位置する。東側約1/2が検出された。西側は調査区外にかかる。[重複]SD33~35を切る。南東部の一部分は擾乱の影響を受けている。

[規模・形態]検出された範囲の規模は、南北240cm、東西143cmを測る。平面形状はやや不整な方形ないし隅丸方形を呈するものと推測される。

[方向]カマド煙道部基準でN-32°Eである。

[堆積土]20層に分層された。1~6層はいずれも黒褐色シルトを主体とする住居堆積土である。7~18層はカマド関連層位で、7~9・11層は煙道部天井崩落土で、8層には被熱の痕跡が認められる。19・20層はカマド袖部構築土



第118図 SI32壁穴住居跡

である。

[壁面] 検出された範囲の壁面は直線的にわずかに外傾して立ち上がる。残存する壁高は、30cm前後を測る。

[床面] 概ね平坦である。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

SI32 堆積土註記表

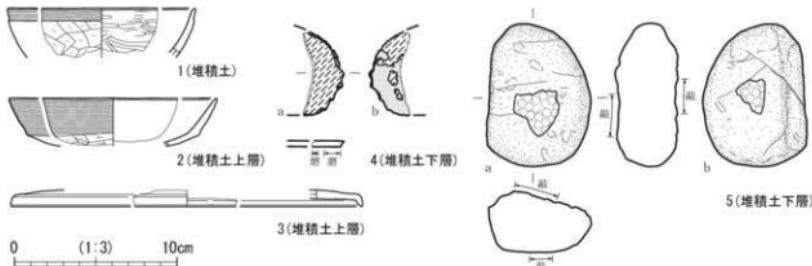
部位	層位	土色	土性	備考
住居堆積土	1	2.5Y3/1	黒褐色	シルト 塊状に10YR4/1層灰褐色土を含む。
	2	10YR2/2	黒褐色	シルト 塊状に10YR4/1層灰褐色土を含む。
	3	10YR2/3	黒褐色	シルト 炭化物粒・鐵土粒を含む。
	4	10YR2/3	黒褐色	シルト 炭化物粒・鐵土粒を含む。
	5	10YR3/1	黒褐色	シルト 炭化物粒・鐵土粒を含む。
	6	10YR3/1	黒褐色	シルト 10YR5/4L5/5 黒褐色土ブロック・炭化物粒・鐵土粒を含む。
カマド	7	10YR4/2	灰黒褐色	シルト 炭化物粒・鐵土粒を含む。(天井崩落土)
	8	2.5Y3/2	黒褐色	シルト 塊状に炭化物粒・鐵土粒を含む。壁面・屋根面に被熱面あり。(天井崩落土)
	9	2.5Y3/2	黒褐色	シルト 塊状に炭化物粒・鐵土粒を含む。(天井崩落土)
	10	7.5YR3/3	黒褐色	シルト 炭化物粒・鐵土粒を含む。
	11	10YR4/2	灰黒褐色	シルト 10YR5/4L5/5 黒褐色土ブロック・炭化物粒・鐵土粒を含む。(天井崩落土)
	12	-	-	記記なし。(天井崩落土)
	13	10YR3/1	黒褐色	シルト 塊状に炭化物粒・鐵土粒を含む。
	14	10YR4/2	灰黒褐色	シルト 炭化物粒・鐵土粒を含む。
	15	5YR2/2	暗赤褐色	シルト 鐵土粒・10YR4/1層灰褐色土ブロック・炭化物粒を含む。
	16	10YR3/2	黒褐色	シルト 10YR4/1層灰褐色土ブロック・少量の鐵土粒を含む。
カマド附	17	7.5YR3/1	黒褐色	シルト 塊状に炭化物粒・鐵土粒を含む。
	18	7.5YR3/1	黒褐色	シルト 炭化物粒・鐵土粒を多量含む。
	19	10YR3/2	黒褐色	シルト 炭化物粒・鐵土粒を少量含む。表面は被熱により赤化。(5YR2/3)赤褐色
	20	2.5Y4/2	暗灰褐色	シルト 10YR3/2 黑褐色ブロックを含む。

SI32 施設堆積土註記表

部位	層位	土色	土性	備考
P1	1	10YR2/3	黒褐色	シルト 炭化物・鐵土ブロックを含む。
	2	10YR2/3	黒褐色	シルト 炭化物・鐵土ブロックを含む。
P2	1	2.5Y3/1	黒褐色	シルト 2.5Y5/4 黑褐色土ブロック・炭化物粒・鐵土粒を含む。
	2	10YR2/3	黒褐色	シルト 炭化物・鐵土ブロックを含む。
P3	1	2.5Y3/1	黒褐色	シルト 塊状に炭化物粒・鐵土粒を含む。
	2	2.5Y3/1	黒褐色	シルト 塊状に炭化物粒・鐵土粒を含む。

SI32 施設觀察表

遺構名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備考	遺構名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備考
P1	圓丸方形	42×42	9	/	P3	圓丸方形	38×37	14	/
P2	長椭円形	632×29	12	/					



図版番号	登録番号	調査区	出土場	層位	種別	器種	部位	法量(cm)			外因調査	内因調査	備考	写真図版
								横幅	奥行	厚さ				
1	C-142	須区	SI32	堆積土	土細器	环	口縁~体	(11.6)	-(1.0)	11.6×32.9×-(1.0)cm	外因無	内外面被熱	32	
2	C-143	須区	SI32	堆積土上層	土細器	环	口縁~体	(12.8)	-(2.9)	11.6×32.9×-(2.9)cm	不明	内面黑色処理?	32	
3	E-032	須区	SI32	堆積土上層	土細器	环	天井	(21.8)	-(1.1)	20.7×49.4×-(1.1)cm	内因調査	内外面1部被熱	32	

図版番号	登録番号	調査区	出土場	層位	種別	器種	部位	法量(cm)			重さ(g)	石材	備考	写真図版
								横幅	奥行	厚さ				
4	Kd-018	須区	SI32	堆積土下層	石製品	二次加工のあら鍬件	-(6.1)	(1.9)	0.4	22.65	石英電石岩質 凝灰岩	板状素材、1辺に二次加工あり	32	
5	Ke-015	須区	SI32	堆積土下層	砾石器	砾石	-(8.7)	6.5	4.3	290.20	石英電石岩質 凝灰岩	不規則牌、底面1箇所、上面1箇所(程度)	32	

第119図 SI32 積穴住居跡出土遺物

[柱穴]3基検出された。いずれも柱痕跡は認められず、柱穴であるか否かは不明である。

[カマド]北壁に付設される。西袖および燃焼部の殆どが調査区外に延びる。東袖の規模は、長さ約65cm、幅25～35cmを測り、上面は被熱により厚さ2cm程の変色が認められる。燃焼部は調査区壁面のみで確認され、奥行き120cmを測る。底面は住居床面より5cm程窪む皿状を呈し、底面は奥壁に向かって緩やかに上る。煙道部の規模は、長さ約160cm、幅30～35cm、深さ35～50cmを測る。底面は南半部が概ね平坦で、北半部は煙出し部底面に向かって下る。煙出し部はピット状に窪み、壁面には厚さ2～3cm程の被熱による変色が認められる。

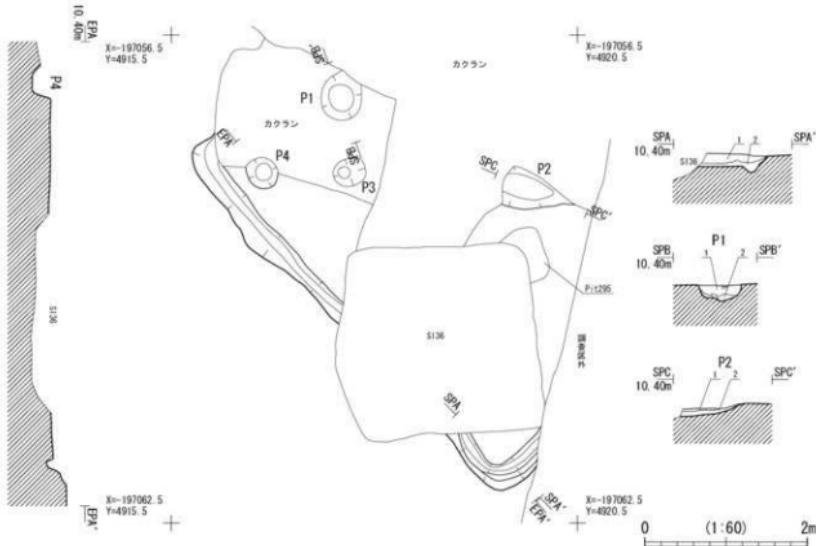
[出土遺物]土師器壺2点、須恵器蓋、礫石器、石製品を各1点掲載した(第119図)。1・2は共に胎土に海綿骨針および径1mm程の小礫や石英を多量に含む土師器壺で、器形は前者がいわゆる北武藏型、後者はいわゆる在地系の特徴を有するものである。3は口縁部が短く直立する須恵器蓋である。4は板状の節理によって薄く割れた礫片を素材としたもので、a・b面縁辺に急角度の二次加工痕、b面に磨痕が認められる。5は不整な円錐を素材とした敲石で、a・b面共に強い敲打痕が認められる。石材は、4・5共に石英安山岩質凝灰岩である。

SI33 壁穴住居跡(第120・121図)

[位置・確認]II区南半部北側、F-4グリッドに位置する。西側1/3程が検出された。東側は調査区外に延びる。調査時は南西コーナー部をSI34としていたものの、整理段階において、規模や位置関係等から同一の住居跡であると考えられたため、SI34を欠番とした。

[重複]SI35、SD47を切り、SI36、Pit295に切られる。

[規模・形態]検出された範囲の規模は、南北580cm、東西340cmを測る。平面形状は方形ないし隅丸方形を呈する



第120図 SI33壁穴住居跡

ものと推測される。

[方向]西壁基準でN-42°-Wである。

[堆積上]2層に分層された。いずれも住居堆積土である。

[壁面]検出された部分の壁面は内湾して立ち上がる。残存する壁高は、3~13cmを測る。

[床面]概ね平坦である。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

[柱穴]4基検出された。いずれも柱痕跡は認められず、柱穴であるか否かは不明である。

[周溝]検出した範囲においては、壁面に沿って全周する。規模は、幅15~35cm、深さは概ね8cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。

S133 堆積土記表

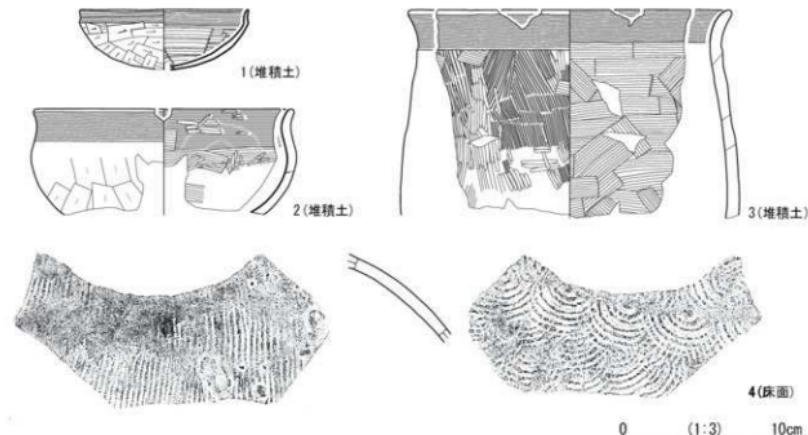
部位	層位	土色	土性	備考
住居堆積土	1	10YR2-3	黒褐色	シルト 炭化物粒・焼土粒・マンガン鉱を含む。
	2	10YR3-3	褐褐色	10YR5-3に於く黄褐色シルトブロックを參蓄、炭化物粒を含む。

S133 施設堆積土記表

部位	層位	土色	土性	備考
P1	1	5YR4-3	に於く赤褐色	10YR5-6 黄褐色シルトブロック・幾粒を含む。
	2	10YR5-6	黄褐色	シルト 炭化物粒を含む。
P2	1	10YR4-4	褐色	シルト 炭化物粒を含む。
	2	10YR2-3	黒褐色	シルト 10YR5-6 黄褐色シルトブロックおよびマンガン鉱を含む。
P3	-	-	-	断面状なし。
P4	-	-	-	断面状なし。

S133 施設輪廓表

遺構名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備考	遺構名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備考
P1	規則形	(50)×50	0.7		P3	楕円形	39×32	22	
P2	不整形	(90)×(50)	15		P4	楕円形	39×33	23	



回数	登録番号	調査区	出土場	層位	柱頭	柱脚	柱核	器底	法量(cm)			外側調整	内面調整	備考	写真 図版
									口徑	底径	高さ				
1	C144	BIE	SE33	堆積土	环	环	口縫一底	(10.5)	-	(0.7)	11縫-32#縫、底-底-32#縫	11縫-32#縫、底-底-32#縫		32	
2	C145	BIE	SE33	堆積土	土縫	縫	口縫一底	(16.2)	-	(6.5)	11縫-32#縫、底-底-32#縫	11縫-32#縫、底-底-32#縫		32	
3	C146	BIE	SE33	堆積土	土縫	底	口縫一底	(20.0)	-	(12.8)	11縫-32#縫、底-底-32#縫	11縫-32#縫、底-底-32#縫		32	
4	E034	BIE	SE33	床面	頭底芯	芯	底	-	-	(6.5)	熱子付芯	青海波文-32#縫	外側自然軸付芯	32	

第121図 S133竪穴住居跡出土遺物

【出土遺物】土師器壺・鉢・甕、須恵器甕を各1点掲載した(第121図)。土師器はいずれも堆積土から出土したもので、1は器形・整形技法共に、いわゆる北武藏型の特徴を有するものである。底部から体部は半球形で口縁部は短く「S」字状に直立する。色調は内外面共に浅黄橙色ないし黄橙色を呈し、胎土には径1mm程の小穂や石英のほか、雲母片とみられる鉱物片や海綿骨針を少量含む。3は口縁部が短く外反する土師器甕で、最大径は胴部中位に持つものと推定される。4は撫で肩の須恵器甕肩部である。

SI35 壁穴住居跡(第122図)

【位置・確認】II区南半部北側、F-4グリッドに位置する。南コーナー周辺のみが検出された。西側は調査区外にかかる。

【重複】SI33、SD47、SK13に切られる。北側および東側は搅乱により失われており、残存状況は悪い。

【規模・形態】検出された範囲の規模は、南北288cm、東西288cmを測る。平面形状は方形ないし長方形を基調とするものと推測される。

【方向】西壁基準でN-63°-Eである。

【堆積土】2層に分層された。いずれも住居堆積土である。

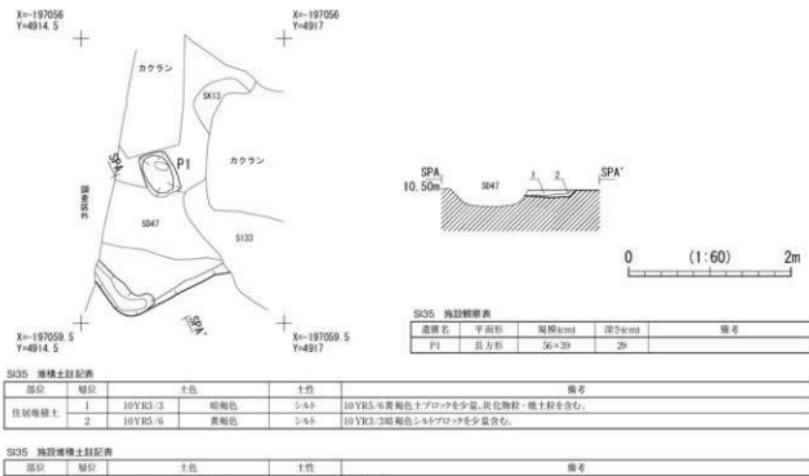
【壁面】検出された範囲の壁面は直線的に外傾して立ち上がる。残存する壁高は3~8cmを測る。

【床面】概ね平坦である。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

【柱穴】I基検出された。規模や位置から主柱穴に相当する可能性があるものの、柱痕跡は認められず、判然としない。

【周溝】検出された範囲においては、西壁に沿って周り南西コーナーで収束する。規模は、幅25cm前後、深さは6~16cmを測る。

【出土遺物】堆積土中から土師器片が少量出土しているが、掲載した遺物は無い。

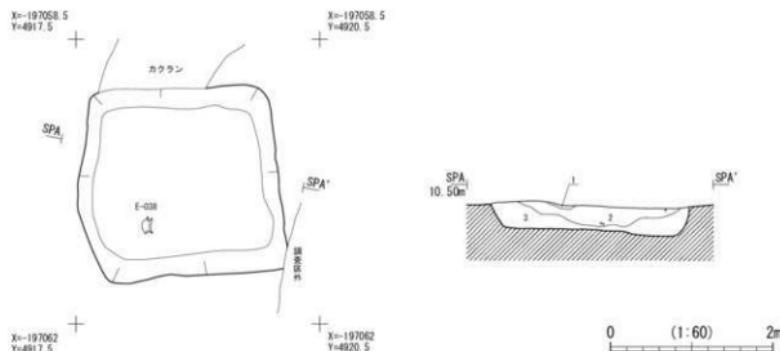


第122図 SI35 壁穴住居跡

SI36 壓穴遺構(第123・124図)

[位置・確認] II区南半部北側、F-4グリッドに位置する。南東コーナーは一部調査区外にかかる。本遺構にはカマドや柱穴、周溝が伴わないことから「壓穴遺構」として記載するが、遺構の略号と番号は調査時に付したものそのまま使用した。

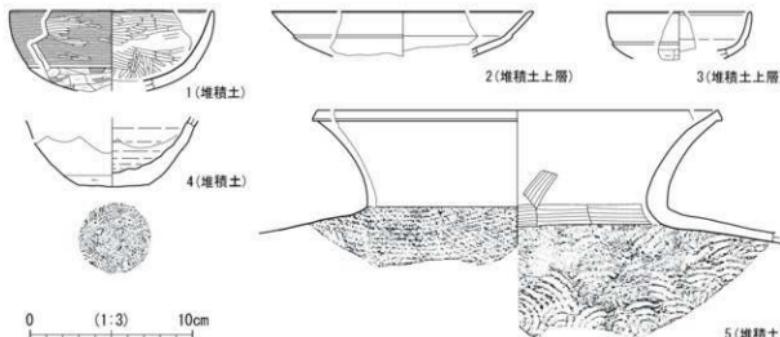
[重複] SI33、Pit 295を切る。北壁の西半部は搅乱の影響を受けている。



SI36 堆積土記録表

部位	層位	土色	土性	備考
堆積土	1	7.5YR3/1	黒褐色	シルト 地土ブロック多量、炭化物・マンガン鉱を含む。
	2	10YR3/3	暗褐色	シルト 10YR5/6 黄褐色土ブロック・炭化物・マンガン鉱を含む。
	3	10YR3/4	暗褐色	シルト 10YR5/6 黄褐色土ブロック・10YR5/2 黄褐色シルト・炭化物鉱・地土鉱・マンガン鉱を含む。

第123図 SI36 壓穴遺構



回取番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	形状	部位	法長(cm)	外面調整	内面調整	備考	写真図版
1	C-147	IIK	SD36	堆積土	土師器	环	口縁一底	(2.6)	-	(4.9) ↑縁→内縁 →内縁→外縁 ↓縁→外縁	内縁	53
2	E-035	IIK	SD36	堆積土上層	須恵器	環	口縁一底	(16.2)	-	(2.8) OPU調整	OPU調整	53
3	E-036	IIK	SD36	堆積土上層	須恵器	环	口縁一底	(5.8)	-	(2.9) OPU調整→内縁→外縁	OPU調整	53
4	E-037	IIK	SD36	堆積土	須恵器	直	底	-	4.4 OPU調整	OPU調整	外側側面下部内縁 内面底部内縁付着	53
5	E-038	IIK	SD36	堆積土	須恵器	直	口縁一底	(5.8)	-	(8.2) ↑縁→底、OPU調整 ↓縁→外縁 平行付合→OPU調整	内面底部内縁付着 内面底部青海波文	53

第124図 SI36 壓穴遺構出土遺物

[規模・形態]検出された範囲の規模は、南北244cm、東西250cmを測り、平面形状はいびつな隅丸方形を呈する。

[方向]東壁基準でN 6° -Wである。

[堆積上]3層に分層された。1層は、焼土ブロックを多量に含む。

[壁面]直線的に外傾する立ち上がりを基調とするが、東側は内湾する。残存する壁高は、20～30cmを測る。

[底面]概ね平坦である。

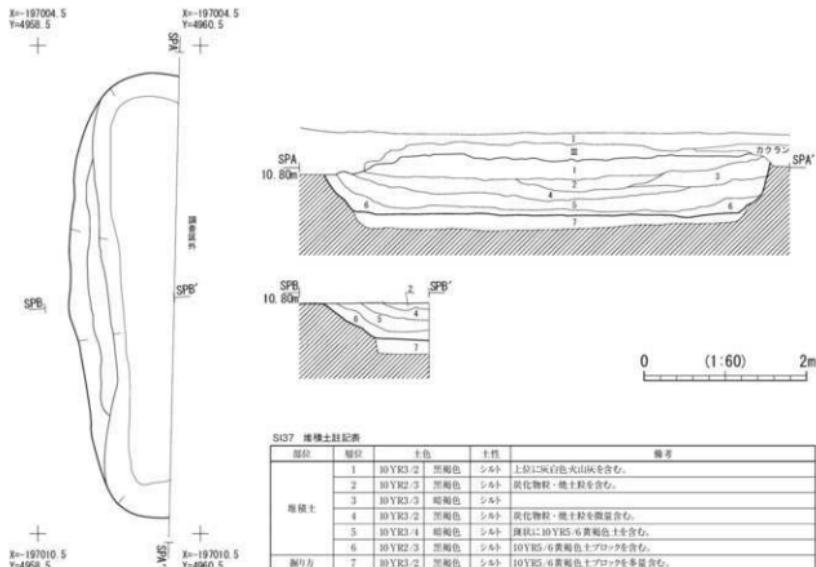
[出土遺物]土師器壺、須恵器皿・环・壺・甕を各1点掲載した(第124図)。いずれも堆積土からの出土であるが、須恵器の出土が多いのが特徴である。土師器壺(1)は内外面共に底部から口縁部まで内湾し、外面の口縁部と体部の境界に段を持つ器形を呈する。須恵器皿および环(2・3)はいずれも丸底で、外面の口縁部と体部の境界に段を持つ器形を呈する。須恵器壺とした4は、外面底部に回転ヘラケズリの痕跡がわずかに認められる。5は口縁部に頸を持ち肩が張る大型の須恵器甕である。

SI37 堪穴遺構(第125・126図)

[位置・確認]第3次として実施したI区北拡張区北側、H-0グリッドに位置する。西壁際のみが検出された。東側の大半は調査区外にかかる。本遺構は掘り方を伴うものの、カマドや柱穴、周溝が伴わないことから「堪穴遺構」として記載するが、遺構の略号と番号は調査時に付したものをそのまま使用した。

[重複]JS139を切る。

[規模・形態]検出された範囲の規模は、南北546cm、東西128cmを測る。平面形状は、いびつな隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと推測される。



第125図 SI37 堪穴遺構

[方向]西壁基準でN-6°-Wである。

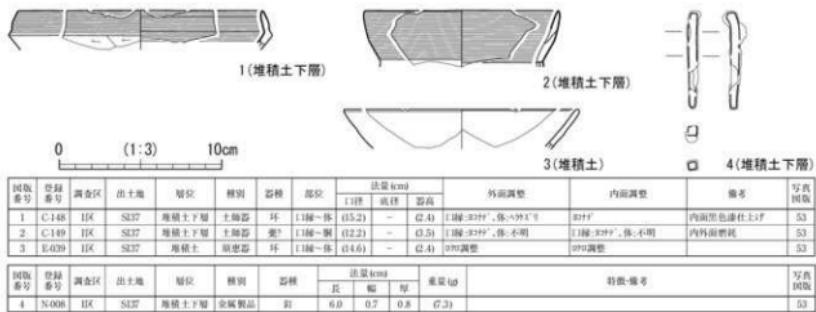
[堆積土]7層に分層された。1～6層はいずれも黒褐色シルトを主体とし、1層の上位には、10世紀第1四半期の降灰とされる、十和田a火山灰(To-a)と目される灰白色火山灰を含む。7層は掘り方堆積土である。

[壁面]検出された範囲については南および北壁は内湾し、西壁は直線的に大きく外傾して立ち上がる。残存する壁高は、最大65cm前後を測る。

[底面]6層下面を底面とする。南側にやや起伏がみられるものの、概ね平坦である。

[掘り方]検出された部分については、概ね平坦である。

[出土遺物]土師器壺・甕?・須恵器壺、鉄製品を各1点掲載した(第126図)。土師器壺(1)は、いわゆる鬼高系の特徴を有するもので、口縁部と体部の境界が屈曲して口縁部が短く内傾する器形を呈し、内面は黒色漆仕上げされる。色調は明赤褐色を呈し、胎土には海綿骨針のはか、径0.5mm程度の小窪や石英を少量含む。土師器甕?とした2は口縁部破片資料で、器形等については判然としない。3は須恵器壺の上半部破片で、概ね直線的に外傾する器形を呈する。4は、尖端部を欠損する釘である。断面形状は方形を呈する。



第126図 SI37 竪穴遺構出土遺物

S138 竪穴住居跡(第127～129図)

[位置・確認]第3次調査として実施したI区北拡張区北端部、H-0・1グリッドに位置する。全体の約3/4が検出された。北東部は調査区外にかかる。

[重複]SI39を切る。

[規模・形態]検出された範囲の規模は、南北452cm、東西428cmを測る。平面形状はいびつな隅丸方形を呈する。

[方向]東壁基準で真北である。

[堆積土]5層に分層された。1層は住居堆積土で、明黄褐色土ブロックを含む。2層は周溝内堆積土、3～5層は掘り方堆積土である。

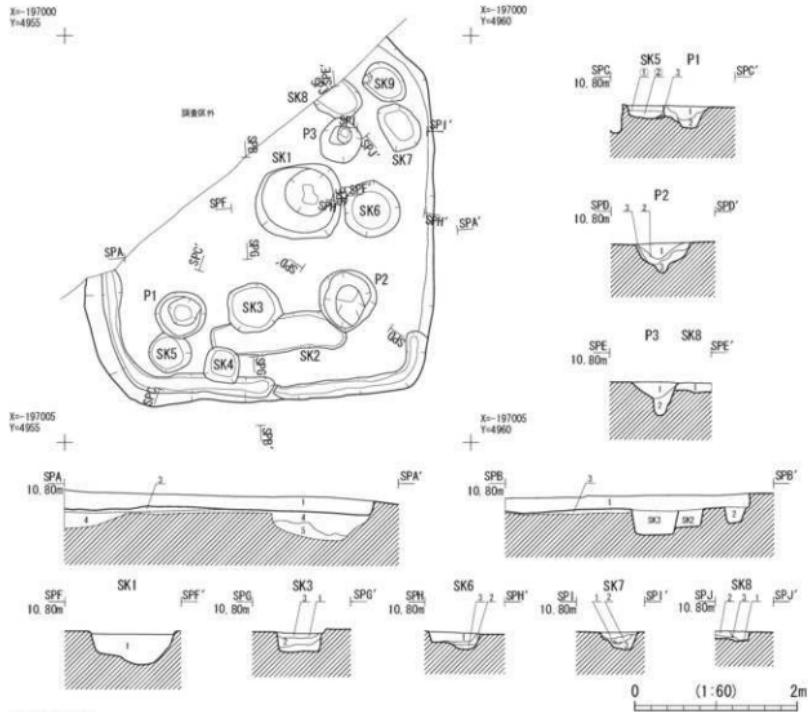
[壁面]検出された範囲の壁面は、直立気味に立ち上がる。残存する壁高は、13～25cm前後を測る。

[床面]1層下面を床面とし、わずかな起伏が認められる。

[柱穴]3基検出された。いずれも柱痕跡が認められ、規模や位置関係から主柱穴に相当すると考えられる。柱間寸法は、P1・2、P2・3共に約200cmを測る。

[周溝]検出された範囲においては、東壁を除き全周する。南壁の中央でわずかに途切れ、東側は壁面直下、西側は壁面よりやや内側を周る。規模は、幅25cm前後、深さ7cm前後を測る。

[掘り方]中央部が台形状に高まり、その周囲が約20～30cm掘り込まれる。



SI38 埋蔵土記表				備考
部位	層位	土色	土性	
住居堆積土	1	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YR6-6明黃褐色土ブロックを含む。
	2	-	-	記述なし。
廻溝	3	10YR3-2	黒褐色	10YR6-6明黃褐色土ブロックを多量含む。
掘り方	4	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YR5-6青褐色土ブロックを含む。
	5	10YR5-6	青褐色	シルト 10YR3-2黒褐色土ブロックを含む。

SI38 海設堆積土記表(1)				備考
部位	層位	土色	土性	
SK1	1	2.5YR3-2	暗赤褐色	シルト 10YR5-6黄褐色土ブロックを多量含む。堆積土中よりコハク片の出土地あり。
	-	-	-	記述なし。
SK2	1	2.5YR3-2	暗赤褐色	シルト 10YR6-6明黄褐色土ブロックを多量含む。
	2	10YR3-2	暗褐色	炭化物粒・鐵・灰土を含む。
SK3	1	2.5YR3-2	暗赤褐色	シルト 炭化物粒・鐵・灰土を含む。
	2	10YR3-2	暗褐色	シルト 炭化物粒・鐵・灰土を含む。
	3	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YR5-6黄褐色土ブロックを多量、炭化物・鐵土を含む。
SK4	-	-	-	記述なし。
SK5	1	10YR3-3	暗褐色	シルト 炭化物・鐵土の塊・土ブロックを含む。
	2	10YR3-3	暗褐色	シルト 10YR4-2灰褐色土ブロックを多量、鐵土ブロックを含む。
SK6	1	10YR3-3	暗褐色	シルト 炭化物・鐵・土ブロックを含む。
	2	10YR4-2	灰褐色	シルト 記述: 10YR5-6青褐色土を含む。
	3	10YR4-2	灰褐色	シルト 10YR5-6青褐色土ブロックを多量含む。
SK7	1	2.5YR3-2	暗赤褐色	炭化物粒・灰土を含む。
	2	10YR3-2	黒褐色	シルト 炭化物粒・多量の鐵土ブロックを含む。
	3	2.5YR3-2	暗赤褐色	シルト 10YR5-6青褐色土ブロックを多量、炭化物粒を微量含む。
SK8	1	2.5YR3-2	暗赤褐色	シルト 鐵土を多量含む。
	2	10YR4-2	灰褐色	シルト 鐵土ブロックを含む。
	3	10YR4-2	灰褐色	シルト 10YR5-6青褐色土ブロックを多量含む。
SK9	-	-	-	記述なし。

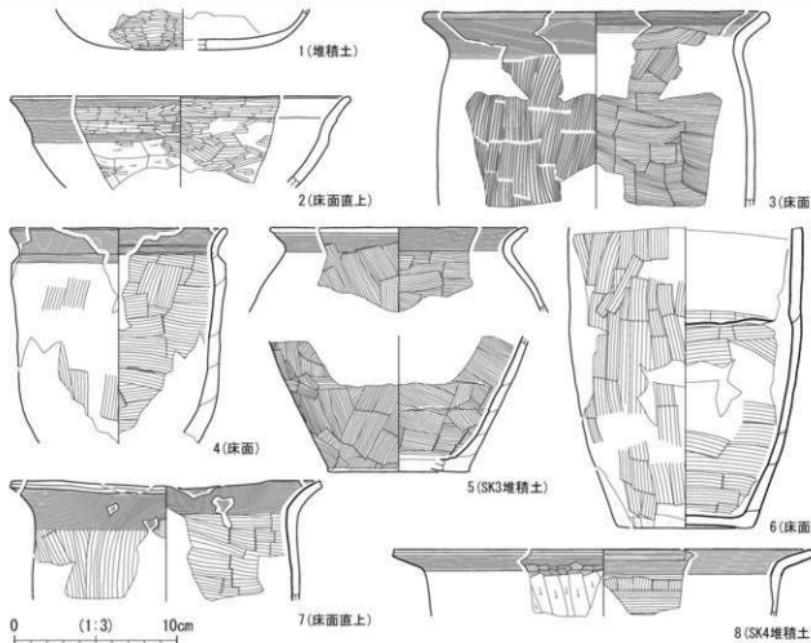
第127図 SI38豊穴住居跡

SI38 施設堆積土計画表(2)

部位	層位	土色	土性	備考
P1	1	10YR4/2	灰黃褐色	シルト 炭化物粒を含む。
	2	10YR4/2	灰黃褐色	シルト 既に10YR5-6黄褐色土を含む。
	3	10YR4/2	灰黃褐色	シルト 10YR5-6黄褐色土ブロックを多量含む。
P2	1	10YR3/2	黒褐色	シルト 下層に炭化物塊層あり。
	2	10YR3/2	黒褐色	シルト 既に10YR5-6黄褐色土を含む。
	3	10YR3/2	黒褐色	シルト 10YR5-6黄褐色土ブロックを多量含む。
P3	1	2.5Y3/3	暗オーラブ褐色	シルト 炭化物粒を含む。
	2	2.5Y3/3	暗オーラブ褐色	シルト 10YR6-4に5-6黄褐色土ブロックを多量、炭化物粒を含む。

SI38 施設觀察表

遺構名	平面形	規模cm	深さcm	備考	遺構名	平面形	規模cm	深さcm	備考
SK1	圓丸方形	102×94	52		SK7	圓丸方形	60×42	23	
SK2	長方形	166×45	12		SK8	圓丸方形	48×42	13	
SK3	圓丸方形	65×59	47		SK9	圓丸形	57×42	14	
SK4	圓丸形	43×42	14		P1	円形	61×56	31	
SK5	円形	50×49	17		P2	円形	70×69	35	
SK6	円形	67×66	18		P3	円形	51×48	32	



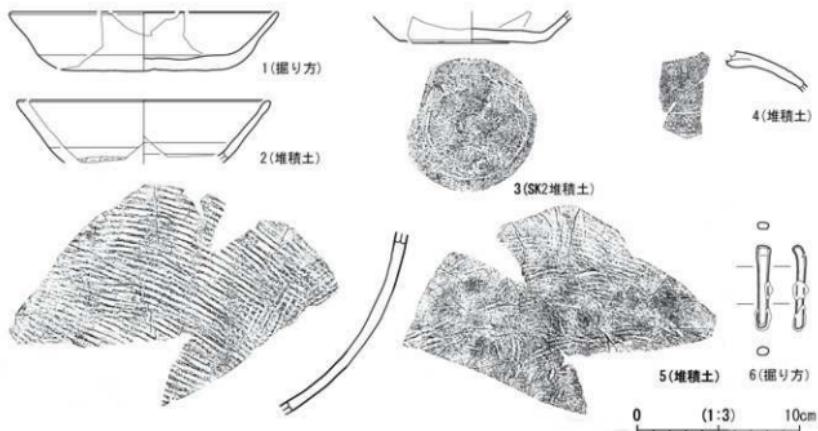
調査 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法面(cm)	外側調整	内面調整	備考	写真 図版	
1	C-150	IHK	SI38	堆積土	土細器	环	体～底	-	(2.4) →(1.8)	小環	内面削平	53
2	C-153	IHK	SI38	床面直上	土細器	环	口縁～体	(21.0)	(5.6) →(4.9) →(3.9) →(3.0) →(2.5)	口縁～底	内面削平	53
3	C-154	IHK	SI38	床面	土細器	环	口縁～底	(21.4)	(12.0) →(3.7) →(3.0)	口縁～底	内面削平	53
4	C-151	IHK	SI38	床面	土細器	环	口縁～底	(13.4)	(13.2) →(3.7) →(3.0)	口縁～底	内面削平	53
5	C-152	IHK	SK3堆積土	土細器	环	口縁～底	(16.0)	(5.2) →(3.9) →(3.0) →(2.5)	口縁～底	内面削平	53	
6	C-156	IHK	SI38	床面	土細器	环	口縁～底	-	(8.3) →(7.0) →(6.5) →(5.5)	口縁～底	内面削平	53
7	C-157	IHK	SI38	床面直上	土細器	环	口縁～底	(19.2)	(7.4) →(3.7) →(3.0)	口縁～底	内面削平	53
8	C-153	IHK	SI4堆積土	土細器	环	口縁～底	(25.6)	(4.1) →(3.7) →(3.0)	口縁～底	内面削平	53	

第128図 SI38堅穴住居跡出土遺物(1)

[その他の施設] 8基の土坑が検出された。SK 7～9は、近接して北東コーナーに位置に、いずれも上端径50～60cm、深さ10～20cm程を測り、また堆積土中に多量の炭化物・焼土を含むものである。このような位置関係と上層堆積状況等から、本竪穴住居跡からはカマドが検出されていないものの、SK 7～9はカマドに関連する施設である可能性が想定され、また調査区外の北側にはカマドが存在する可能性が推測される。

[出土遺物] 土師器壺・鉢各1点・甕6点・須恵器壺3点・壺・甕・鉄製品を各1点掲載した(第128・129図)。土師器甕と須恵器の出土が多いのが特徴である。土師器壺(第128図-1)は平底状の丸底で、外面は全体にヘラミガキが施される。土師器鉢(同図-2)は、内湾する体部と外反する口縁部の外面側境界に段を持ち、内外面共にヘラミガキを最終整形とする。土師器甕(同図-3～8)は、最大径を口縁部に持つもの(3・5・7・8)と胴部上端に持つもの(4)が認められる。前者のうち、3は口縁部上端がわずかに内湾し、7・8は口唇部中央に窪みを持つなど、口縁部に特徴を有するものが多い。また、1点のみ胴部に最大径を持つ4は、胴部は寸胴気味で外面の口縁部と胴部の境界に明瞭な稜を持ち、口縁部が短く外反する異質な器形を呈するものである。内面頸部には沈線とも整形痕ともみられる2条の平行する条痕が認められる。同図-6の寸胴な胴部は、4に類似するものがある。

須恵器壺(第129図-1～3)は体部がほぼ直線的に外傾するもので、底部が残存する1・3については、いずれも平底である。同図-4は須恵器壺の肩部破片で、外面には横位の平行沈線および沈線間に施された櫛状工具による刺突が認められる。また、4・5は、本竪穴住居跡に切られるSI 39堆積土出土破片と接合関係が認められた。同図-6は、掘り方から出土した棒状の鉄製品である。



図版番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部臓	法量(cm)	外面調整	内面調整	参考	写真回数
1	E-040	HK	SI38	掘り方	須恵器	壺	口縁一底	(16.6) 0.00	G7.1 0.71 0.70調整。 底面に縦溝2つ+横溝4つ	0.70調整	外側に縦溝2つ 内側に横溝4つ	53
2	E-041	HK	SI38	堆積土	須恵器	壺	口縁一底	(15.6) -	G8.8 0.88 付子縁、手縫ひき口	0.70調整	53	
3	E-042	HK	SI38	SK2堆積土	須恵器	壺	底	-	G8.1 0.91 0.70調整。付子縁、底面に縦溝2つ	0.70調整	53	
4	E-043	HK	SI38	堆積土	須恵器	甕	肩	-	G2.5 0.25 0.70調整。花瓶口	0.70調整	SDP9堆積土 付子縁	53
5	E-044	HK	SI38	堆積土	須恵器	甕	胴	-	(11.2) 平行溝目	0.70調整。 青面文→G7.7	SDP9堆積土 付子縁片と接合	53

図版番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	法量(cm)	重量(g)	特徴-参考	写真回数
6	N-009	HK	SI38	掘り方	金屬製品	棒状供物	5.3 1.0 0.9	0.60	封か	53

第129図 SI 38竪穴住居跡出土遺物(2)

SI39 積穴住居跡(第130・131図)

[位置・確認] 第3次調査として実施したI区北拡張区北端部、H-0~1グリッドに位置する。西半部のみが検出された。東および北側は調査区外にかかる。

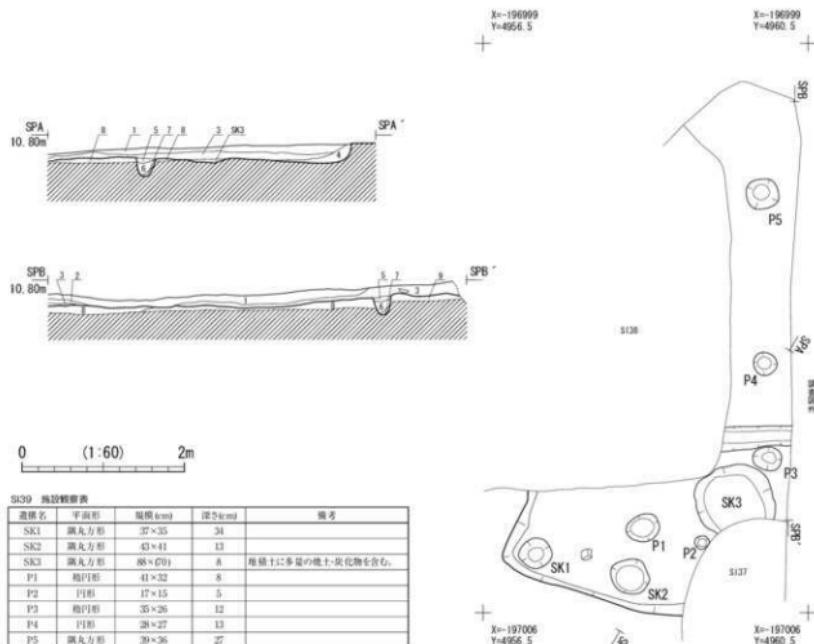
[重複] SI37・38に切られる。

[規模・形態] 検出された範囲の規模は、南北655cm、東西321cmを測る。平面形状はいびつな方形ないし長方形を呈するものと推測されるが、判然としない。

[方向] 南壁基準でN-73°-Wである。

[堆積土] 9層に分層された。1~4層は住居堆積土で、すべての層がにぶい黄褐色粘土や黄褐色シルトブロックや炭化物粒等を含む。5~7層は間仕切溝堆積土、8・9層は掘り方堆積土である。

[壁面] 検出された範囲の壁面は、内湾気味に立ち上がる。残存する壁高は、15~18cmを測る。



SI39 施設観察表

遺構名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備考
SK1	圓角方形	37×35	34	
SK2	圓角方形	43×41	13	
SK3	圓角方形	85×70	8	堆積土に多量の焼土・炭化物を含む。
P1	楕円形	41×32	8	
P2	円形	17×15	5	
P3	楕円形	35×26	12	
P4	円形	28×27	13	
P5	圓角方形	39×36	25	

SI39 堆積土柱観察表

部位	層位	土色	土性	備考
住居堆積土	1	10YR3/-2	黒褐色	シルト 10YR5-3にぶい黄褐色粘土ブロック・炭化物・焼土粒・マンガン鉱を含む。下層に炭化物集積層あり。
	2	10YR4/-3	にぶい黄褐色	シルト 2.5Y6-4にぶい黄褐色シルト・炭化物・焼土粒・マンガン鉱を含む。
	3	10YR3/-3	暗褐色	シルト 10YR5-6黄褐色シルトブロック・炭化物粒・焼土ブロック・後土粒を含む。
	4	10YR3/-2	黒褐色	粘土質シルト 10YR5-6黄褐色シルトブロック・10YR4-2灰黒褐色粘土ブロック・炭化物・酸化鉄鉱・マンガン鉱を含む。
間仕切溝	5	10YR3/-2	暗褐色	シルト 2.5Y6-4にぶい黄褐色シルト・炭化物を含む。
	6	10YR4/-3	にぶい黄褐色	粘土質シルト 2.5Y6-4にぶい黄褐色シルト・炭化物を含む。
	7	10YR3/-4	暗褐色	シルト 10YR5-6黄褐色シルト・炭化物・焼土粒を含む。
	8	10YR3/-3	暗褐色	シルト 10YR5-6黄褐色シルトブロック・10YR4-2灰黒褐色粘土ブロック・炭化物・酸化鉄鉱・マンガン鉱を含む。
掘り方	9	10YR4/-6	褐色	シルト 10YR5-2黒褐色粘土粒を含む。

第130図 SI39 積穴住居跡

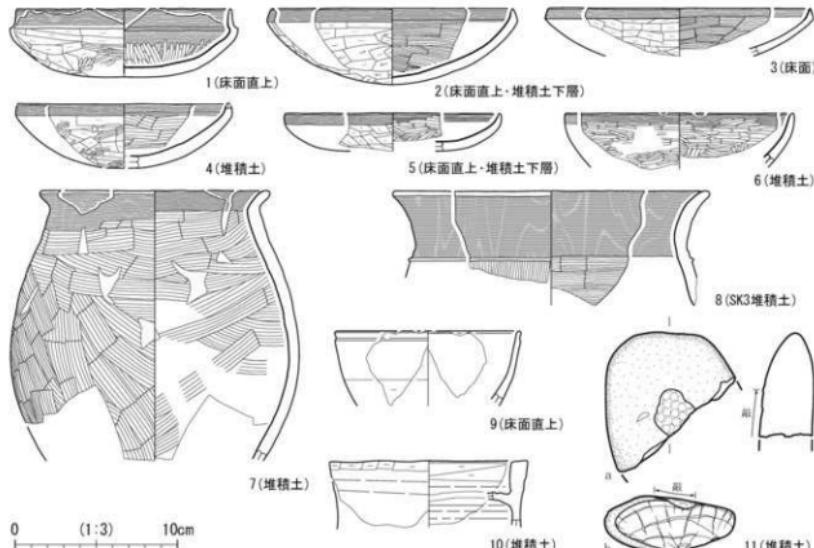
[床面]1～4層下面を床面とし、緩やかな起伏が認められる。

[柱穴]5基検出された。いずれも柱痕跡は認められず、柱穴であるか否かは不明である。

[掘り方]概ね平坦であるが、間仕切溝を境として南北に8cm程の高低差が認められる。

[その他の施設]土坑が3基検出された。いずれも間仕切溝の南側に位置する。SK 1・2に比べ規模の大きいSK 3の堆積土には、焼土や炭化物が多く含まれる。

[出土遺物]土師器壺6点・甕2点、須恵器壺・碗、礫石器を各1点掲載した(第131図)。1～5は、いわゆる鬼高系の特徴を有する土師器壺であるが、出土層位は様々である。器形はいずれも底部から部にかけて緩やかに内湾する扁平な丸底で、外面の口縁部と部の境界には明瞭な段もしくは稜を持ち、口縁部が短くやや内傾する器形を基調とし、1のみ底部が平底状で口縁部がやや内側に入り込む。色調は内外面共に橙色を基調とし、胎土には多くの



国版番号	登録番号	調査区	出土場	層位	性別	器種	部位	口径 底径 厚さ	法量(cm) 底径 厚さ	外面調整	内部調整	参考	写真 国版
1	C-158	HIC	SE29	床面直上	土師器	壺	口縁～底	(13.4)	-	4.2 [口縁:32mm, 体～底:1.5mm] → 0.9mm	[口縁:32mm, 体～底:1.5mm] → 0.9mm	内外面上半 黑色漆仕上げ	54
2	C-159	HIC	SE29	床面直上 堆積土下層	土師器	壺	口縁～底	(15.0)	-	4.5 [口縁:32mm, 体～底:1.5mm]	[口縁:32mm, 体～底:1.5mm]	内外面上半 黑色漆仕上げ	54
3	C-163	HIC	床面	土師器	壺	口縁～底	(16.6)	-	6.9 [口縁:32mm, 体～底:1.5mm]	[口縁:32mm, 体～底:1.5mm]	内外面上半 黑色漆仕上げ	54	
4	C-160	HIC	SE29	堆積土	土師器	壺	口縁～底	(13.3)	-	3.9 [口縁:32mm, 体～底:1.5mm] → 0.9mm	[口縁:32mm, 体～底:1.5mm] → 0.9mm	内外面上半 黑色漆仕上げ	54
5	C-161	HIC	SE29	床面直上 堆積土上層	土師器	壺	口縁～底	(12.4)	-	2.3 [口縁:32mm, 体～底:1.5mm]	[口縁:32mm, 体～底:1.5mm]	内外面上半 黑色漆仕上げ	54
6	C-162	HIC	SE29	堆積土	土師器	壺	口縁～底	(14.2)	-	0.4 [口縁:32mm, 体～底:1.5mm]	[口縁:32mm, 体～底:1.5mm]	内外面上半 黑色漆仕上げ	54
7	C-164	HIC	SE29	堆積土	土師器	甕	口縁～底	(14.2)	-	16.6 [口縁:32mm, 底:1.5mm]	[口縁:32mm, 底:1.5mm]	内外面上半 黑色漆仕上げ	54
8	C-165	HIC	SE29	SK3堆積土	土師器	甕	口縁～底	(19.8)	-	0.0 [口縁:32mm, 底:1.5mm]	[口縁:32mm, 底:1.5mm]	内外面上半 黑色漆仕上げ	54
9	E-045	HIC	床面直上	須恵器 甕	甕	口縁～底	(11.5)	-	4.6 [口縁:32mm, 底:1.5mm]	[口縁:32mm, 底:1.5mm]	内外面上半 黑色漆仕上げ	54	
10	E-046	HIC	SE29	堆積土	須恵器	甕	縁	(12.0)	-	0.0 [縁:32mm, 底:1.5mm]	[縁:32mm, 底:1.5mm]	内外面上半 黑色漆仕上げ	54

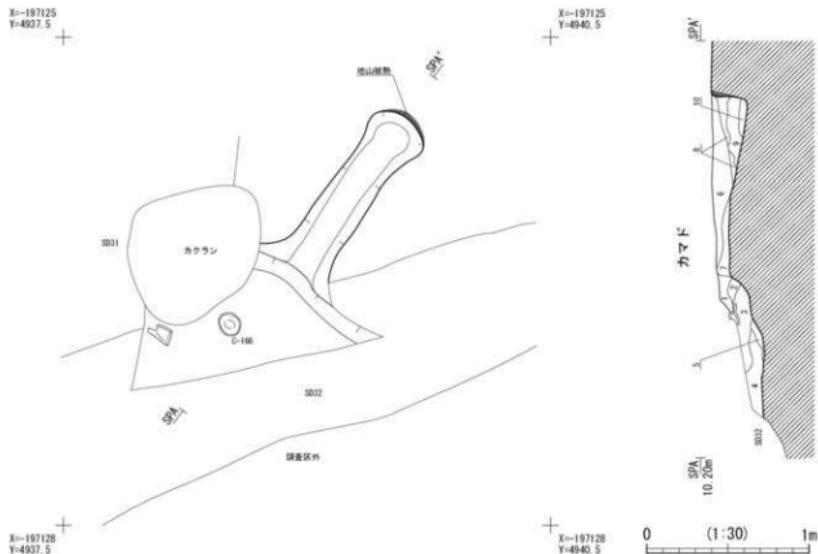
国版番号	登録番号	調査区	出土場	層位	性別	器種	部位	口径 長さ 幅 厚さ	法量(cm) 底径 厚さ	重さ(g)	石材	参考	写真 国版
11	Ke-016	HIC	SE29	堆積土	礫石器	砾石	底	8.5 8.0 3.4	257.41	安山岩	内側、欠損部、底(上面)箇所程度(底)	54	

第131図 S139竪穴住居出土遺物

海綿骨針および径1mm程の小穂や石英のほか、赤色粒子を少量含む。整形技法についてもほぼ同様の特徴が認められるが、内面の体部から底部にかけては、ヘラナデ後に放射状のヘラミガキが施されるもの(1)、全面にヘラミガキが施されるもの(5)、また内外面の上半部が黒色漆仕上げされるもの(1・2・4)が認められる。堆積土中から出土した同図-6は上記5点とは特徴が異なるもので、器形は全体的に内湾し、外面の口縁部と体部の境界には不明瞭な段を持つ。色調は浅黄橙色を呈するものの、胎土については上記5点と同様の特徴が認められる。整形技法においても内外面共に口縁部を除いてヘラミガキが全面に施される。

7-8は、いずれも胴部に最大径を持つ土師器壺である。胎土や整形技法は同様の特徴が認められるが、口縁部形態は異なり、前者は胴部との境界に段を持たずに短く外反し、後者はこれとは対象的に胴部との境界に段を持ち口縁部は緩やかに外反する。

9は底部を欠くものの砲弾状の器形と推定されるもので、須恵器壺とした。外面の口縁部と体部の境界に段を持つ。須恵器壺とした10は脚部に比べて覗側に厚みを持つ円筒状の器形を呈し、覗側は堤を持たず、陸は覗側に高まりを持ち、中央部は崖むものと推定される。陸と縁の境界にはわずかな崖みを有するが、これが海に相当す



SI69 堆積土柱記表

部位	層位	土色	土性	参考
カマV	1	10YR3-2	黒褐色	炭化物質を微量、幾十プロックを含む。
	2	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YR5-4 黄褐色土プロックを含む。
	3	10YR3-1	黒褐色	炭化物質、多量の植物灰を含む。
	4	10YR3-1	黒褐色	10YR5-4 黄褐色土粒、炭化物質、健土鉢を含む。
	5	10YR3-1	黒褐色	10YR5-4 黄褐色土プロックを多量、炭化物質、健土鉢を含む。
	6	10YR3-2	黒褐色	10YR5-4 黄褐色土を斑状に、健土を含む。(天井崩落土の可能性あり)
	7	10YR5-4	にじむ 黃褐色	斑状に 10YR3-2 が埋蔵土を含む。
	8	10YR3-1	黒褐色	炭化物質、健土を含む。(天井崩落土)
	9	10YR3-2	黒褐色	健土を含む。(天井崩落土)
	10	10YR3-1	黒褐色	シルト

第132図 SI69 壁穴住跡

るかは判然としない。内面の硯側上端には回転ヘラケズリ、縁から外面硯側上端にかけて手持ちヘラケズリが施される。成形・調整共に粗雑なものである。

IIは扁平な礫を素材とする敲石で、a面中央に敲打痕が認められる。b面はa面使用後に形成された分割面であり、その後使用された痕跡は認められない。石材は安山岩である。

SI69 穹穴住居跡(第132・133図)

[位置・確認] 第3次調査として実施したIV区東拡張区南東部、H-8グリッドに位置する。カマド周辺部のみが検出された。南側の大部分は調査区外にかかる。

[重複] SD31・32に切られるほか、北東側は擾乱により失われており、残存状況は悪い。

[規模・形態] 検出された範囲の規模は、南北113cm、東西130cmを測る。平面形状は不明である。

[方向] カマド煙道部基準でN-34°-Eである。

[堆積土] 10層に分層された。いずれもカマド関連層位で、6・8・9層は煙道部天井崩落土と考えられる。

[カマド] 北壁に付設される。袖部および燃焼部の大部分はSD32に切られる。燃焼部の全体形は不明であるが、残存する部分の規模は、奥行き約80cm、奥壁高12cmを測る。底面は奥壁に向かって緩やかに上る。煙道部の規模は、長さ約125cm、幅30～35cm、深さ10～20cmを測る。底面は南半部が概ね平坦で、北半部は煙出し部に向かって下る。煙出し部に落ち込み等は認められず、北側壁面には厚さ1～4cmの被熱による変色が認められる。

[出土遺物] 土師器壺1点を掲載した(第133図)。胴部中位に最大径を持つもので、外面の口縁部と胴部の境界に段を持ち、口縁部は外反する器形を呈する。外面には被熱の痕跡が認められる。このほか、堆積土中から骨片が少量出土しているが、詳細は不明である。



第133図 SI69 穹穴住居跡出土遺物

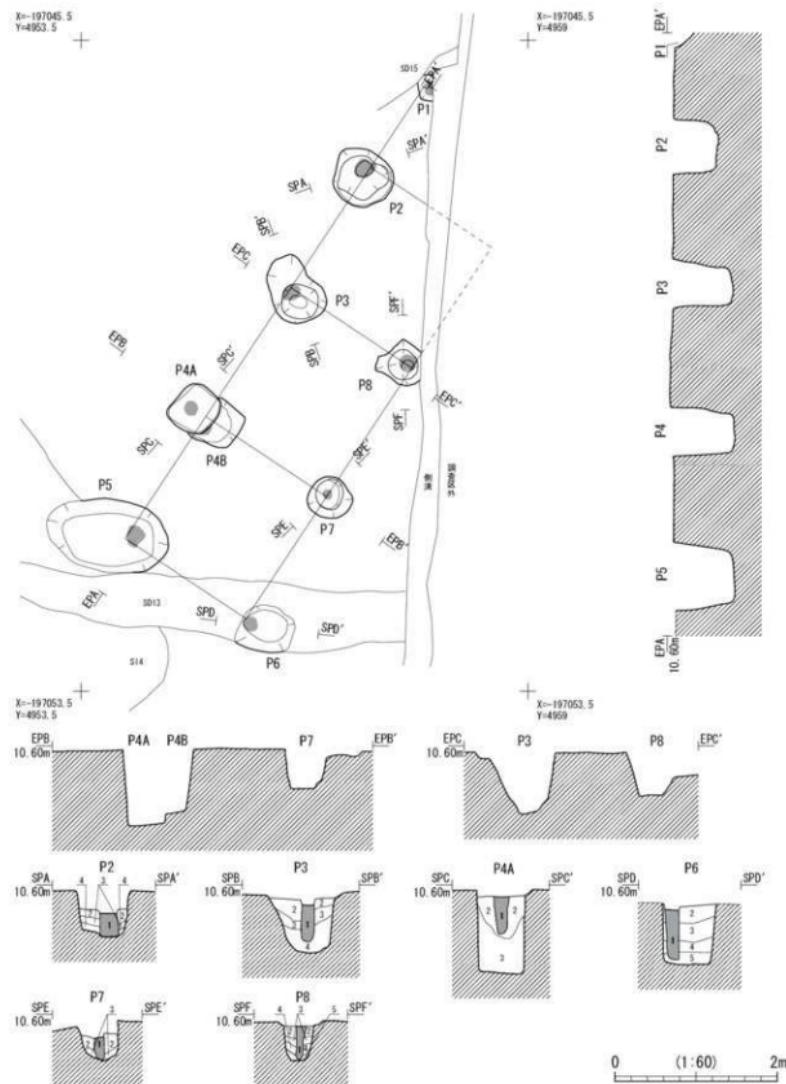
(2) 掘立柱建物跡(第134～136図)

遺構の重複関係などから古代に帰属すると考えられる掘立柱建物跡は、I区から2棟、II区から1棟、計3棟検出された。これらの軸方向をみると、I区から検出されたSB1は郡山Ⅰ期官衙の主軸方位にはほぼ平行し、同じくI区から検出されたSB2は同Ⅱ期官衙の主軸方位である南北方向に構築される。検出数が少なく、また位置関係からみても判然としない部分があるものの、郡山官衙との関連性が窺われるものといえる。

以下、3棟の掘立柱建物跡について、個別に記載する。

SB1 挖立柱建物跡(第134図)

I区南半部、H-I-3グリッドに位置する。SD4・11、Pit283、SX2を切り、SI4、SD13に切られる。総数9基の



第134図 SB1 挖立柱建物跡

柱穴が検出された。少なくとも8基の柱穴で構成されるものであるが、P4AとP4Bには重複関係が認められるところから、本掘立柱建物跡は建て替えが行われた可能性がある。柱痕跡はすべての柱穴で確認された。

検出された範囲においては、少なくとも南北4間以上×東西2間以上の北東-南西方向に棟を持つ建物跡であるものの、調査区北東に棟が延びる可能性や東方に延びる総柱建物跡の可能性も想定される。検出された範囲の桁行を基準とした軸方位は、N-34°-Eである。

検出された範囲の桁行は総長665cm、柱間寸法は西側柱穴列が北から120cm、175cm、190cm、177cm、東側柱穴列が北から186cm、175cm、梁行はいずれも180cmを測る。

各柱穴の平面形は、隅丸方形・不整円形・楕円形・不整形と様々で、規則性のようなものは認められない。調査区外にかかるP1を除く各柱穴の上端径は、60cm前後を測るものと80cm前後を測るものに概ね大別されるものの、P5のように1mを超える上坑状のものも含まれる。

深さは桁行西側柱穴列が85cm前後、同東側柱穴列が55cm前後を測り、東西各柱穴列における底面の標高がほぼ一定すると共に、西側と東側の柱穴列底面に30cm程の高低差が認められる。しかしながら、これが何に起因するものなのかは不明である。

SB1 堀立柱建物跡 検察表

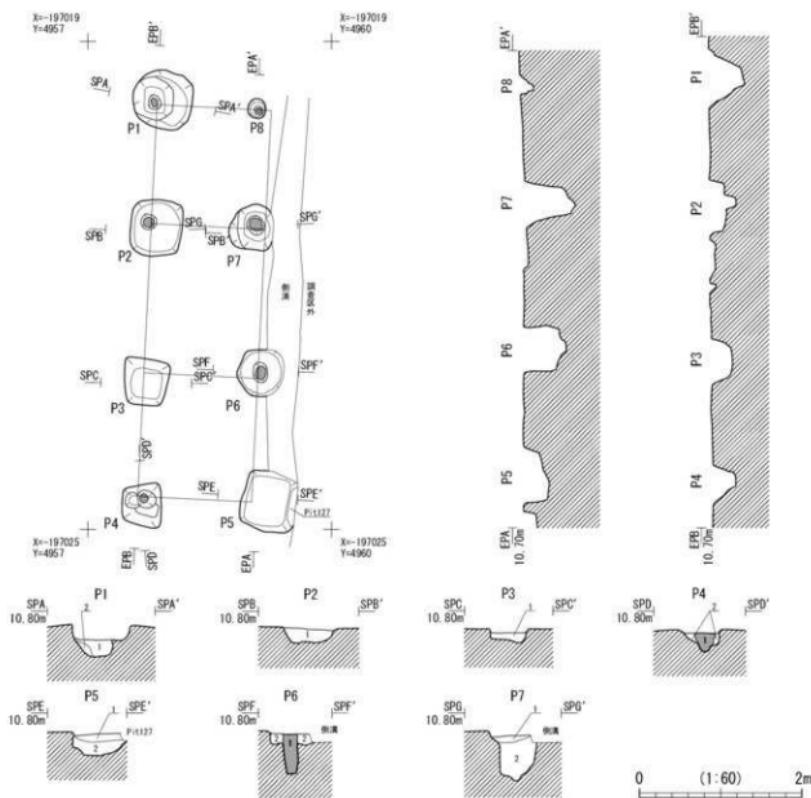
遺構名	グリッド	平面形	規模(cm)		層位	土色	土性	備考	重複	
			長軸	短軸						
P1	I-3	隅丸方形	34×(18)	25	-	-	-	エレベーションのみ。	SD15に切られる。	
P2	I-3	不整円形	76×68	58	1	10YR2-2	黒褐色	シルト質 粘土	鉄化物跡を含む。(柱痕跡)	
					2	10YR2-2	黒褐色	シルト	10YR5-6 黃褐色シルトブロックを含む。	
					3	10YR4-3	にぬく 黄褐色	シルト質 粘土	10YR3-2 黒褐色シルト質粘土ブロックを含む。	
					4	10YR3-3	暗褐色	シルト質 粘土	10YR5-6 黄褐色シルトブロックを含む。	
P3	H-3	不整円形	84×63	80	1	10YR3-2	黒褐色	シルト	10YR5-6 黄褐色シルトブロックを含む。	
					2	10YR4-4	褐色	シルト	10YR3-2 黒褐色シルト質粘土ブロックを含む。	
					3	10YR4-3	にぬく 黄褐色	シルト質 粘土	10YR3-2 黑褐色シルト質粘土ブロックを含む。	
					4	10YR3-2	黒褐色	シルト質 粘土	鉄化物跡を多量に含む。	
P4 A	H-3	隅丸方形	37×53	95	1	10YR2-2	黒褐色	シルト質 粘土	鉄化物跡を含む。(柱痕跡)	SD1P4Bを切る。
					2	10YR3-2	黒褐色	シルト	10YR5-6 黄褐色シルトブロック・10YR2-2 黒褐色シルト質 粘土を含む。	
					3	-	-	-	記述なし。	
P4 B	H-3	隅丸方形	(60)×(60)	80	-	-	-	エレベーションのみ。	SD1P4Aに切られる。	
P5	H-3	楕円形	(53)×(69)	82	-	-	-	エレベーションのみ。	SD2, P6Cを切る。 SD13に切られる。	
P6	I-3	隅丸方形	69×(56)	78	1	10YR3-2	黒褐色	シルト質 粘土(柱痕跡)	10YR5-6 黄褐色シルトブロック・鉄化物跡を含む。	SD13に切られる。
					2	10YR3-2	黒褐色	シルト	10YR5-6 黄褐色シルトブロックを含む。	
					3	10YR4-4	褐色	シルト	10YR2-2 黒褐色シルト質粘土を層下部に含む。	
					4	10YR5-6	黄褐色	シルト	10YR2-2 黑褐色シルト質粘土ブロックを含む。	
					5	10YR2-2	黒褐色	シルト	10YR5-6 黄褐色シルトブロックを含む。	
P7	I-3	不整円形	55×50	52	1	10YR2-2	黒褐色	シルト質 粘土(柱痕跡)	鉄化物跡を含む。底面に礫化鉄の集積層あり。	SD11を切る。
					2	10YR2-2	黒褐色	シルト	10YR5-6 黄褐色シルトブロックを含む。	
					3	10YR4-3	にぬく 黄褐色	シルト質 粘土	10YR5-6 黄褐色シルトブロックを含む。	
P8	I-3	不整形	(55)×(48)	53	1	10YR2-2	黒褐色	シルト質 粘土	鉄化物跡を含む。(柱痕跡)	
					2	10YR3-2	黒褐色	シルト	10YR5-6 黄褐色シルトブロックを含む。	
					3	10YR3-3	暗褐色	粘土質 シルト	10YR5-6 黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。	
					4	10YR5-6	黄褐色	粘土質 シルト	10YR4-2 黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。	
					5	10YR5-6	黄褐色	粘土質 シルト	底面に礫化鉄集積層あり。	

SB2 堀立柱建物跡(第135図)

I 区北半部南側、H-1グリッドに位置し、Pit117・129を切る。少なくとも8基の柱穴で構成されるもので、柱痕跡はP3・P5を除くピットで確認された。

検出された範囲においては、少なくとも南北3間以上×東西1間以上の南北棟建物跡であるものの、擾乱の影響

が著しい南側に棟が延びる可能性や東側の調査区外に延びる総柱建物跡の可能性も想定される。検出された範囲の桁行を基準とした軸方位は、N-2°-Eである。



SB2 立柱建物跡 観察表

遺構名	グリッド	平面形	規模(cm)		層位	土色	土性	備考	重複
			長軸	短軸					
P1	H-1	円形	72	72	35	1 10YR2-/3 黒褐色 2 10YR5-4 にじみ、黄褐色	シルト	炭化物跡を微量含む。 10YR2-/3 黒褐色 土ブロックを含む。	
P2	H-1	丸方形	70	62	32	1 10YR2-/3 黒褐色	シルト	10YR5-/4(2) 黄褐色 土を挟む。 炭化物跡 土ブロックを含む。	
P3	H-1	方形	55	54	25	1 10YR2-/3 黒褐色	シルト	10YR5-/4(2) 黄褐色 土を挟む。 炭化物跡 土ブロックを含む。	
P4	H-1	方形	55	46	40	1 10YR2-/2 黒褐色 2 10YR2-/2 黒褐色	シルト	地盤: 10YR5-/4(2) 黑褐色 土を含む。(柱軸跡) 10YR5-/4(2) 黄褐色 土ブロックを含む。	Pt117を切る。
P5	H-1	丸方形	74	68	29	1 10YR2-/3 黒褐色 2 10YR2-/3 黒褐色	シルト	炭化物跡を微量含む。 10YR5-/4(2) 黄褐色 土ブロックを含む。	Pt127に切られる。
P6	H-1	不整形	61	54	54	1 10YR2-/2 黒褐色 2 10YR2-/2 黒褐色	シルト	地盤: 10YR5-/4(2) 黑褐色 土を含む。(柱軸跡) 10YR5-/4(2) 黄褐色 土ブロック、微量の炭化物跡を含む。	
P7	H-1	不整形	56	54	67	1 10YR2-/3 黒褐色 2 10YR2-/3 黒褐色	シルト	10YR5-/4(2) 黄褐色 土ブロック、微量の炭化物跡を含む。 Pt129を切る。	
P8	H-1	円形	23	21	15	-	-	-	エレベーションの点。

第135図 SB2 挖立柱建物跡

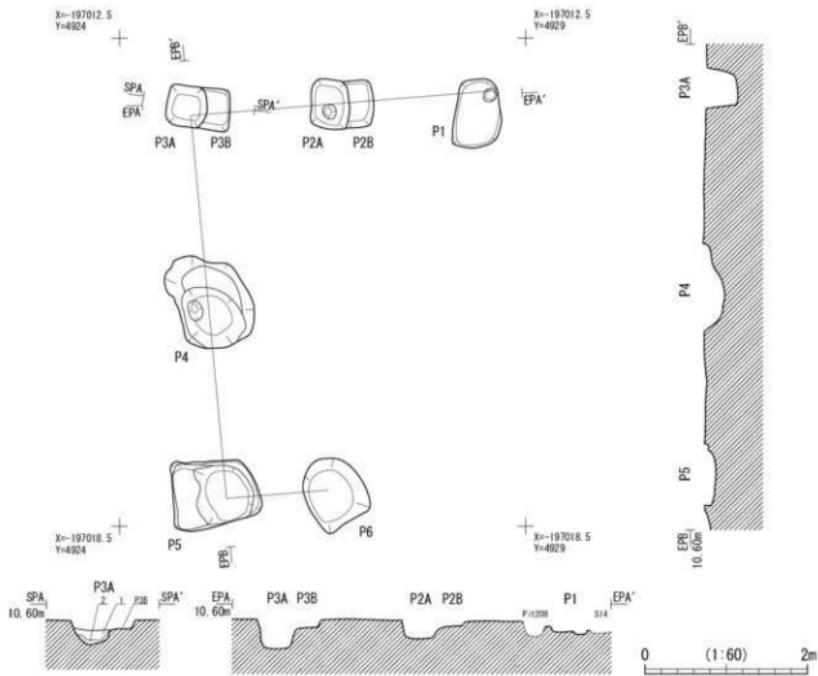
検出された範囲の桁行は総長480cm、柱痕跡を有する柱穴の柱間寸法は、西側柱穴列P1・P2が145cm、東側柱穴列P7・P8が145cm、P6・P7が180cmを測り、柱痕跡が認められないものについては150～180cm程を測るものと推定される。梁行は柱痕跡が認められるP1・P8が125cm、P2・P7が130cmを測り、柱痕跡が認められないP3・P6、P4・P5については、共に150cm程を測るものと推測される。

各柱穴の平面形は方形ないし楕円形を基調とし、一部不整な円形を呈するものも認められる。各柱穴の規模は上端径が50～70cm前後を測るものが多いものの、P8のように上端径が20cm前後を測ると小規模なものも含まれる。深さは15～67cmを測り、SB1のような一定のまとまりは認められない。底面の標高値についてもまた同様である。

SB4 挖立柱建物跡(第136図)

II区北端、F-1グリッドに位置し、SI16を切る。総数8基の柱穴が検出された。少なくとも6基の柱穴で構成されるものであるが、P2AとP2B、P3AとP3Bにはそれぞれ重複関係が認められることから、本掘立柱建物跡は建て替えが行われた可能性がある。柱痕跡はP1・P2A・P4で認められた。

検出された範囲においては少なくとも南北2間×東西2間の建物跡であるものの、調査区東側に延びる可能性や、鉤状を呈する柱列の可能性も考えられる。桁行を基準とした軸方位は、南北軸でN-5°・Wである。



第136図 SB4 挖立柱建物跡

検出された範囲の桁行は、南北470cm、東西370cm、柱痕跡を有する柱穴の柱間寸法は、P1・P2Aが200cmを測り、この他は西側南北柱穴列が240cm前後、北側東西柱穴列が170cm前後、南側東西柱穴列が100cm前後と推測される。

各柱穴の平面形は隅丸の方形ないし長方形を基調とし、一部不整形を呈するものも認められる。各柱穴の規模は上端径が50~70cm前後を測るものが多いが、P4・5のように上端径が1mを超える土坑状のものも含まれる。深さは9~38cmと様々で、底面の標高値に一定のまとまりは認められない。

SB4 圆柱建物跡 観察表

遺構名	グリッド	平面形	規模(cm)		層位	土色	土性	備考	重複
			長軸×短軸	深さ					
P1	F-1	隅丸方形	45×57	15	-	-	-	エレベーションのみ。	
P2A	F-1	隅丸方形	61×68	27	1	10YR5-4 黄褐色	-	10YR3-2 黒褐色プロフを多量含む。 SB4P2Bを切る。	
P2B	F-1	方形	58×39	9	1	10YR5-4 黄褐色	-	10YR3-2 黒褐色プロフを多量含む。 SB4P2Aに切られる。	
P3A	F-1	隅丸方形	51×50	38	1	10YR3-3 黄褐色	シルト	炭化物を多量含む。	SB4P3Aを切る。
					2	10YR4-3(に近い)黄褐色	粘土質シルト	10YR5-6 黑褐色シルトプロフを多量含む。	
P3B	F-1	方形	51×29	12	-	-	-	エレベーションのみ。	SB4P3Aに切られる。
P4	F-1	不整形	123×94	29	1	2.5Y3-1 黑褐色	粘土質シルト	7.5Y3-2 オリーブ黒色グライドを層上部に。炭化物を含む。	
P5	F-1	隅丸方形	111×86	15	1	2.5Y3-1 黑褐色	粘土質シルト	炭化物を含む。	
P6	F-1	隅丸方形	84×71	16	1	2.5Y3-1 黑褐色	粘土質シルト	炭化物を含む。	

(3) 溝跡(第137~143図)

今次調査において、古代に帰属するものと考えられる溝跡は、I区から6条、II区から5条、IV区から5条、VI区から10条、計26条検出された(区画的性格が考えられるものや円形周溝を含む)。これらの溝跡について、各調査区を併せて巨視的にみると、東西方向に延びるものと北東・南西方向に延びるものに大別されることに加え、前者が後者を切るという重複傾向が認められることから、各調査区が位置する遺跡東半部における溝跡の変遷が想定される。

以下、これらの溝跡の報告にあたり、各調査区の概要に触れた上で主なものには個別に記載し、出土遺物については調査区毎にまとめて記載する。なお、I区から検出されたSD17A・B、IV区から検出されたSD31については区画的性格が考えられるため、次項にて記載することとした。

a. I区 溝跡(第137-138図)

I区からは、区画施設と考えられるSD17A・Bを含め、7条の溝跡が検出された。このうち、SD17A・Bを除く5条については、概ね東西方向に延びるものと北東・南西方向に延びるもののが大半を占め、SD9のみが南北方向へ延びる。

以下、2条の溝跡について個別に記載する。その他についてはまとめて観察表に示した。

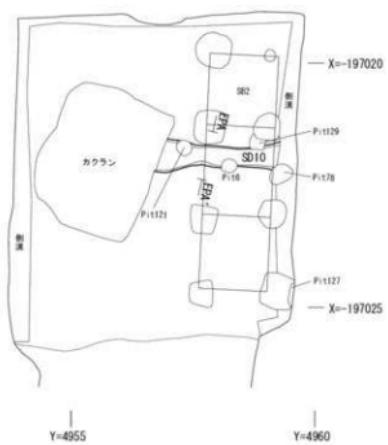
SD10 溝跡(第137図)

I区北半部南北、H-1グリッドに位置する。I区から検出された当該期の溝跡としては、唯一北半部に位置する。位置的にはSB2の南北軸中央を直行するように延びるが、重複関係からSB2との関連性は認められない。N-86°-Wの方向に直線的に延び、西側末端は搅乱によって失われ、東側は調査区外にかかる。検出された規模は長さ2.05m、上端幅40~70cm、下端幅25~55cm、深さ6cm前後を測り、断面形状は皿状を呈する。遺物は出土していない。

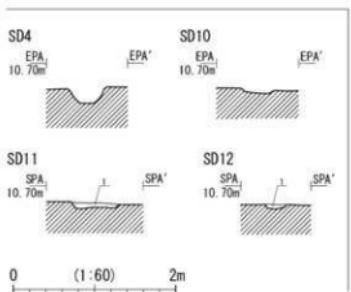
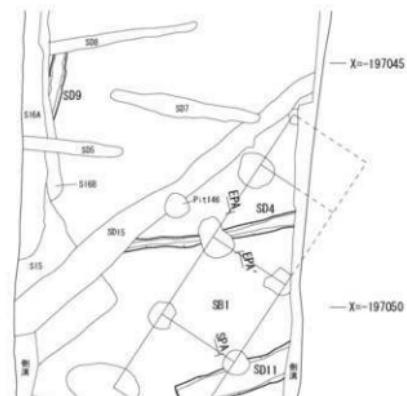
SD12 溝跡(第137-138図)

I区南半部中央、H-1-3グリッドに位置する。SD17、SX2を切り、SK7、Pit146に切られる。N-86°-Wの方向へ直線的に延び、東西両側共に調査区外にかかる。検出された規模は長さ5.06m、上端幅20~31cm、下端幅6~15cm、深さ12cmを測り、断面形状は逆台形状を呈する。第138図には、堆積土から出土した土器高1点を掲載した。

北側



南側



第137図 I区満跡(古代)

I 区溝跡(古代) 調査表

遺物名	調査区	グリッド	方向	規模(cm)			部位	土色	土性	備考	重複	
				横出し長	上端幅	下端幅						
SD4	I区	H-13	N78°-84°E	(05)	32-60	13-45	10	-	-	-	P06-96を切る。 SD15, SD1に切られる。	
SD9	I区	H-2-3	N40°-E	(30)	27-32	14-24	10	-	-	-	断面同じ。	
SD10	I区	H-1	N2°-W	(25)	39-68	27-60	6	-	-	-	エレベーションのみ。 P06-78-121-129に切られる。	
SD11	I区	13	N69°-E	(24)	58-62	43-45	5	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	10YR3/6 黄褐色シルトブロックを多含む。 SB1に切られる。	
SD12	I区	H-13	N86°-W	(06)	20-31	6-15	12	1	10YR3/3 布褐色	シルト	10YR3/6 黄褐色シルトブロックを多含む。 SD17, SX2が切れる。 SB1に切られる。	
SD17	I区							区画施設として次の記載				

I 区溝跡出土遺物(第138図)

I 区から検出された溝跡の出土遺物として、SD9から出土した土師器壺、SD12から出土した土師器高杯を各1点掲載した。いずれも堆積土からの出土で、1は口縁部と部体の境界に不明瞭な後を持つ、口縁部が短く内湾する器形を呈する。こうした器形の特徴は、いわゆる鬼高系の土師器壺に類似するものであるが、内面はヘラミガキ後に黒色処理されるなど、整形技法はいわゆる在地系の特徴が認められるものである。2は比較的径の小さい土師器高杯の脚部で、内外面の黒色処理や外面に施される放射状のヘラミガキが特徴的なものである。



第138図 I区溝跡(古代)出土遺物

b. II 区 溝跡(第139-140図)

II 区からは、5条の溝跡が検出された。総て調査区の南半部北端に位置し、調査区外へと延びる。また、程度に違いはあるものの搅乱の影響を受けている。

断面形状は逆台形を基調とするものの、掘り込みの深度は様々である。これらの中で、東西方向に延びるSD47は残存する上端幅最大80cmを測る比較的大規模なもので、掘り込みの深度や隅丸方形状を呈する末端の平面形状など、他の溝跡とは形態が異なるものである。

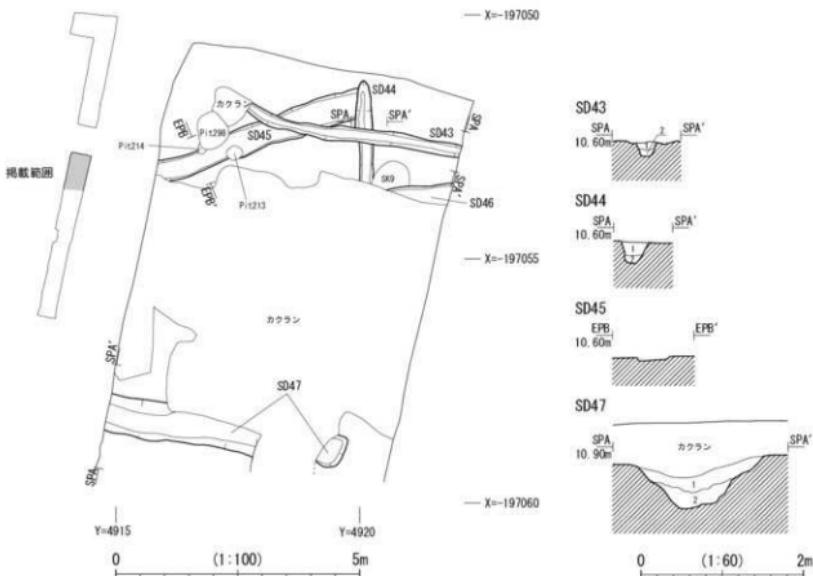
このSD47を含む5条の諸属性については、まとめて観察表に示した。

II 区溝跡出土遺物(第140図)

II 区から検出された溝跡の出土遺物として掲載したのは、SD47堆積土から出土した羽口の先端部破片1点のみである。残存する破片から、径6cm強、孔径2cm程の小型なものと推定されるが、断面形状等、不明な点が多い。

c. IV区 溝跡(第141図)

IV区からは、区画施設と考えられるSD31(郡山Ⅱ期官衙外構)を含め、調査区東側から5条の溝跡が検出された。南北方向に延びるSD31を除く4条は、すべて東西方向へ直線的に延び、西側はSD31に切られ、東側は殆どが後世の遺構や搅乱の影響で失われている。いずれの溝跡からも遺物は出土していない。

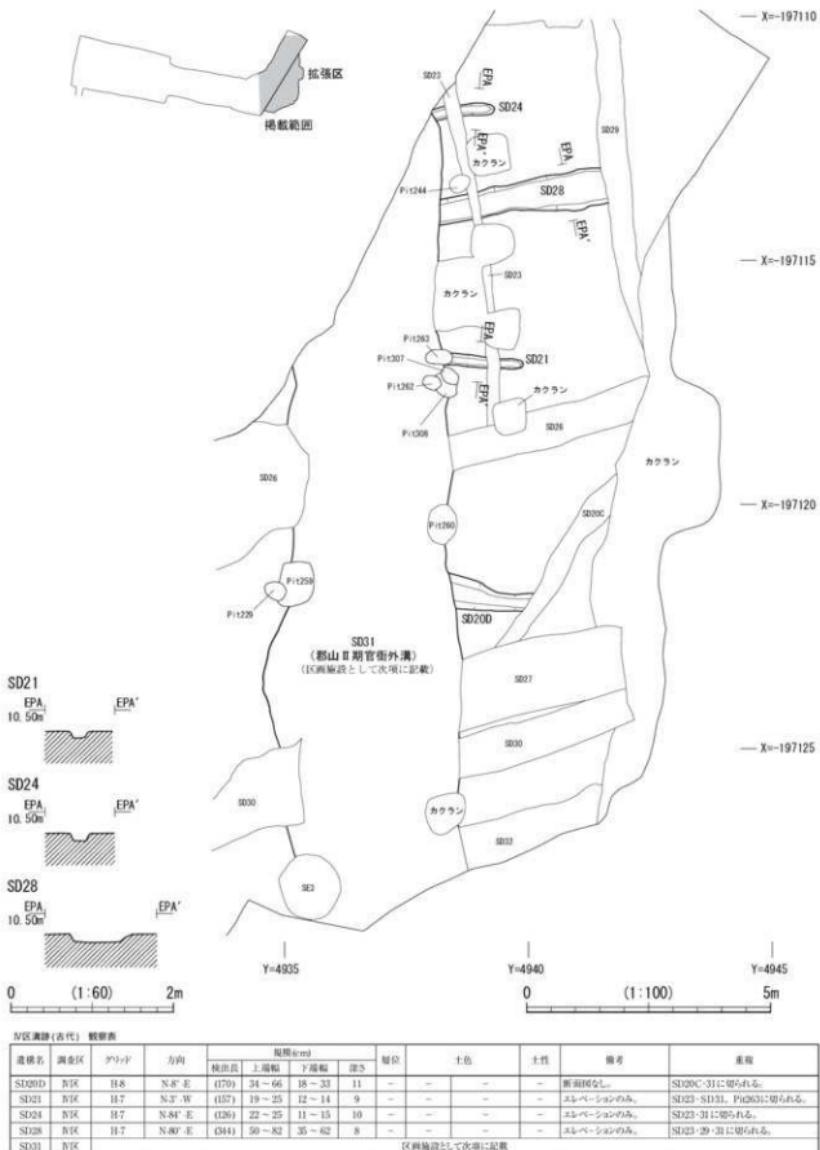


遺構名	調査区	グリッド	方向	規模(cm)			層位	土色	土性	備考	重積
				検出段	上端幅	下端幅					
SD43	II区	F-3	N 82°-W	(45)	38~30	10~18	14	1 10YR0-3	暗褐色	シルト 粘土質 シルト	塊土粒・マンガン鉱を含む。 10YR5.6黄褐色シルトブロックを含む。 SD44~45を切る。
								2 10YYR0-3	暗褐色	シルト	
SD44	II区	F-3~4	N 1°-E	(210)	22~35	6~20	7~25	1 10YYR0-3	暗褐色	シルト	塊状に10YR6.6明黄色褐色十を含む。 10YR5.6黄褐色土ブロックを多量含む。 SD45を切る。 SD43, SK9に切られる。
								2 10YYR0-3	暗褐色	シルト	
SD45	II区	F-3~4	N 71°-E	(450)	41~61	32~50	7	—	—	—	エヌベーションのみ。
SD46	II区	F-3~4	N 87°-E	(28)	(41)	(36)	10	—	—	—	新面無なし。 SK9を切る。
								1 10YR3-2	黒褐色	粘土質 シルト	
SD47	II区	F-4	N 78°-W	(110)	68~80	37~45	24	1 10YR3-3	暗褐色	シルト	10YR5.6黄褐色土ブロック・灰化物 塊・マンガン鉱を含む。 SK3~25を切る。
								2 10YYR3-3	暗褐色	シルト	

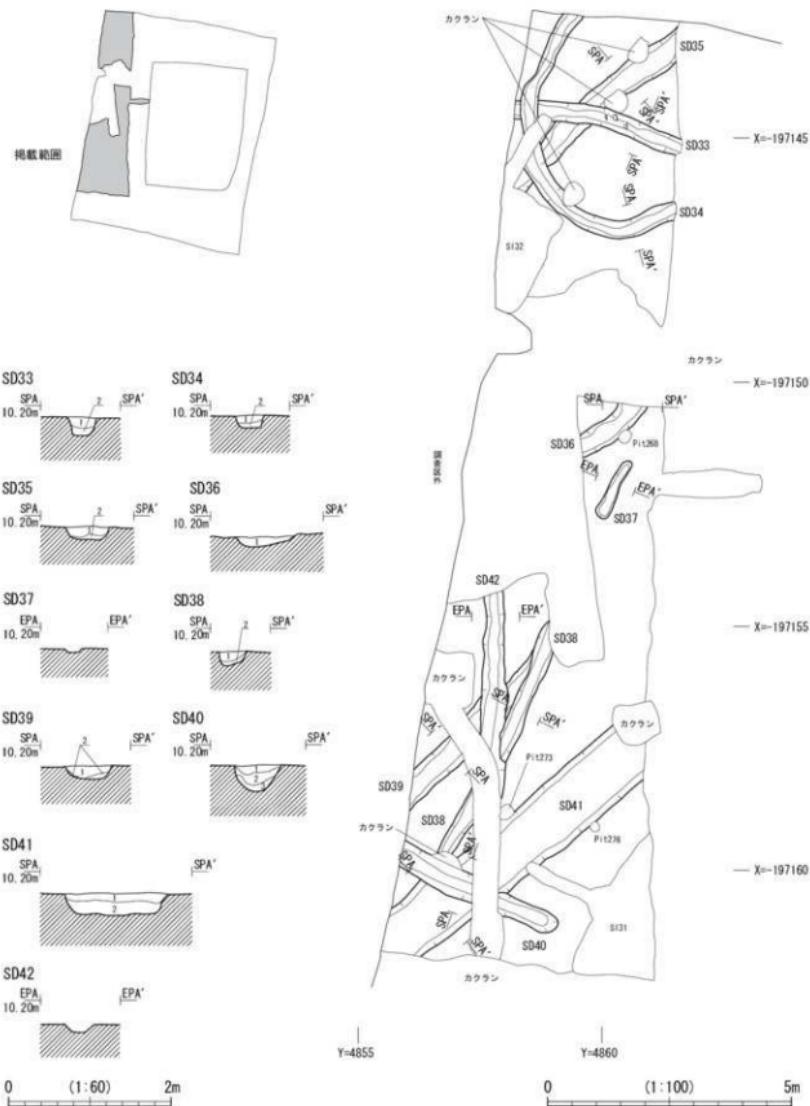
第139図 II区溝跡(古代)



第140図 II区溝跡(古代)出土遺物



第141図 IV区溝跡(古代)



第142図 VII区溝跡(古代)

d. VII区 溝跡(第142・143図)

VII区からは、円形周溝1基を含め、古代面が残存する調査区西半部の全域から10条の溝跡が検出された。このうち、平面形状は円形周溝1基を除き、概ね直線的に延びる。

以下、3条の溝跡について個別に記載する。その他についてはまとめて観察表に示した。

SD33 溝跡(第142・143図)

VII区北端部、C-D-10グリッドに位置する。SD35を切り、SI32、SD34に切られる。N・79°～88°・Wの方向へ延び、平面形状は北側にやや膨らむ緩い弧状を呈する。東側は搅乱によって失われ、西側は調査区外にかかる。検出された規模は長さ3.03m、上端幅36～42cm、下端幅12～26cm、深さ22cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。

SD34 溝跡(第142・143図)

VII区北端部、C-D-10グリッドに位置する。SD33・35を切り、SI32に切られる。北側は調査区外にかかり、東側は搅乱により失われている。検出された範囲の規模は、長さ6.88m、上端幅23～51cm、下端幅9～22cm、深さ23cmを測り、検出された範囲の平面形状は不整な円形、断面形状は箱形に近い逆台形を呈する。また、本溝跡の内側に本溝跡と関連するような施設や遺構は認められない。本溝跡開口部の有無についても不明である。

SD41 溝跡(第142・143図)

VII区南側、C-D-11グリッドに位置する。Pit275・281を切り、SI31、SD40、Pit273・276に切られる。N・50°・Wの方向へ直線的に延び、南西側および北東側共に搅乱により失われている。検出された範囲の規模は、長さ6.88m、上端幅115～128cm、下端幅85～97cm、深さ27cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。VII区検出の溝跡の中では最も大規模なものであるが、これ以外に他の溝跡との明確な差異は見出し難い。

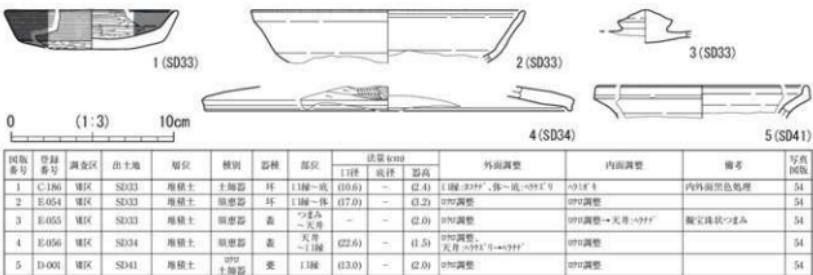
VII区溝跡(古代) 観察表

遺構名	調査区	グリッド	方向	面積(m ²)			層位	土色	土性	備考	重積	
				耕作层	上端幅	下端幅						
SD33	東区	C-D-10	N・79°～88°・W	(35)	36～42	12～26	22	1 10YR2・3 2 10YR4・2	黒褐色 黒褐色	シルト シルト	黄化物鉱を微量含む。 10YR2・3黒褐色土ブロックを含む。	SD35を切り。 SD2、SD34に切られる。
SD34	東区	C-D-10	-	(689)	23～51	9～22	23	1 10YR2・3 2 10YR4・2	黒褐色 黒褐色	シルト シルト	黄化物鉱を微量含む。 10YR2・3黒褐色土ブロックを含む。	SD33・35を切り。 SD2に切られる。
SD35	東区	C-D-10	N・36°～53°・E	(35)	46～62	19～40	22	1 10YR2・2 2 10YR4・3	黒褐色 に赤い黒褐色	シルト シルト	耕作層に10YR5・4黒褐色土を含む。	SD3、SD33・34に切られる。
SD36	東区	D-11	N・51°～E	(686)	45～50	22～35	13	1 10YR3・1	黒褐色	シルト	10YR5・4に赤い黒褐色シルトブロックを多量含む。	Pit268に切られる。
SD37	東区	D-11	N・24°・E	(30)	20～30	11～18	4	-	-	-	エバーベーションのみ。	
SD38	東区	D-11	N・25°・E	(38)	30～38	12～25	17	1 10YR3・1 2 10YR3・1	黒褐色 黒褐色	シルト シルト	10YR5・4に赤い黒褐色シルトブロックを多量含む。	SD39を切り。 SD42に切られる。
SD39	東区	C-D-11	N・46°・E	(115)	54～57	28～35	16	1 10YR3・1 2 10YR3・4	黒褐色 に赤い黒褐色	シルト シルト	10YR5・4に赤い黒褐色シルトブロックを多量含む。	SD38・42に切られる。
SD40	東区	C-D-11	N・68°・W	(355)	40～58	20～32	36	1 10YR3・2 2 10YR2・2 3 10YR3・2	黒褐色 黒褐色 黒褐色	シルト シルト シルト	黄化物鉱を微量、斑状にマンガンを含む。 黄化物鉱を微量、斑状にマンガンを含む。 黄化物鉱を微量、斑状にマンガンを含む。	SD41を切り。
SD41	東区	C-D-11	N・50°・E	(689)	115～128	85～97	27	1 10YR3・1 2 10YR3・1	黒褐色 黒褐色	シルト シルト	10YR5・4に赤い黒褐色土ブロックを多量含む。	Pit275・281を切り。 SE11、SD40、Pit273・276に切られる。
SD42	東区	D-11	N・2°・W	(422)	27～54	15～24	16	-	-	-	エバーベーションのみ。	SD38・39を切り。

VII区溝跡出土遺物(第143図)

VII区から検出された溝跡の出土遺物として、SD33から出土した土師器壺、須恵器壺・蓋、SD34から出土した須恵器蓋、SD41から出土したクロコ土師器壺を各1点掲載した。いずれも各溝跡堆積土からの出土である。

1は分厚い平底状の丸底で、口縁部と底部の境界に明瞭な稜を持つ器形を呈する土師器坏である。2は平底ないしは高台が貼り付けされるものと推定される須恵器坏で、外反気味な体部から口縁部がわずかに内湾する器形を呈する。3は擬宝珠状つまみが付く須恵器蓋で、断面の色調は中央が浅黄橙色、内外面両側が灰白色を呈する。4は天井部が分厚い須恵器蓋である。5は今次調査で一点のみ出土したロクロ土師器の壺で、頸部は外反し、口縁部が内傾する器形を呈するものである。



第143図 VII区溝跡(古代)出土遺物

(4) 区画施設(第144~154図)

今次調査では、Ⅰ区とⅣ区から各1条、計2条の区画的性格が考えられる溝跡が検出された。いずれも前項で記載した溝跡群とは規模・性格共に区別されるものである。

Ⅰ区から検出されたSD17は2時期にわたる変遷が認められ、他の遺構との重複関係や出土遺物などから郡山Ⅰ期官衙期に先行ないし並行する時期の所産と考えられる。検出されたのは全体の一部であるものの、帰属年代に加え、その規模や軸方向からは、郡山Ⅰ期官衙に関係する区画的性格が想定される。

Ⅳ区から検出されたSD31については、方四町(428m四方)の規模で周る郡山Ⅱ期官衙外郭大溝の西辺から50m西に並行する状況で検出された大規模な溝跡である。今次調査が最初の検出例ではあるものの、その後の調査により、方四町Ⅱ期官衙外郭大溝の50m外側を巡る区画溝(郡山Ⅱ期官衙外溝)に相当するものと考えられている(仙台市教委2005)。

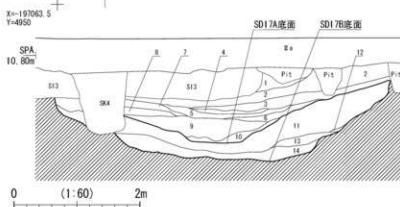
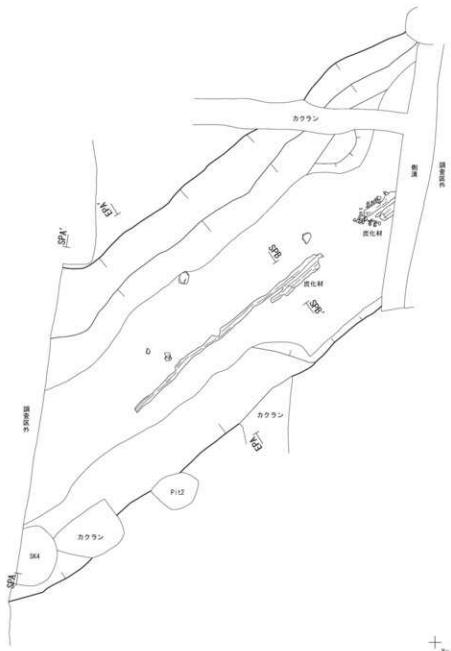
以下、郡山遺跡の官衙に関係する2条の溝跡について、区画施設として個別に記載する。

SD17A-B 溝跡(第144~150図)

Ⅰ区南半部両側、H-I-3-4グリッドに位置する。SI12を切り、SI3、Pit2に切られる。また、北東および両側は調査区外にかかる。北東-南西方向に直線的に延びる大規模な溝で、上端北側を基準とした軸方位は、N-55°-Eを指す。堆積土を観察した結果、掘り直しの痕跡が認められたことから、本溝跡には2時期にわたる変遷が考えられた。したがって、本溝跡についての図表および以下の報文では、掘り直し後の新しい段階を「SD17A」、掘り直し前の古い段階を「SD17B」としている。

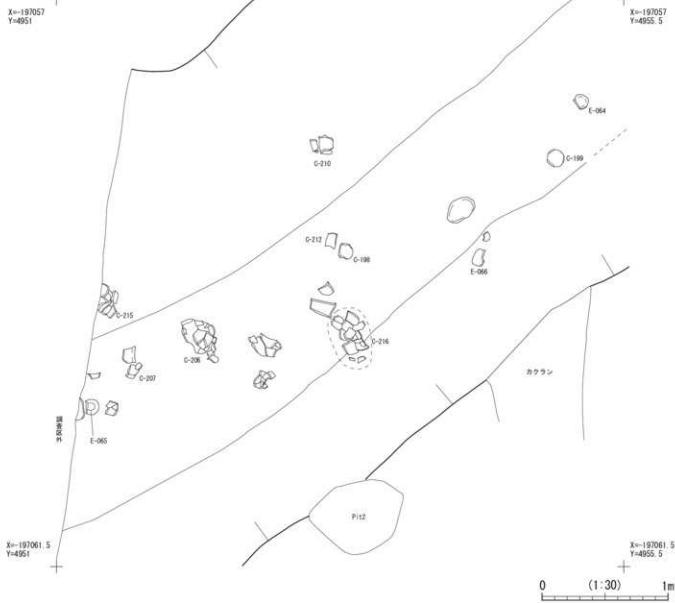
なお、第4次調査として平成13(2001)年度に実施した個人住宅建設に伴う発掘調査において、本調査区から約31m南西に設定された調査区から、北東-南西方向に延びる大規模な溝跡の南西側末端が検出された(現在整理中)。この溝跡は、規模や位置関係等から本溝跡の延長部分である可能性が高く、今次調査で検出された部分と合わせ、少なくとも全長45m以上にわたることが考えられる。

X=197053
Y=49550
SD17B



第144図 SD17A・B溝跡

X=197053
Y=4957.5
SD17A 遺物出土状況



SD17A-B溝跡 遺構目録			
順番	層位	土色	土性
1	10YR13-3	にほく黄褐色	シルト 炭化物粒・マンガンを含む。
2	10YR14-4	褐褐色	シルト 酸化鉄を含む。
3	10YR12-2	にほく黄褐色	シルト 炭化物粒を含む。
4	10YR12-2	にほく黄褐色	粘土シルト 10YR12-2層の青褐色土とシルトブロック層、厚柱に酸化鉄を含む。
5	10YR12-2	灰青褐色	粘土シルト 10YR12-2層の青褐色土とシルトブロック層合せで厚柱に酸化鉄を含む。
6	10YR12-2	にほく黄褐色	粘土シルト 10YR12-2層の青褐色土とシルトブロック及びマンガニン・酸化鉄を含む。
7	10YR14-4	褐色	シルト 10YR12-2層の青褐色土とシルトブロック層、厚柱に酸化鉄を含む。
8	10YR14-4	にほく黄褐色	シルト 10YR12-2層の青褐色土とシルトブロック及びマンガニン・酸化鉄を含む。
9	10YR12-2	灰青褐色	粘土シルト 10YR12-2層の青褐色土とシルトブロック層、厚柱に酸化鉄を含む。(木炭堆積層)
10	10YR12-2	灰青褐色	粘土シルト 10YR12-2層の青褐色土とシルトブロック層、厚柱に酸化鉄を含む。(木炭堆積層)
11	10YR12-2	黒褐色	粘土シルト 厚柱に酸化鉄を含む。
12	10YR14-4	にほく黄褐色	シルト 厚柱に酸化鉄を含む。
13	10YR12-2	黒褐色	粘土 10YR12-2層の青褐色土とシルトブロック層、厚柱に酸化鉄を含む。
14	10YR12-2	灰青褐色	粘土 厚柱にシルト・酸化鉄・高鐵付石など多く含む。(木炭堆積層)
15	10YR12-2	黒褐色	粘土シルト 10YR12-2層の青褐色土とシルトブロック層、厚柱に酸化鉄を含む。

検出長は、SD17A・B共に10.60m、上端幅は同じく約3.30～3.70mを測る。SD17Aの下端幅は80cm前後、深さは調査区境界壁面で117cmを測り、SD17Bの下端幅は1.50～2.20m前後、深さは調査区壁面で150cmを測る。断面形状はA・B共に逆台形を基調とし、SD17Aは「V」字形、SD17Bは箱形に近い。どちらの壁面にも凹凸がみられる。

堆積土は、A・Bを通して14層に分層された。1～10層はSD17Aの堆積土に相当し、にぶい黄褐色シルトと灰黄褐色粘土質シルトが互層状に堆積する。下半部に厚く堆積する9・10層は、水成堆積層である。また、SD17Aの堆積土中からは、底面直上を中心として多くの土師器や須恵器のほか、少量の琥珀片や雲母片等が出土した(第144図右側)。

11～15層は、SD17Bの堆積土に相当する。11層はにぶい黄褐色粘土質ブロックや炭化物・焼土粒を含む黒褐色粘土質シルトで、最大層厚50cm程を測る。12・13層は南西側壁面周辺において部分的に認められるもので、壁面の崩落土と考えられる。14層は上記した9・10層と同じく水成堆積層であり、直上には11層が堆積する。

この14層上面の中央部と調査区東側境界からは、炭化材が出土した(第144図左側)。この2点の材は80cm程の間隔を有するものの、本溝跡と軸を同じにして一直線上に並んだ状態を呈する。これらの材は、長さ約3.90m(中央部)および約80cm(東側)、幅は共に20～40cm前後、同じく厚さも2～3cm程を測る細長く脆弱なもので、明瞭な加工の痕跡は認められない。調査区東側境界から出土したものについては、さらに北東方向に延びる。

出土遺物については、掘り直されたSD17Aと掘り直し以前のSD17Bとで層位的に分離されることから、両者を区別して記載する。掲載した遺物の総数は58点(SD17A:45点、SD17B:13点)である。なお、これらの遺物については、SD17A・Bにおける器種組成および各器種における諸属性の量的傾向を反映したものではない。

SD17A出土遺物(第145～149図)

SD17Aからの出土遺物として、土師器坏12点・高坏4点・壺12点・瓶2点・ミニチュア1点、須恵器高坏3点・蓋6点・壺4点、刀子および石製品を各2点掲載した(第145～149図)。

土師器はもとより、須恵器が多く出土している点が特徴的である。また、想定される規模に対して調査範囲はごく一部でありながら多くの遺物が出土しており、その中でも底面直上から出土したものが量・器種共に多い。

第145図には、土師器坏および高坏を掲載した。土師器坏(1～12)の器形や整形技法には、いわゆる北武藏型に類似する特徴を有するものと、いわゆる在地系の特徴を有するもの、両者の折衷的なものが認められる。

1～4は体部以下が半球状で口縁部が短く直立するもので、1は底部に比べて分厚い口縁部がわずかに内傾する塊形に近く、体部上半には全周する幅3mm程の橙色範囲が認められるが、これが何に由来するものかは不明である。

2～4は口縁部形態が「S」字状を呈し、色調は橙色ないし浅黄橙色を基調とする。3は橙色を呈する外面上部と内面全体の剥離面から浅黄橙色の器面がみられ、器面に別胎土の粘土が上塗りされた可能性が考えられる。

推定口径9cm内外を測る小型の5・6は、胎土に径1mm程の小礫や石英を多量に含むもので、緩やかに内湾する体部と直立する口縁部の境界に明瞭な稜もしくは段を持つ。5は内外面共にヘラミガキ後黒色処理される。

7・8は内湾する体部と直線的にやや外傾する口縁部の境界に比較的明瞭な稜を持ち、7の外面口縁部は黒色漆仕上げされる。

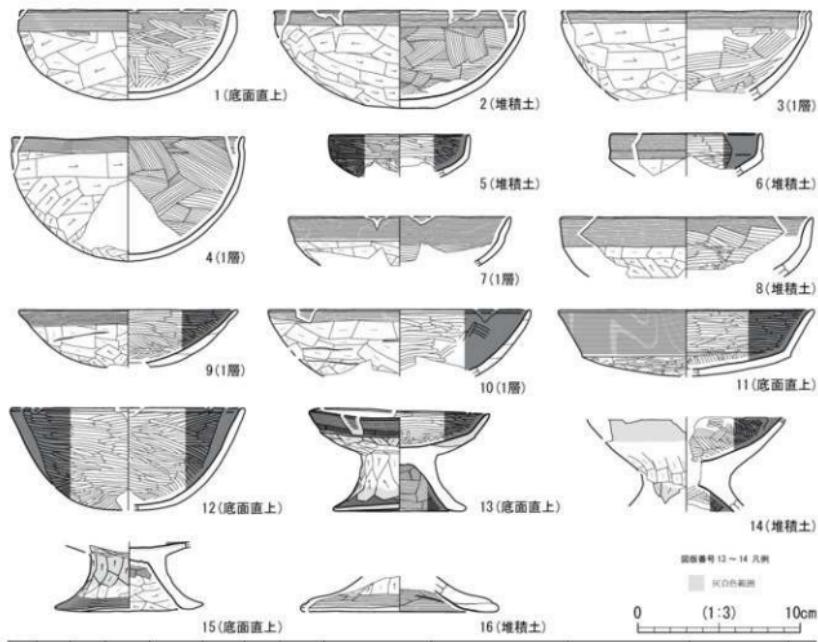
9は器高に対して口径が大きい丸底の皿状を呈し、器厚2mm程の薄い口縁部が短く外反する。内面は黒色処理される。

10は1～4に似た器形を呈するもので、内面の黒色処理と外面体部の輪積み痕が特徴的である。

11は平底状の丸底であり、外面共に外反する口縁部との境界に明瞭な稜を持つ。

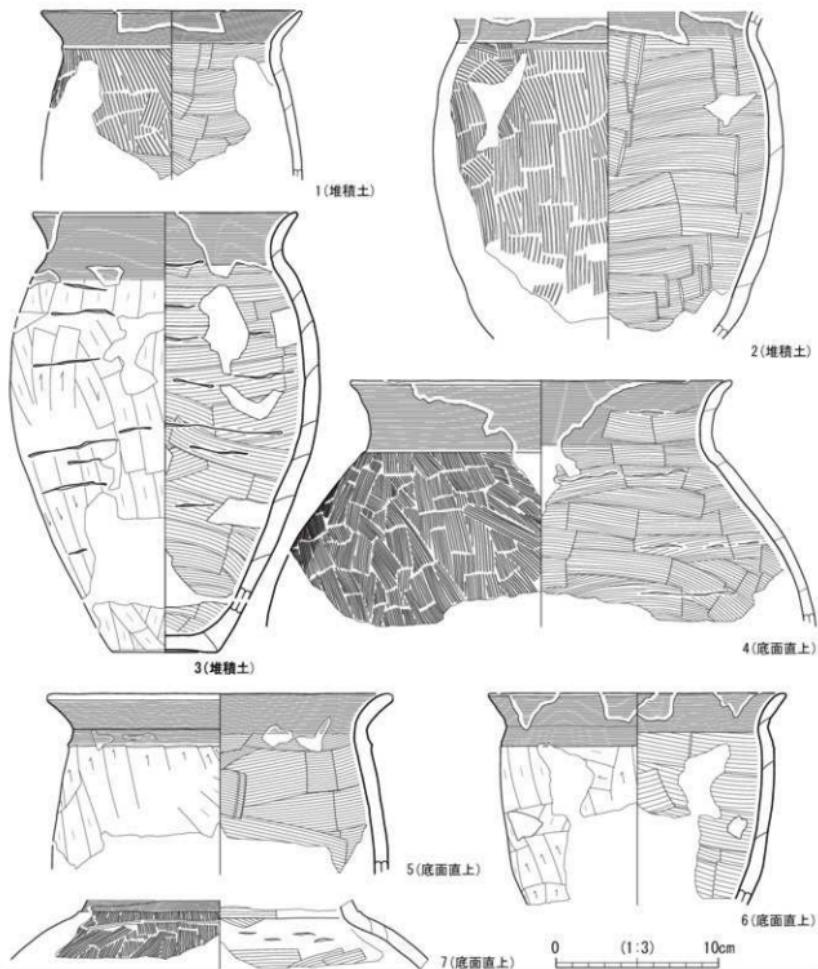
12は内外面共にヘラミガキ後黒色処理される塊形に近いものである。

土師器高坏(13～16)のうち、前三者については、少なくとも胎土が異なる二種類の粘土紐により成形されたもの、或いはその可能性が高いものである(巻頭カラー6参照)。坏部上半(口縁部～体部上半)と脚部下半(第145図ス



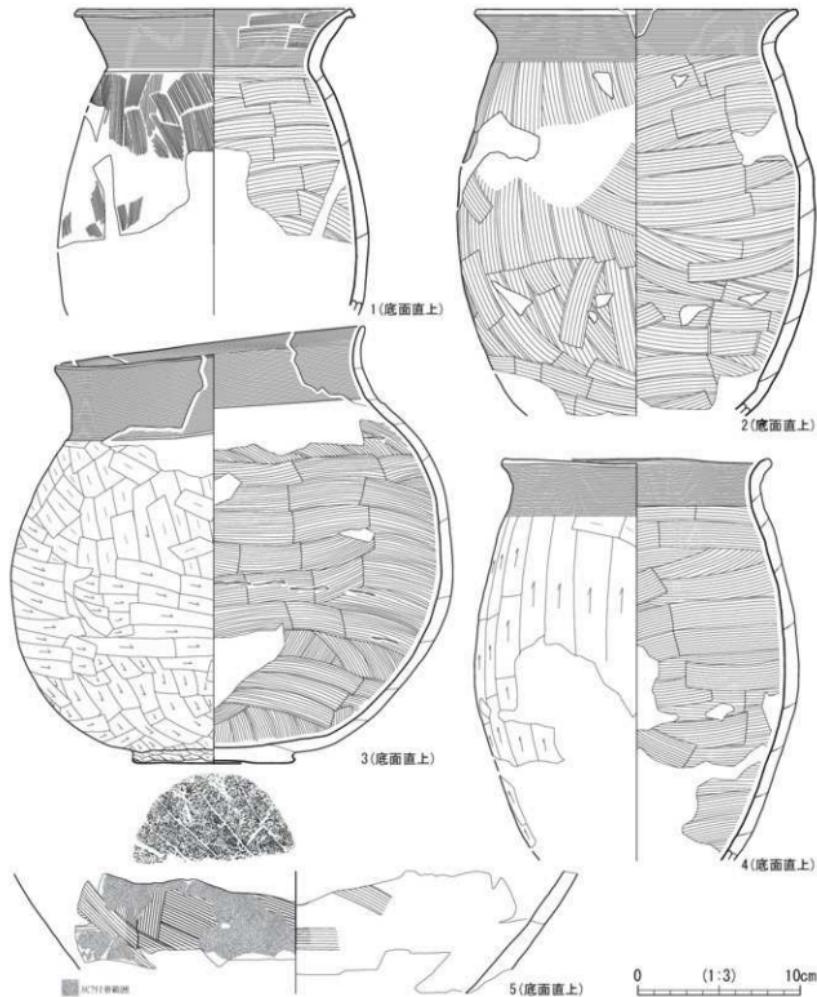
回数 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法量(cm)		外面調整	内面調整	備考	写真 図版	
								上径	底径					
1	C-199	HK	SD17A	底面直上	土師器	环	口縁～底 (略穴形)	13.4	-	4.4	口縁～体上部・外付 体～底・内付 9→9.4cm	口縁～体上半・外付 体～底・内付 9→9.4cm	外表面部上半に 幅3mmの擦色範囲	54
2	C-190	HK	SD17A	堆積土	土師器	环	口縁～底 (5.6)	-	6.0	口縁～外付 体～底・内付	口縁～外付 体～底・内付	外表面部上半に 幅3mmの擦色範囲	54	
3	C-201	HK	SD17A	1層	土師器	环	口縁～体 (5.4)	-	(5.5)	口縁～外付 体～底・内付	口縁～外付 体～底・内付	内外面部(粘土上 体・外付)	54	
4	C-191	HK	SD17A	1層	土師器	环	口縁～底 (4.4)	-	2.7	口縁～外付 体～底・内付	口縁～外付 体～底・内付	内表面黒	54	
5	C-196	HK	SD17A	堆積土	土師器	环	口縁～体 (6.4)	-	(6.6)	口縁～外付 体～底・内付	口縁～外付 体～底・内付	内外面部(粘土上 体・外付)	54	
6	C-193	HK	SD17A	堆積土	土師器	环	口縁～体 (9.4)	-	(2.6)	口縁～外付 体～底・内付	口縁～外付 体～底・内付	内外面部(粘土上 体・外付)	54	
7	C-194	HK	SD17A	1層	土師器	环	口縁～体 (3.8)	-	(3.0)	口縁～外付 体～底・内付	口縁～外付 体～底・内付	外表面漆付巣上げ	54	
8	C-200	HK	SD17A	堆積土	土師器	环	口縁～底 (5.7)	-	(3.5)	口縁～外付 体～底・内付	口縁～外付 体～底・内付	内外面部(粘土上 体・外付)	54	
9	C-195	HK	SD17A	1層	土師器	环	口縁～底 (3.6)	-	(3.5)	口縁～外付 体～底・内付	口縁～外付 体～底・内付	内外面部(粘土上 体・外付)	54	
10	C-197	HK	SD17A	1層	土師器	环	口縁～体 (6.2)	-	(4.1)	口縁～外付 体～底・内付	口縁～外付 体～底・内付	内外面部(粘土上 体・外付)	54	
11	C-198	HK	SD17A	底面直上	土師器	环	口縁～底 (5.8)	-	4.1	口縁～外付 体～底・内付	口縁～外付 体～底・内付	内外面部(粘土上 体・外付)	54	
12	C-192	HK	SD17A	底面直上	土師器	环	口縁～底 (5.6)	-	6.3	口縁～外付 体～底・内付	口縁～外付 体～底・内付	内外面部(粘土上 体・外付)	55	
13	C-205	HK	SD17A	底面直上	土師器	高环	口縁～脚 (略穴形)	11.2	脚径 8.2	6.2	口縁～外付 体～底・内付 9→9.1cm	口縁～外付 体～底・内付 9→9.1cm	内外面部(粘土上 体・外付)	55
14	C-203	HK	SD17A	堆積土	土師器	高环	口縁～脚 (2.2)	-	(5.8)	口縁～外付 体～底・内付	口縁～外付 体～底・内付	内外面部(粘土上 体・外付)	55	
15	C-202	HK	SD17A	底面直上	土師器	高环	口縁～脚 9.2	-	(4.3)	口縁～脚 9.2cm	口縁～脚 9.2cm	内外面部(粘土上 体・外付)	55	
16	C-204	HK	SD17A	堆積土	土師器	高环	脚下縁 ～脚 (12.2)	-	(2.2)	脚下縁 ～脚 (12.2)	脚下縁 ～脚 (12.2)	内外面部(粘土上 体・外付)	55	

第145図 SD17A溝跡出土遺物(1)



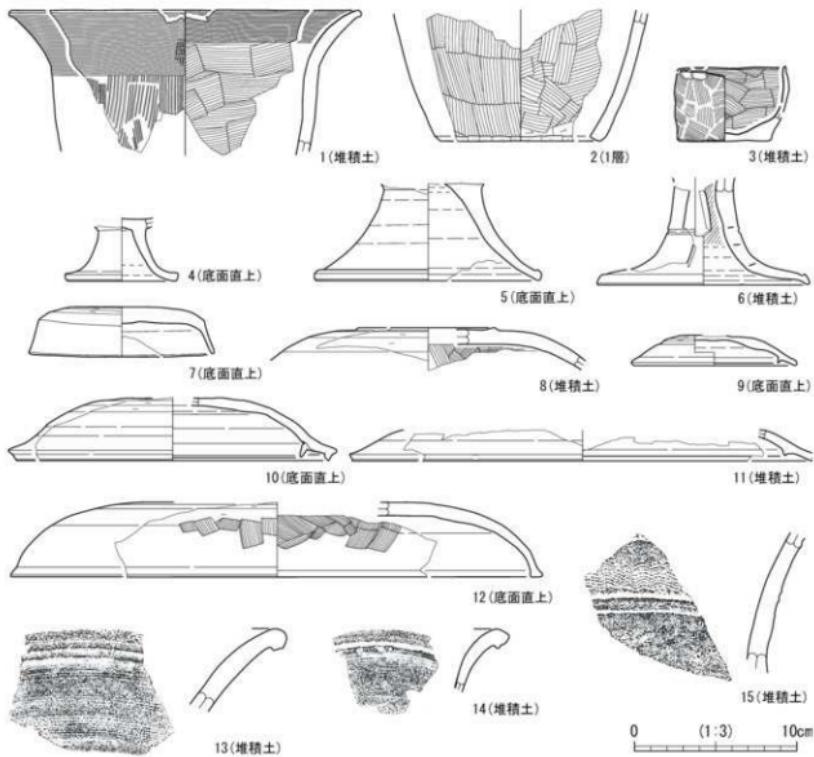
第146図 SD 17A溝跡出土遺物(2)

団版番号	登録番号	調査区	出土地	剖位	種別	器種	部位	法面(㎜)	外面測定	内面測定	備考	写真回数
1	C211	IIK	SD17A	堆積土	土器器	甕	口縁~胴	(16.2)	-(0.4) 口縁:32.9°, 脱:5.8°	口縁:32.9°, 脱:5.8°	-	55
2	C208	IIK	SD17A	堆積土	土器器	甕	口縁~胴	-	-(11.1) 口縁:32.9°, 脱:5.8°	口縁:32.9°, 脱:5.8°	-	55
3	C184	IIK	SD17A	堆積土	土器器	甕	口縁~底	(16.2)	6.5 (23.8) +(G.1) 口縁:32.9°, 脱:5.8°, 底:19.7°	口縁:32.9°, 脱:5.8°, 底:19.7°	外周被熱, 頂上復元	55
4	C210	IIK	SD17A	底面上	土器器	甕	口縁~胴	(23.6)	-(5.1) 口縁:32.9°, 脱:5.8°	口縁:32.9°, 脱:5.8°	-	55
5	C207	IIK	SD17A	底面上	土器器	甕	口縁~胴	(21.2)	-(11.1) 口縁:32.9°, 脱:5.8°	口縁:32.9°, 脱:5.8°	-	55
6	C214	IIK	SD17A	底面上	土器器	甕	口縁~胴	(18.5)	-(12.0) 口縁:32.9°, 脱:5.8°	口縁:32.9°, 脱:5.8°	-	55
7	C212	IIK	SD17A	底面上	土器器	甕	口縁~胴	-	-(4.2) 口縁:32.9°, 脱:5.8°	内面剥起	-	55



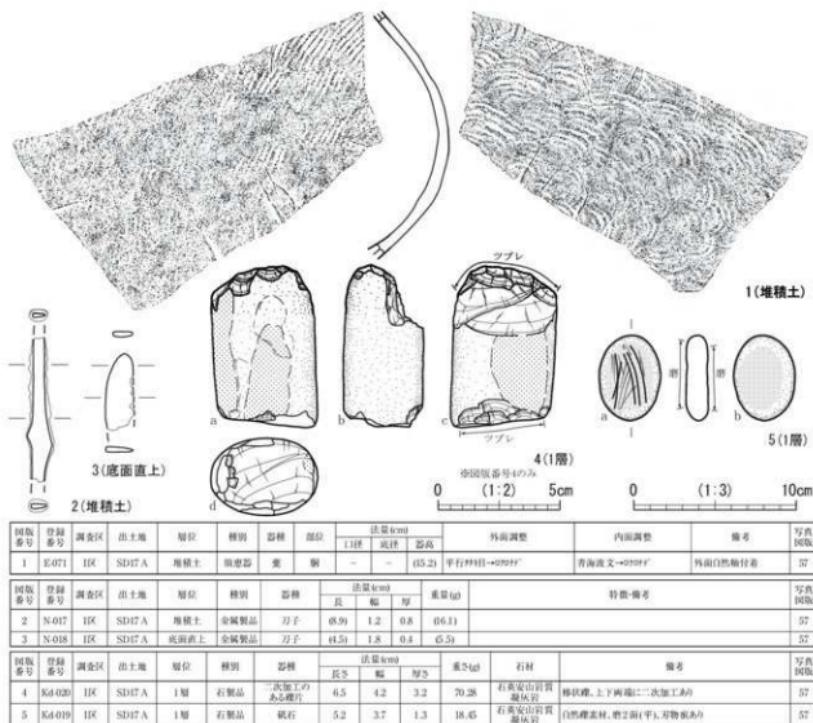
第147図 SD17A溝跡出土遺物(3)

団体 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法長(cm)			外側調整	内面調整	備考	写真 回数
								口径	底径	高さ				
1	C215	H'C	SD17 A	底面直上	土加器	甕	口縁~胴	16.5	7.5	-	(8.8)	口縁~32mm、底~5mm 腹~39mm	外面直部 底~39mm	56
2	C206	H'C	SD17 A	底面直上	土加器	甕	口縁~胴	20.0	-	(25.1)	口縁~32mm、底~39mm 腹~46mm	口縁~32mm、腹~39mm	外面直部 底~39mm	56
3	C216	H'C	SD17 A	底面直上	土加器	甕	口縁~底	19.2	10.0	27.0	口縁~32mm、底~43mm 腹~50mm	口縁~32mm、底~43mm	外面直部 底~43mm	56
4	C217	H'C	SD17 A	底面直上	土加器	甕	口縁~胴	(6.8)	-	(24.7)	口縁~32mm、底~39mm 腹~46mm	口縁~32mm、底~39mm	外面直部 底~39mm	56
5	C213	H'C	SD17 A	底面直上	土加器	甕	胴	-	-	(7.5)	59mm	59mm	外面直部 底~59mm C-041と同一箇所	56



回収番号	登録番号	調査区	出土土地	期位	種別	種類	基部	法長(cm)	外側調整	内側調整	備考	写真回数	
1	C-209	HK	SD17A	堆積土	土器部	瓶	口縁+胴	(21.8)	-	(0.9)	口縁~0.8cm→2.0cm、胴~0.8cm 胴~3.0cm、底~5.0cm	56	
2	C-218	HK	SD17A	1層	土器部	瓶	胴	-	(0.8)	(0.1)	胴~5.0cm、底~5.0cm	56	
3	C-219	HK	SD17A	堆積土	土器部	口縫+(胴穴形)	6.2	4.6	4.7	1.0cm~8.0cm、 →口縫+胴穴	手捻ね	56	
4	E-062	HK	SD17A	底面直上	頭骨部	高環	脚	-	6.8	(0.9)	口縫調整	手捻ね	57
5	E-063	HK	SD17A	底面直上	頭骨部	高環	脚	-	13.8	(6.0)	口縫調整	高脚部分	57
6	E-047	HK	SD17A	堆積土	頭骨部	高環	脚	-	(0.1)	(6.6)	口縫調整→泡化1条 下半:口縫調整	通傷+部分2割 ×0.3cm(口縫取)	57
7	E-064	HK	SD17A	底面直上	頭骨部	蓋	天井+口縫	10.6	6.5	3.1	口縫調整、天井+口縫~0.9cm →口縫	外自然軸付着	57
8	E-070	HK	SD17A	堆積土	頭骨部	蓋	天井+口縫	-	-	(2.6)	口縫調整、天井+口縫~0.9cm →天井~0.9cm	57	
9	E-065	HK	SD17A	底面直上	頭骨部	蓋	天井+口縫	10.2	-	(1.9)	口縫調整、天井+口縫~0.9cm →天井~0.9cm(図示なし)	外自然軸付着	57
10	E-067	HK	SD17A	底面直上	頭骨部	蓋	天井+口縫	(19.2)	-	(0.9)	口縫調整、天井+口縫~0.9cm →天井~0.9cm(図示なし)	57	
11	E-069	HK	SD17A	堆積土	頭骨部	蓋	天井+口縫	(28.4)	-	(1.9)	口縫調整	57	
12	E-066	HK	SD17A	底面直上	頭骨部	蓋	天井+口縫	(32.8)	-	(1.6)	口縫調整、 天井+口縫~0.9cm~0.9cm →口縫	57	
13	E-048	HK	SD17A	堆積土	頭骨部	蓋	口縫	-	-	(5.1)	口縫調整	57	
14	E-049	HK	SD17A	堆積土	頭骨部	蓋	口縫	-	-	(0.9)	口縫調整	57	
15	E-050	HK	SD17A	堆積土	頭骨部	蓋	口縫	-	-	(0.7)	口縫調整→泡化状、沈縫1条 ×0.3cm(口縫取)	57	

第148図 SD17A溝跡出土遺物(4)



第149図 SD17A溝跡出土遺物(5)

クリーントーン部分)が灰白色、それ以外は浅黄橙色ないし橙色を呈するもので、13・15については、坏部の断面でそれが明瞭に観察される。灰白色部分の土はキメ細かく、小砾や石英などの混入物が観察されないので対し、それ以外の箇所については径1mm程の小砾や石英を含み、今次調査で出土した多くの土師器と共に通す。

また、13は灰白色部分が須恵質でこれ以外が土師質、14は全体的に土師質、15は全体的に須恵質と、三者の質感は異なる。これが何に由来するのかは明らかにし得なかったが、今次調査で出土した多くの土師器の中でも一際特徴的なもので、今後なお検討を要する。器形については3点共にいわゆる在地系の特徴を有するもので、13・15の脚部には強いヘラケズリによる面が形成されており、隣り合う単位間には明瞭な稜が観察される。

第146・147図には、土師器を掲載した。概して胴部中位に最大径を持つものが多く、最大径を口縁部に持つものは1点(第146図-6)のみである。

最大径の位置が判然としないもの(同図-1・2・5)については、口縁部と胴部中位がほぼ同径となるものと推定され、破片資料が多いものの、いわゆる在地系の土師器に特徴的な下彫れの胴部形状を呈するものは認められない。

外面の胴部と頭部の境界については、段を持つもの(第146図-1・2・4～7、第147図-1・3)と持たないもの(第146図-3、第147図-2・4)に大別され、後者はいずれも口縁部が比較的短く外反するものである。

また、この3点と口唇部に窪みを持つ第147図-1については、胴部下半が底部に向かって窄まるような器形を呈する。外面に灰のような付着物が認められる第147図-5については、同一個体破片がSI3堆積土下層から出土している(第58図-9)。

土師器瓶は2点掲載した(第148図-1・2)。今次調査で出土した瓶の調整はヘラケズリが多いなかで、いずれもヘラナデを主とするものである。2の孔周辺は部分的なヘラケズリが施される。同図-3は手捏ねにて成形される平底のミニチュアである。

須恵器高坏は3点掲載した(第148図-4～6)。いずれも脚部の破片資料である。6は2段2窓の透かしが設けられる長脚のもので、上下の透かし間に横位の沈線が1条施される。4と共にタッパ状に開く裾部が特徴的である。なお、4・5は高盤の脚部となる可能性がある。

須恵器蓋は6点掲載した(第148図-7～12)。8・9はつまみが付くもので、10・11についてもその可能性がある。9のつまみ部は欠損の状況から打ち欠かれた可能性がある。12は外側に張り出す口縁部から天井部へと内湾して立ち上がるるもので、天井部にはハケメ状の回転ヘラケズリが施される。

須恵器甕は4点掲載した(第148図-13～15、第149図-1)。第148図-13・14はいずれも頸が付く口縁部破片で、断面形状は上端に丸みを帯びるものである。同図-15は外面に櫛状工具による波状文と1条の沈線が施される頸部破片である。

刀子は2点掲載した(第149図-2・3)。2は柄や間に對して刃部幅の細いものである。

石製品は2点掲載した(同図-4・5)。4は棒状の砾を素材とした砾片で、上下両端部を粗削りし、縁辺にはツブレ状の二次加工が施される。Kd-019は扁平な梢円砾を素材とした砥石で、a・b面共に中央の平坦面は全面に磨痕が観察され、a面はこれに擦痕と複数条の刃物痕が加わる。石材は、4・5共に石英安山岩質凝灰岩である。

SD17B出土遺物(第150図)

SD17Aから出土した遺物とは対照的に、SD17Bから出土したものは量・器種共に少ない。土師器坏5点・甕1点、砾石器3点、土錘3点、刀子1点を掲載した(第150図)。

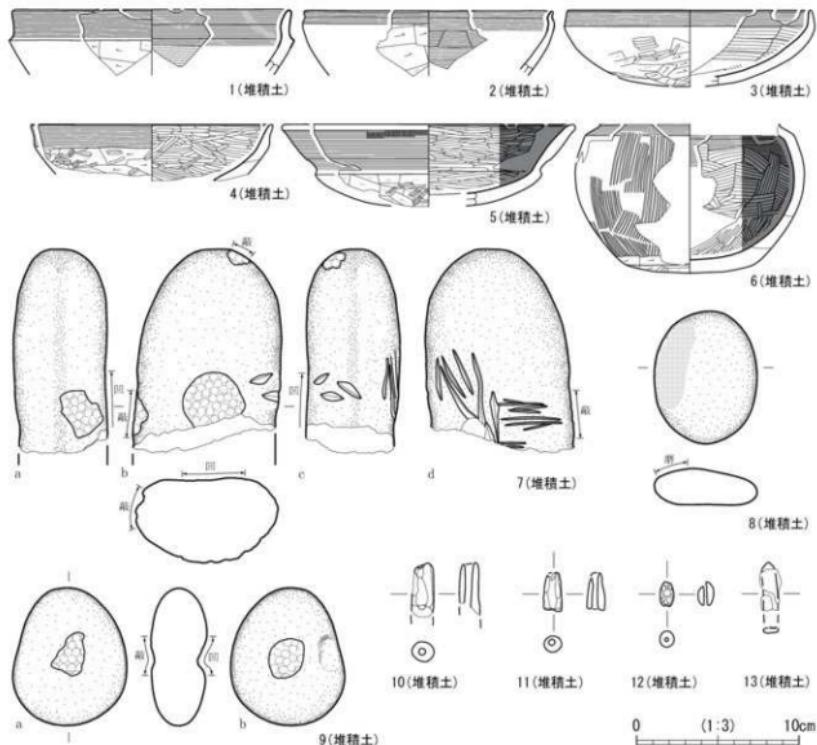
調査範囲や出土点数が少ないながらも、土師器坏については、いわゆる北武藏型に類似する特徴を有するものと、いわゆる在地系の比率、また須恵器については欠落する点に特徴が認められる。

土師器坏(1～5)のうち、1～4はいずれも外面の口縁部と体部の境界に段もしくは棱を持ち、口縁部が短く、直立しないそれに近い形態を呈するものである。破片資料が多く判然としないものの、底部形状は半球形状を呈するものと推定される。口縁部がやや内傾に入り込み直立する1、「S」字状に直立する2、直線的にやや内傾する3、2に比べてやや外傾する4と、口縁部形態は各々異なる。内面調整は4のみ全面にヘラミガキが施されるもの、4点共に黒色処理は認められない。

これに対し、5は上端が短く外反する口縁部が器高の約1/2を占め、緩やかに内湾する体部以下との境界に幅1cm程の窪みを持つものである。内面はヘラミガキ後に黒色処理される。

1点のみ掲載した土師器甕(6)は、球胴気味の胴部中位に最大径を持つ平底状の丸底で、内傾する頸部と胴部の境界には棱を持ち、口縁部が短く直立する。このような器形の特徴は、いわゆる在地系のものとは異なるものである。外面胴部は、ハケメが施された後に下端から底部にかけてヘラケズリが施される。内面は、ヘラナデ後に黒色処理される。

3点掲載した砾石器(7～9)の石材は、前者が石英安山岩質凝灰岩、後二者が石英安山岩である。7は横断面が不整梢円形を呈する柱状砾を素材としたもので、a～dの各面下端部に使用痕が観察される。8は扁平な梢円砾を素材とした砥石で、片面左側縁側の平坦面に磨痕が観察される。9は不整円砾を素材としたもので、a面の中央に敵



国版
登録
番号
調査区
出土地
層位
種別
器種
部数
法量(cm)
外面調整
内部調整
備考
写真
回数

国版 登録 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部数	法量(cm)			外面調整	内部調整	備考	写真 回数
								長	幅	厚				
1	C-172	IIK	SD17B	堆積土	土器器	环	1	1.0	0.0	0.0	11.0	11.0	58	
2	C-169	IIK	SD17B	堆積土	土器器	环	1	1.0	0.0	0.0	11.0	11.0	58	
3	C-178	IIK	SD17B	堆積土	土器器	环	1	1.0	0.0	0.0	11.0	11.0	58	
4	C-171	IIK	SD17B	堆積土	土器器	环	1	1.0	0.0	0.0	11.0	11.0	58	
5	C-170	IIK	SD17B	堆積土	土器器	环	1	1.0	0.0	0.0	11.0	11.0	58	
6	C-173	IIK	SD17B	堆積土	土器器	环	1	1.0	0.0	0.0	11.0	11.0	58	

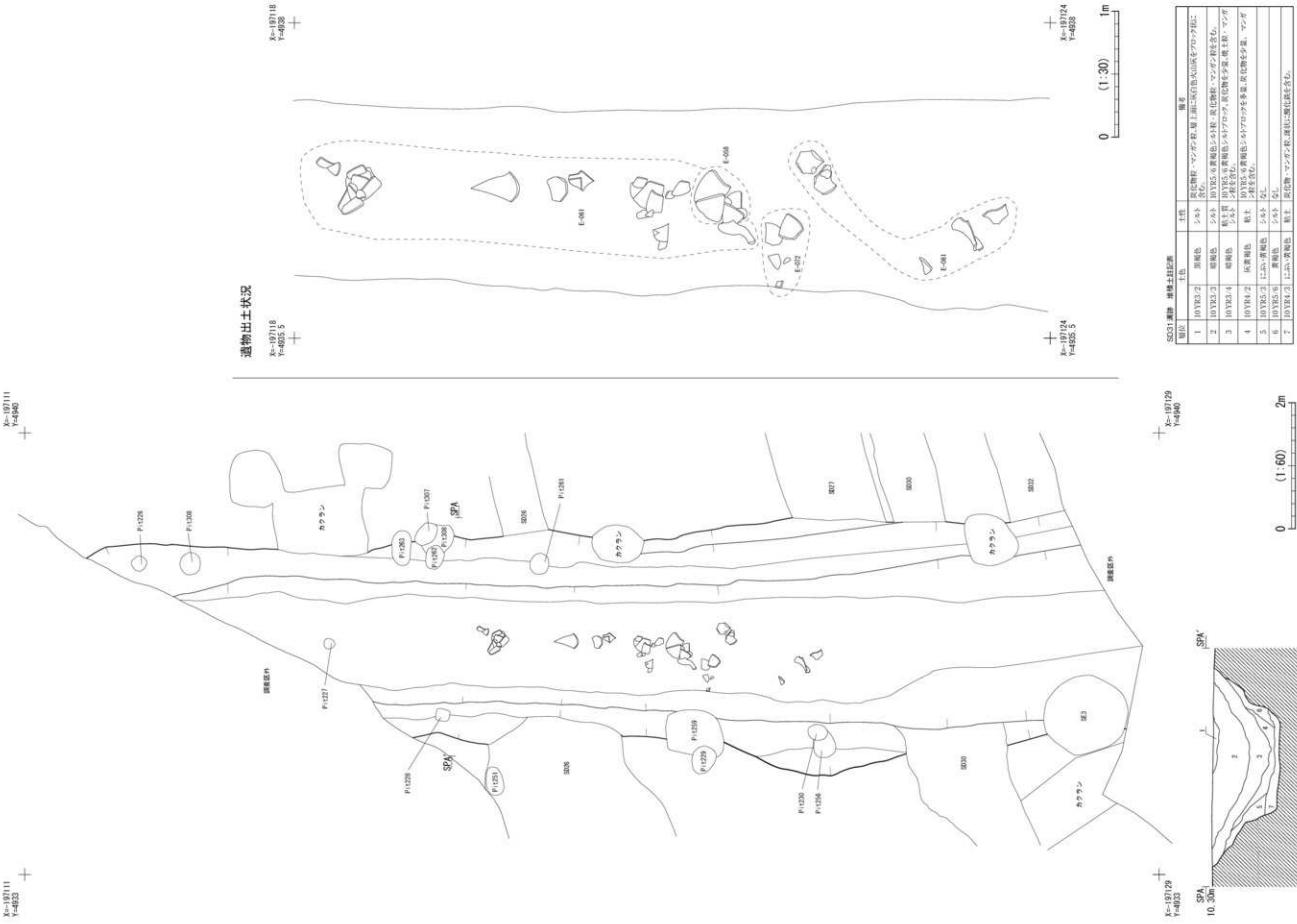
国版 登録 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部数	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真 回数
								長	幅	厚				
7	Kc-019	IIK	SD17B	堆積土	砾石器	西・直	12.6	9.1	5.8	602.20	右美安山岩 灰白色 中等硬度 无裂隙 无杂质 无风化	石刀 石刀(手)深2.4cm 石刀(手)深2.4cm 石刀(手)深2.4cm	58	
8	Kc-021	IIK	SD17B	堆積土	砾石器	砾石	8.2	6.4	2.5	76.22	右美安山岩 椭圆型 表面平	58		
9	Kc-018	IIK	SD17B	堆積土	砾石器	凹・直	8.5	6.7	3.5	280.81	右美安山岩 不规则形 凹一面(深)深2.4cm 凹一面(深)深2.4cm	58		

国版 登録 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部数	法量(cm)			重量(g)	特徴・備考	写真 回数
								長	幅	厚			
10	P-012	IIK	SD17B	堆積土	土製品	土師	0.3	1.1	1.2	4.5	1.9	1.9	58
11	P-013	IIK	SD17B	堆積土	土製品	土師	2.4	1.1	1.0	1.9	1.9	1.9	58
12	P-014	IIK	SD17B	堆積土	土製品	土玉	1.5	0.9	1.0	0.9	0.9	0.9	58

国版 登録 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部数	法量(cm)			重量(g)	特徴・備考	写真 回数
								長	幅	厚			
13	N-010	IIK	SD17B	堆積土	金屬製品	刀子	0.29	0.9	0.4	0.27	-	-	58

第150図 SD 17B溝出土遺物

第151図 SD31溝跡(那山Ⅱ期官衙外溝)



打痕、b面の中央に凹痕が観察される。

土製品は3点掲載した(10～12)。いずれも指頭調整により整形されるもので、10・11は小型の土鍤、12については土鍤としての用を成すものとは考え難く、土玉とした。

鉄製品は1点掲載した(13)。断面形状は長方形状を呈する刃部片である。

SD31 溝跡(郡山II期官衙外溝)(第10・151～154図)

IV区東半部中央、H-7・8グリッドに位置する。SI69、SD20D・21・24・28を切り、SD26・27・30・32、SE3に切られる。また、本溝跡の3層上面には、燃焼施設の可能性が考えられるSX3が構築される。

本溝跡は、南北方向に直線的に延びる大規模な溝で、南北両側は調査区外に延びる。IV区において検出された規模は、長さ16.75m、上端幅3.13～4.04m、下端幅0.96～1.67m、検出面からの深さは0.70～1.10mを測る。断面形状は東西両壁面の中央部が括れる逆台形状を呈する。

なお、本遺跡内においては、IV区北壁から約75m北に設定された、第2次調査に伴う確認調査1トレンチで平面プランを検出し(本章第1節、第10図)、この1トレンチから北側のII区北側拡張区(第3次調査:現在整理中)からも本溝跡の一部(底面の痕跡)が検出されている。第2次確認調査1トレンチ内の規模は、本章第1節を参照されたい。

また、平成17(2005)年度に本遺跡の北側で行われた郡山遺跡第167次調査において、SD13とした本溝跡の北西コーナー部が検出されている(現在整理中)。

IV区から検出された部分での堆積土は、暗褐色を呈するシルトないし粘土質シルトを主体とする7層に分層される。1～3層はレンズ状に堆積し、1層の上位には10世紀第1四半期の降灰と考えられる十和田a火山灰(To-a)と目される灰白色火山灰を含む。

3層上面検出時には、本溝跡と同軸となる南北直線上に断続的に5.5m程並んだ状況で、須恵器破片を中心として多数の遺物が出土した(第151図右側)。これらの中には、第153図-1のように接合・復元されたものも認められることから、埋没過程において廃棄された須恵器が破片化した後、その一部が移動したものと考えられる。

このほか、3層上面検出時には、燃焼施設と考えられるSX3(本節(7))が検出されたことから、本溝跡は本来の機能が失われた後、埋没過程において何らかの形で再び利用されたものと考えられる。

本溝跡からの出土遺物としては、土師器壺・甕を各3点、須恵器壺1点、甕5点(甕?1点を含む)を掲載した(第152～154図)。

土師器壺3点(第152図1～3)のうち、1の器形はいわゆる鬼高系の特徴を有し、内面の整形技法はいわゆる在地系に特徴的な全面ヘラミガキ後に黒色処理されるもので、折衷的様相が認められるものである。堆積土中から出土したもので、本溝跡廃絶後に流入したものと考えられる。

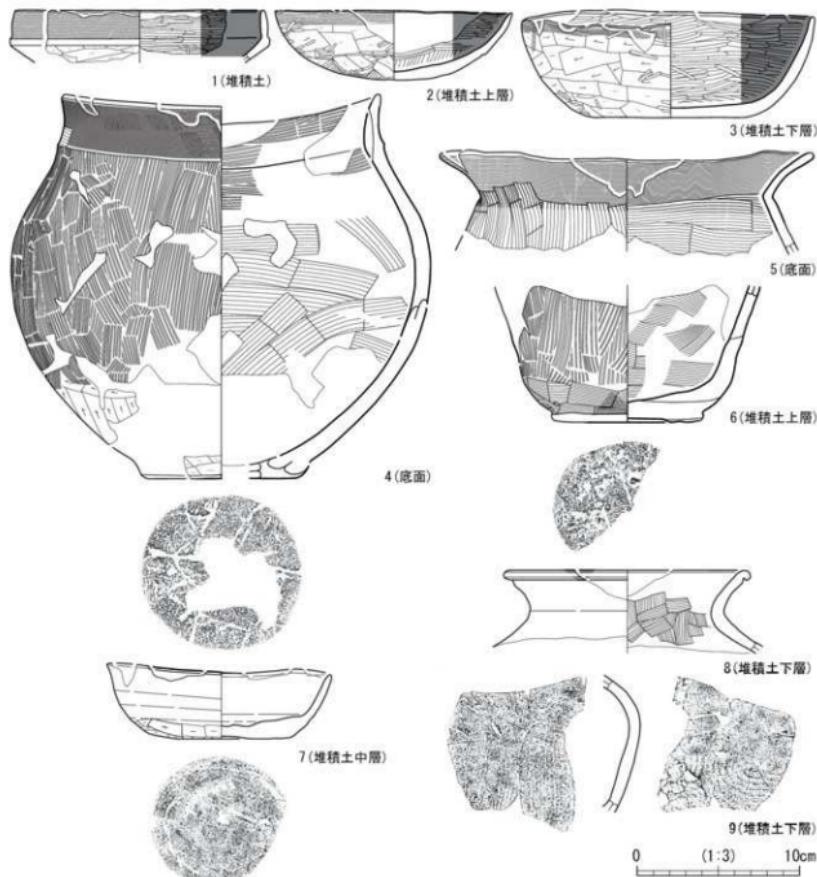
2は緩やかに内湾する体部から口縁部がわずかに直立気味となるもので、外面体部中央に形成された段がヘラケズリにより、殆どが失われているものである。外面の色調は浅黄橙色を基調とし、一部橙色を呈する箇所が認められる。3は口径・底径が共に大きい平底の土師器壺である。

土師器甕は3点掲載した(同図-4～6)。4・6は共に底部と胴部の境界に括れを持つものである。6は胴部下端に横位のヘラナデが施される。

須恵器壺(同図-7)は平底で内湾する体部へと立ち上がり口縁部上端が短く外反する器形を呈し、体部下端から底部には回転ヘラケズリ後に手持ちヘラケズリが施されるものである。

須恵器甕は5点掲載した(同図-8・9、第153・154図)。89は同一個体と考えられるもので、肩が張る小型のものである。外面肩部には火拂痕、同口縁部には沈線にも似た窪みが観察される。

第153図、第154図-1・2は、南北の直線状に断続的に並んで出土した、大型の須恵器甕(甕?を1点含む)である。

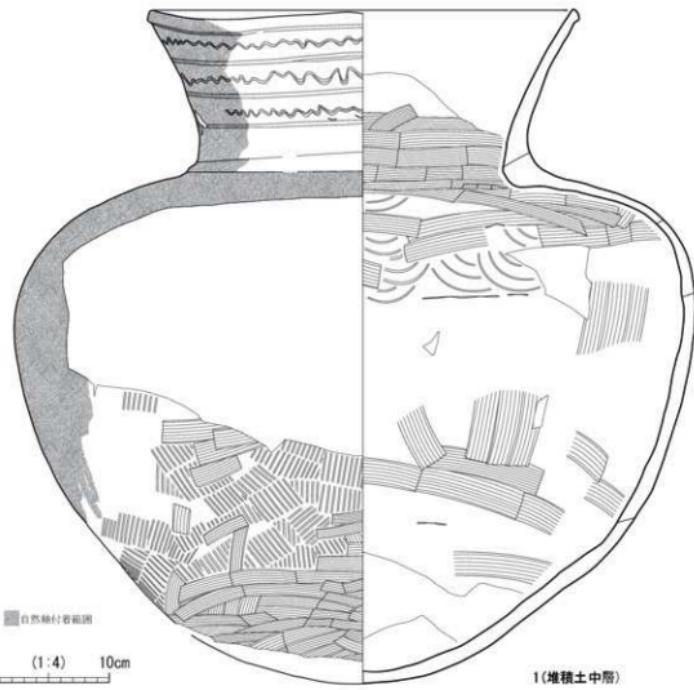


固版 番号	登録 番号	調査区	出土場	層位	種別	器形	部位	法長(cm)	外側調整	内面調整	備考	写真 図版		
1	C-179	WIK	SD31	堆积土	土器器	环	口縁~全体	(15.2)	-	口縁:3.3mm、底:5.9mm	<0.18°	内面黒色處理	58	
2	C-180	WIK	SD31	堆积土上層	土器器	环	口縁~底	(14.7)	-	口縁:3.3mm、底:5.9mm	<0.18°	内面黒色處理	58	
3	C-178	WIK	SD31	堆积土下層	土器器	环	口縁~底 (45度)	18.1	9.6	6.6	口縁:3.3mm、底:5.9mm 内面:1.8mm	<0.18°	内面黒色處理	58
4	C-183	WIK	SD31	底面	土器器	束	口縁~底	(19.2)	9.2	23.7	口縁:3.3mm、底:5.9mm 内面:1.8mm	<0.18°	内面黒色處理	58
5	C-182	WIK	SD31	底面	土器器	束	口縁~脚	(23.2)	-	6.2	口縁:3.3mm、脚:5.9mm	<0.18°	内面黒色處理	58
6	C-181	WIK	SD31	堆积土上層	土器器	束	脚~底	(8.2)	(8.4)	脚:5.9mm、脚~底:5.9mm	<0.18°	内面黒色處理	58	
7	E-057	WIK	SD31	堆积土中層	土器器	环	口縁~底	(13.0)	8.0	4.7	口縁:3.3mm 体下端:底~脚:5.9mm	口縫調整 →底:5.9mm (同示なし)	内面黒色處理	58
8	E-059	WIK	SD31	堆积土下層	土器器	束	口縁~底	(14.8)	-	(5.1)	口縫:3.3mm	口縫調整 → 底:5.9mm	外曲火拂痕、 E-060上同一直体	58
9	E-060	WIK	SD31	堆积土下層	土器器	束	口縁~脚	-	-	(8.4)	脚:5.9mm 脚~底:5.9mm	脚:5.9mm →脚~底:5.9mm	E-060上同一直体	58

第152図 SD 31溝跡(郡山II期官衙外溝)出土遺物(1)

第153図に掲載した大型の甕は、器高約55cmを測るもので、体部下半に垂みが認められる。肩部と肩部の境界に最大径を持ち、強く張る肩部と直線的に外傾する頸部の境界は湾曲し、上端にわずかな頸を持つ口縁部へといたる。また、外面の口縁部から頸部にかけては、ほぼ並行する3条沈線と幅狭の櫛状工具による波状文が互層に施されるが、沈線・波状文共に引き直しの痕跡が数箇所に観察され、絶じて稚拙である。外面上半部には、この沈線や波状文が覆われる程に自然釉が厚く付着する。

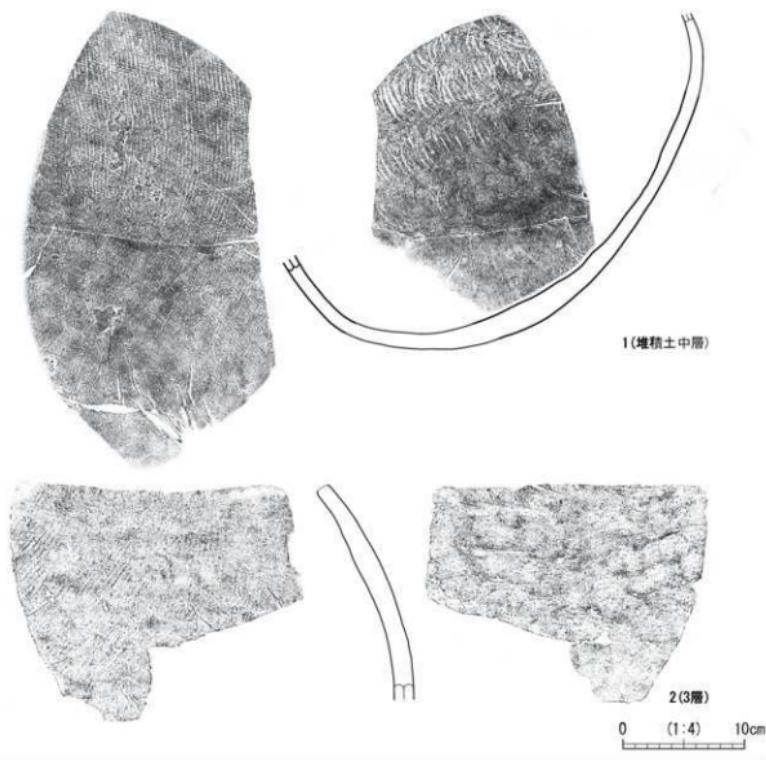
第154図-1は、器形の垂みが著しい胴部下半の破片資料である。観察表では堆積土中層としているが、2～3層のいずれかに属するものである。内面底部に付着する自然釉からみて、第153図に掲載したものよりも砲弾状に近い器形であったものと思われる。



図版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法量(cm)			外側調整	内面調整	備考	写真 図版
								口径	底径	基高				
1	E-061	BTK	SD31	堆積土中層	須恵器	甕	口縁～底	(35.0)	—	55.3	口縁～底：外側調整 →凹線3条、櫛幅5mm波文、 底～底：平行33mm→33mm	内面：青海波文→ハサナ、 底：凹33mm	外面上手ねじり 内面底部自然釉付着、 底に垂み	59

第153図 SD31溝跡(郡山Ⅱ期官衙外溝)出土遺物(2)

同図-2は、上端にヘラケズリによる面が形成されている。内外面における整形技法の特徴から大型壺の破断面が再加工された可能性がある。器種については壺?としたものの、残存する破片からみて本来の器形は第153図の壺を凌駕する大型品と推定される。



第154図 SD31溝跡(郡山II期官衙外溝)出土遺物(3)

(5) 土坑(第155図)

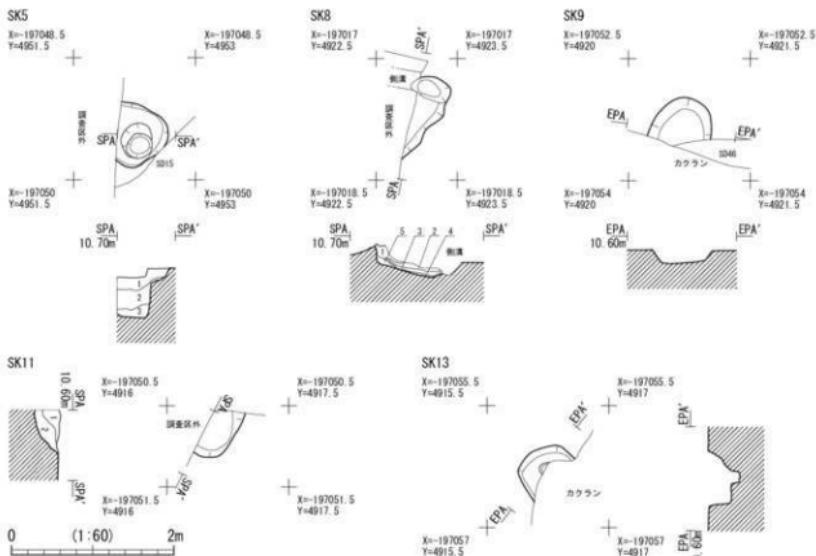
I区から1基、II区から4基、計5基の土坑が検出された。搅乱の影響を受けているものや一部分が調査区外に延びるなど、全体形が不明なものばかりである。

検出された範囲での平面形状は、円形基調や方形基調、或いは不整形なものと様々で、規模においてもまた同様である。

回数 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法蓋(cm)			外面調整	内面調整	備考	写真 回数
								上口径	底径	蓋高				
1	E-072	WIK	SD31	堆積土中層	須恵器	壺?	胴~底	-	-	(27.5)	平行四辺形→八角形	青海波文→八方彌	内面底部自然剥離付着、 型内に歩入	60
2	E-058	WIK	SD31	3層	須恵器	壺?	胴	-	-	(37.7)	平行四辺形→八角形、上端→八角形	青海波文→八方彌	上端の付け足は 施釉部一二次調整か	60

このような検出状況に加え、すべての土坑から遺物が出土していないこともあり、性格については不明と言わざるを得ないものの、II区に位置するSK13については断面形状から柱穴の可能性が想定される。

これらの土坑については、個別に記載せず諸属性を観察表にまとめて示した。なお、I区に位置するSK8については、調査時においてはSI18の煙出し部としていたが、後に調査区壁面にて上面からの掘り込みが確認されたため、個別の土坑として区別されたものである。



土坑(古代) 離解表

遺構名	調査区	アグリッド	平面形	幅員(cm)		層位	土色	土性	備考	重複
				長軸	短軸					
SK5	IIK	B3	円形	75×861	69	1	10YR3/-2	黒褐色	シルト	10YR5/4にE4・黄褐色シルトブロックを含む。 SD6Aに切れる。
						2	10YR3/-2	黒褐色	シルト	10YR5/4にE4・黄褐色シルトを複数に、炭化物粒を含む。 SD11に切れる。
						3	10YR3/-2	黒褐色	シルト	10YR5/4にE4・黄褐色シルトブロックを含む。
SK8	IIK	F-1	不整形	(105)×(148)	40	1	10YR2/-3	暗褐色	シルト	10YR5/6黄褐色シルトブロック・炭化物粒を含む。
						2	10YR2/-3	黒褐色	粘土質シルト	炭化物粒・地土粒を含む。
						3	10YR2/-2	黒褐色	粘土質シルト	瓦礫状に炭化物粒を多量含む。
						4	2.5Y3/-3	褐色	シルト	地土粒を含む。
						5	10YR2/-2	黒褐色	シルト	10YR5/6黄褐色シルトブロック・地土ブロックを含む。
SK9	IIK	F-3-4	楕円形	75×862	15	-	-	-	エレベーションのみ。	SD44を切る。 SD46に切れる。
SK11	IIK	F-3	椭丸方形	661×606	20	1	10YR3/-3	暗褐色	粘土質シルト	10YR5/6黄褐色シルトブロック・炭化物粒・マンガン鉱を含む。
						2	10YR3/-6	黄褐色	シルト	10YR3/3暗褐色粘土質シルトを複数に多量、 マンガン鉱を含む。
SK13	IIK	F-4	椭丸方形	68×622	38	-	-	-	エレベーションのみ。	SD5を切る。

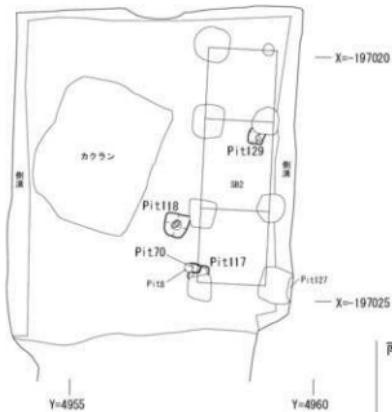
第155図 土坑(古代)

(6) ピット(第156~159図)

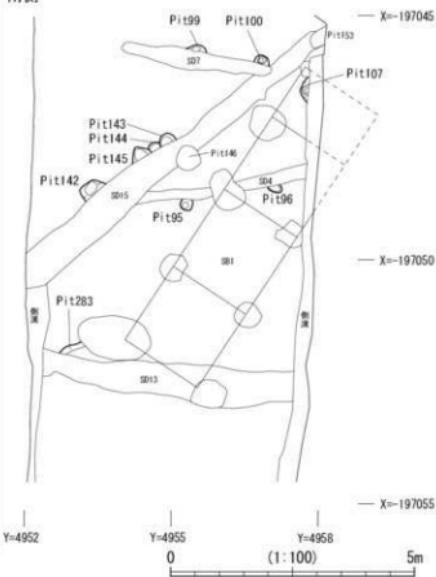
I区から15基、II区から7基、IV区から2基、VII区から2基、計26基のピットが検出された。これらのうち、柱痕跡が認められたものは、I区で3基、II区・IV区で各2基を数える。

分布等から柱列として組めるようなものは認められなかったものの、IV区中央部から検出されたPit248・249は230cm程離れては南北に並び、規模はほぼ同一の値を測ることから、掘立柱建物跡もしくは柱列を構成する可能

北側



南側



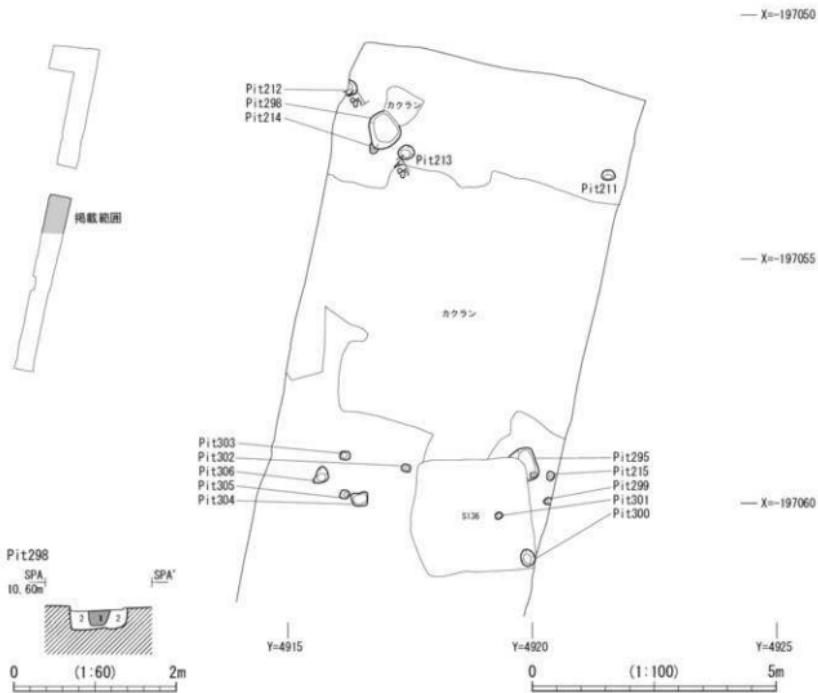
第156図 I区ピット(古代)

性がある。なお、このPit248・249は、SD31(郡山Ⅱ期官衙外溝)の西側上端から約6.5m西に位置する。いずれにしても、周辺に構築される後世の遺構や搅乱の影響等もあり、判然としない。

これらのピットについては、個別の記載をせずに諸属性を観察表にまとめて示した。なお、遺物が出土したものはない。

(7) 性格不明遺構(第160~163図)

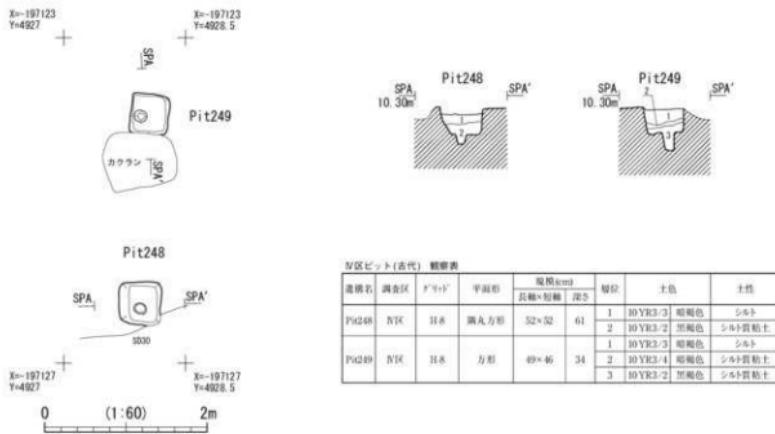
I区およびIV区から各1基、計2基の性格不明遺構が検出された。このうちIV区から検出されたSX3については、



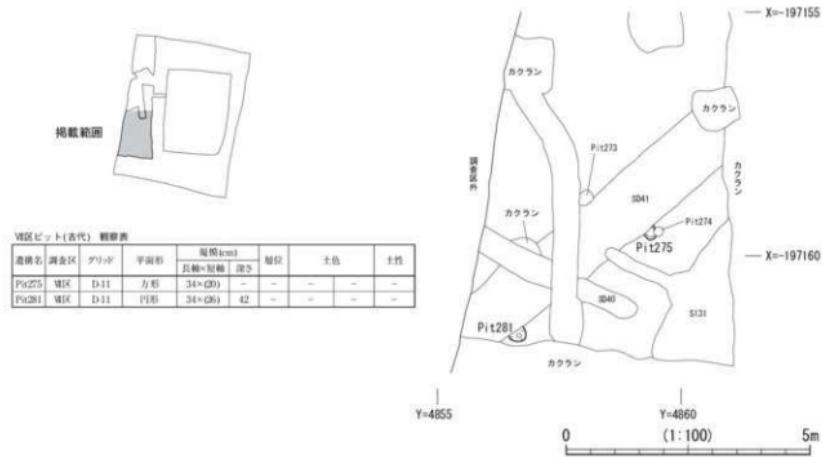
II区ピット(古代) 観察表

遺構名	調査区	F-T(x)Y'	平面形	規模 (cm)		層位	土色	土性	遺構名	調査区	F-T(x)Y'	平面形	規模 (cm)		層位	土色	土性		
				長軸	短軸								長軸	短軸	深さ				
Pit211	II区	F-3	不規円形	27	21	11	-	-	Pit299	II区	F-4	円形	14	×	(14)	13	-	-	-
Pit212	II区	F-3	円形	30	× (18)	21	-	-	Pit300	II区	F-4	円形	24	×	28	16	-	-	-
Pit213	II区	F-3-4	不規円形	32	× 28	32	-	-	Pit301	II区	F-4	円形	16	×	14	3	-	-	-
Pit214	II区	F-4	不規円形	16	× (12)	42	-	-	Pit302	II区	F-4	圓角方形	17	×	14	16	-	-	-
Pit215	II区	F-5	圓角形	17	× 14	10	-	-	Pit303	II区	F-4	圓角方形	21	×	16	14	-	-	-
Pit295	II区	F-4	圓角方形	68	× (48)	33	-	-	Pit304	II区	F-4	圓角方形	31	×	28	41	-	-	-
Pit298	II区	F-3-4	圓角長方形	71	× 64	36	1	10TRG/2 黒褐色 シルト	Pit305	II区	F-4	圓角方形	18	×	17	6	-	-	-
				2	10TRG/2 黑褐色 シルト				Pit306	II区	F-4	小細形	33	×	28	13	-	-	-

第157図 II区ピット(古代)



第158図 IV区ピット(古代)



第159図 VII区ピット(古代)

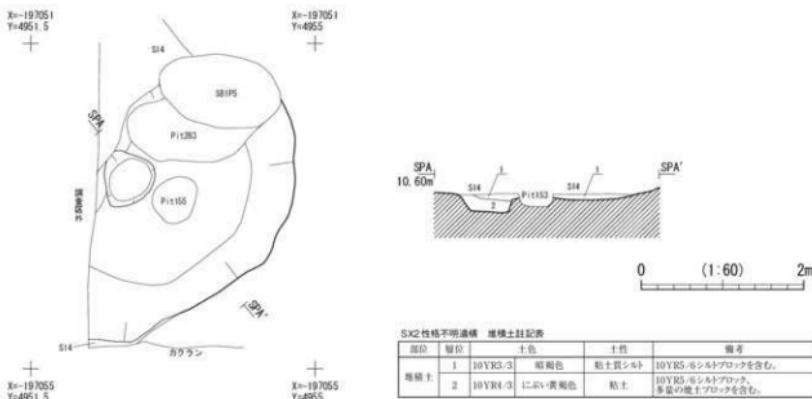
SD31(郡山Ⅱ期官衙外溝)堆積土中に構築されたもので、郡山Ⅱ期官衙外溝の埋没過程および埋没過程における溝跡利用状況を検討する上で好資料といえる。

以下、今次調査において検出された性格不明遺構について個別に記載する。

SX2 性格不明遺構(第160図)

I区南半部中央、H-3グリッドに位置する。SI4、SB1、Pit155・283に切られ、西側の一部は調査区外にかかる。検出された範囲の規模は、長軸377cm、短軸252cm、深さ7cm前後を測り、平面形状は不整橢円形、断面形状は皿状を呈する。底面に硬化面や被熱等、使用に伴うような痕跡は認められず、長軸中央部北西側の底面には、上端径約70cm、下端径約50cm、底面からの深さ25cm程を測り、平面形状が不整円形、断面形状が逆台形を呈するピット状の掘り込みが伴う。

堆積土は2層に分層された。このうち、2層は底面に構築される掘り込み内に堆積したものである。にぶい黄褐色粘土で多量の焼土ブロックを含むものではあるが、掘り込みの内部や周辺には被熱の痕跡が認められないことから、使用に伴うものではなく廃棄後に由来するものと思われる。本遺構からの出土遺物は無い。



第160図 SX2性格不明遺構

SX3 性格不明遺構(第161～163図)

IV区南東部、H-8グリッドに位置する。本節第4項にて記載したSD31(郡山Ⅱ期官衙外溝)堆積土3層上面検出時において、散在する多数の遺物に混在し、押し潰されたような状態の土師器壺とその周りを囲むような状態を呈する被熱した粘土範囲が検出されたため、裁ち切りを実施した。その結果、土師器壺の直下にも焼土の括りが認められたため、遺構略号SXを付し、調査に着手した。

その後の調査の進展に伴い、本遺構は掘り方とその内側に馬蹄形に貼り巡らされた粘土、粘土範囲内から出土した土師器壺で構成される燃焼施設の可能性が高いものと考えられた。

本遺構は、長軸をN-51°-W(N-129°-E)に持つ。掘り方の規模は、長軸96cm、短軸55cm、深さ5～21cmを測り、平面形状は不整橢円形、断面形状は不整な逆台形を呈する。底面は皿状に窪み、長軸北西側は同南東側に比べて10cm程低い。長軸方向の壁は、北西側が143°、南東側が159°と、いずれも鈍角に立ち上がる。

掘り方の上端から5cm程内側には、掘り方の壁面形状に沿うように馬蹄形に貼り巡らされた粘土(以下、「粘土」と記載する)が検出された。粘土の範囲は長軸70cm、短軸49cmを測り、長軸北西側が30cm開口する。粘土と掘り方の間には、炭化物粒や焼土粒を含む黒褐色シルトが充填されている状況が認められた。堆積土の土層記述については、第161図を参照されたい。